樹葉針



第十號

東京商科大學一橋山岳部

日の丸印

一ツポン紅茶

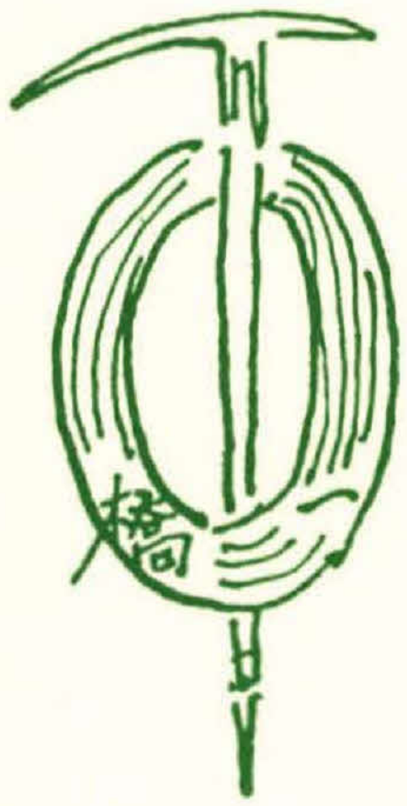
一杯ハ登山ノ慰ニ
モなんぶデス





日本紅茶株式會社 製造
三菱商事株式會社 發賣

樹　葉　針



第　十　號

1937——1939



雪煙映ゆ

森川眞三郎



又白池畔の幕營（1938. 1）　　小谷部全助

針葉樹第十號

目次

前穗高東面に就いて……森川三郎……一
記錄……船本文治……一
昭和十二年度……大塚武……一
昭和十三年度……日江正已……二五
昭和十四年度……井眞……四五
部誌（昭和十二年四月——十四年六月）……五一
寫眞說明……五〇

寫眞

○雪煙映ゆ……卷頭
○千蛇谷にて……對記錄
○雪稜を辿る……對記錄一

圖版

○前穗高東壁　附圖Ⅰ（北尾根四峯頂上より）……對二六
○同　附圖Ⅱ（松高尾根上部より）……同
○四峯バットレス附圖Ⅲ（又白池より）……對二六
○前穗高東面概念圖Ⅳ……卷末

前穂高東面に就いて

一、序　——反省と新しき出發へ——

二、登攀及行動

A　主要なる岩場に就いての一覺書

B　無雪期の奥又白

C　積雪期の奥又白

三、雪崩に就いて

A　四人の日記より

B　批判

四、凍傷に就いて

A　經過報告

B　原因及び反省

附圖　Ⅰ、前穂高東壁（北尾根四峯頂上）

Ⅱ、前穂高東壁（松高尾根上部より）

Ⅲ、四峯バットレス（又白池より）

Ⅳ、前穂高東面　概念圖

一、序 ——反省と新しき出發へ——

前穗高東面、奥又白側にかゝる幾多の興味あるゲビートに我々が關心を持ち始めたのは、一九三六年一月、小谷部、鷹野によつて奥又白谷より北尾根への登行が行はれた時にも始まると云へよう（針葉樹9記錄15頁參照）。同年暮第一回の試が小谷部、森川によつてなされた（同50頁參照）。然し我々がこの領域に對して眞に腰を据ゑて構へたのは、翌三七年夏以來の事である。爾後殆んど四季に亘つて奥又白との交渉は絶えなかつた。然し「事故の無い、着實な行き方」を以て一つの誇としてゐた我々は、奥又白に就いては何か宿命的な感じを受ける程、多難な路を辿らねばならなかつた。この間の經過こそ、何よりも我々自身にとつて、そして又このリポートを我々の部の忠實なる表現ならしめる爲にも不可缺の意義を持つものであり、それに就いて次の個々の記述自身に語らせる前に一應全體としての觀察を試みたいと思ふ。

一九三六年の初冬、森川は獨り負傷した小谷部を殘して前穗高に登り、歸途又白の池に憩ふて初めて雪の附いたこの大岩壁の連りを眺めた時以來、燒けつく樣な强い印象を與へられた。そして翌年の夏合宿を了えて劍澤から縱走して上高地に入り、再び氣を新にして夏草の茂る奥又白に入つた時、「次の我々の對象はこゝでなくてはならぬ」と云ふ氣持は、森川を中心としてかなり具體的な形を伴つて來た。同年秋第二回目の奥又白入りも偵察行として極めて滿足す可き成果をあげて、率直に云ふなら我々は二ケ月後のこの岩壁に對して、滿々たる自信と燃える樣な鬪志とを

持つてゐた。かくしてその冬に樹てられた計畫は從來の、殊に部員の少ない我々のグループでは常に惱みの焦點であつた「敢登と指導」とを一擧に解決して、極めて尨大な又强力なものとして現はれた。この計畫に對して當時の部が如何に張り切つてゐたかは、殆んど全部員に近い豫定參加人員一七名に對して、實際の參加人員が一五名であつた事からも肯れよう。

然し、この云はゞ形而上の意味をも持つてゐた「計畫の遂行に對する烈々たる努力」は、餘りにも苛酷な現實に蹉跌し、之が又意想外の餘波を及ぼす事にならうとは當時誰が想像し得たであらう。とは云へ、當面の問題としては計畫の縮少こそ餘儀なくされたのであるが、最後のアタツク自體に對しては登攀隊もサポート隊も尙充分の力を持つてゐた。そして執拗な惡天候に阻まれ乍らも遂に池に天幕を建設した時には、再び「明日こそ俺達の壁になる」との昂揚した氣分を以て、雪煙の卷上る岩峯を仰いだのであつた。然し吹雪は最後のアタツクをも擊退して、「我々には力も自信もあつた。唯天候がいけなかつたのだ」との言葉を殘さしめるに止つた。

嚴しい冬も過ぎて春が訪れ再び我々は山に向つた。然し勿論特殊な事情があつたのではあるが、この時には十二月の樣な內發的な累積的な部としての力は見られなかつた。唯「最早數少い最後のもの丶魅力」が個人的ではあるが、最も挺身的な突擊を行はしめたのである。が之は色々な意味で缺陷多きものであり、而もその結果は前にも增した苦汁となつて現はれた。

「前穗高の東壁は登られた」。然し我々がそれに拂つた値はどれ程大きかつた事であらう。

こゝで我々は「何故奥又白にかくまで執拗に挑んだか」に就いて反省せねばならない時に至つてゐる。この事は「登りたいから登るのだ」と云へば、或ひはそれ迄の事であらうが、我々のグループの間で殆んど疑ない迄に力強く主張された部全體としてのアルピニズムが、生長から兎も角も一つの頂點へ進んだ現實的な投影であると共に、そのトレーガーを全く變更した新しい次元の者の型造る部にとつては、それから如何に進んだか、又進む可きであるかの出發點をなしてゐる事を思へば、勿論單なる、云はゞ本能的な衝動に因つて片附けられる事ではなからう。

惟ふに、當時既に數少いバリエーションルートの追究と所謂遠征熱との眞只中にあつて、我々程遠征に對して冷淡であつた部も少いであらう。然し「出來ないからだ」とは考へ度くない。むしろ現實的な考へ方が色々な意味で支配的であつた事が、その原因であらうと思はれる。然し注意せねばならない事は、我々の場合にはその行動自身が大學山岳部の登山の本質であり、それは退嬰的な氣分との結合では決してなかつた點である。勿論我々のグループの間でも、ヒマラヤが稱譽され、バウワーが憧憬も沸き起されたのであるが、敢て云ふなら、それこそ本質ではなく、むしろロマンチツクな氣分に通ずるものであつた。

かくして我々のアルピニズムが最も順調な發展を示してゐた時、ある者は、我々の行動の底流として次のものを指摘した。卽ち「スポーツ的登山」、「スポーツ的登山」、「部としての協同體」と云ふ三つの意識である。そして「しめやかなる激情」、「スポーツ的登山」との結合の意味に於ける上構へ（Aufbau）を打樹てゝゐるのだと考へ、「部」の土台の上に「スポーツ的登山」と「部ねたのである。この點にこそ、登山を自己目的と觀じる根據を見、又この點にこそ我々が結びつく可き一點を求めて

然し二十名前後の部員の間にも、この様に伸びて行つた流に對して、必ずしも正確なピンがあつたのも亦事實である。そしてある先輩が「外見上如何に華々しい活躍をしようとも、同じ苦勞をし乍ら仲良くやつて行けない様な部なら何の價値もない」と云つた時、若い部員の温泉スキーでやつて行けるのは當然の話だ。部に對して抱くものが大きくなれば、この様な傾向が生ずるのも仕方がない。部の方針としてのアルピニズムは絶對的だ。互の立場を認め合ふ包容力さへあればやつて行けるのだ」と言ふ答が聞かれたのみであつた。

かくして持ち來たされたアルピニズムの充實は、それ自身として破綻がないばかりでなく、「學生々活は之でやつて行ける」と云ふ程の強力な外觀を呈した。

然し我々はこの外形を肯定せしめる理論的基礎づけに「荒澤奥壁最後のアタツク」との所謂ポーラーメソードによるこの一點で結びついてゐるとされたのであらうか、このまゝ甘んづる事は出來なかつた。顧るに「北岳バツトレス」と「荒澤奥壁最後のアタツクは、この様な意識の具體的表現として選ばれた部の意識から湧き起り流れ出たものであらうか。問題は後に從ふ理論附けではなく、眞に部が動いて來た基礎でなければならない。かく見れば、このアタツクこそ、一つの行動の基礎としてあつたものが意識ではなく、初登攀と云ふ多分に情熱的な要素であつた事は決して否定出來ない事實であらう。むしろ我々が、その意識に基いて動いたのだと思辨したものと思つたものは、實は本質を外れたものであつたと云はねばならない。いより優れたものだと云はれる程烈しい而も呼吸の合つた登攀をしたとしても、それで君等「ザイルに血が通ふ」と云ふ心は眞に結び合つてゐ

たと言へるか」と云はれた時感じられた、何か咽喉を通り難い塊が、外形的には確に完成した部としてのアルピニズムを揺り動かして行つた事は、考へれば又當然の運命でもあつた。そしてその轉換の機をなしたものが二つの事故（アクシデント）であつたと云へよう。

確に十二月の雪崩と三月の凍傷とは、三人の指導的部員を第一線から失つただけではすまなかつた。かく云ふ事に於て私は、我々の部の運命を過度にこの二つの事故に因果的に結びつけやうとしてゐるかも知れない。一體に我々の様な小人數のグループで、而も一つの新しい流に乗つてまだ日も淺い部では、一切がそれに據り懸つてゐる人的要素の上の變動も見逃す事は出來ない。然しこの二つの事は或ひは指導的なる者の側に於ける自信の喪失から或ひは中堅部員のアルピニズムに對する評價と懐疑から、又或ひは、初登攀と云ふ要素の一層の缺亡が、この基礎からすれば常に見出し得可き新鮮な表現を現實的に困難ならしめる等のプロセスを以て、今や我々は最も困難な立場に臨まねばならなくなつた。

以上に述べた如く、アルピニズムを外形的に部の中に持ち込んで部全體のものとしやうとした、云はゞ機械的な試が遂に内的基礎を持ち得なかつたとすれば、我々は改めて何處に向つて進む可きであらうか。

「登山とは」、「學生々活と登山とは」、「山岳部の本來のありかたは」等の最も根本的な問題は再び避く可からざる障壁となつて來た。山岳とその登攀が絶對的なものだとするには我々はあまりに平民的であり、エクスペディションを本來のありかたとするには余りに弱力であるのみならず、選ばれた數人のみが可能なる一つの目標に向つて部が存立する爲には、我々の現實的にして自我に目醒めたる意識は又疑はざるを得なかつた。この恐らく我々のグループ丈で

ない問題に對して、私は部の進行が行はれたプロセス自身の中に解決の萌芽を見出し得るのではないかと思ふ。

　　鼓で今迄屢々用ひられたアルピニズムなるもの〻意味が、一應鮮明にされねばならない。アルピニズムが單なる輕業的技術でない事や、又國外エクスペディションのみでない事は先づ肯れる所である。「然らば」と云はれゝば、簡潔に示すならば、「實踐的登山を通じてより深く進まうとする精神」と云ひ得るのではなからうか、と云ふ意味に解するならば、我々の歩んだプロセスが何故アルピニズムを部の中に持ち込む點に於て破綻を來したかは最早かなり明瞭となり、新しき出發が何處からなされねばならないかもこの點から解けて來るのではなからうか。

　　即ち、我々の破綻は部員一人々々にこの精神を受入れる心構へが不充分であつたのではなく、むしろ部全體のものとして汲み取る爲の、部員の間の第一次的結合がなかつた點に最大の原因を持つてゐたのである。つまりかゝる行方を自然ににじみ出させる溫床が、充分でなかつたのである。「山が好きだと云ふ事丈で仲良くなれる」と云ふ easy-going な意味に取られ易い結合の中から、拾ひ出されるものを無視してゐた點にあつたのである。

　　然しこの部員相互の生活の底に於ける接觸と理解とを通じての結合は、大體似通つた環境に在り而も山が好きだと云ふ共通因子を以てさへも、決して考へられる程簡單なものではない。が私達は先づこゝで結びつかねばならない。絶對的結合は望めないだらう。然し相對的結合に希望を見出す可きだ。この基礎的結合の上に成立したアルピニズムが、更に Aufbau の上で第二次の結合をなす時、私達の先輩から私達へ渡されたバトンはその目的を達したのだと

云へよう。そして此の基本的結合は、外形的アルピニズムの殘滓よりも眞の部としてのアルピニズムに對して、より良き溫床を呈する事はかなり容易に肯定される可きものであらう。

二、登攀及行動

この項目の下に以下の記述を爲すに當り、最も苦しんだのはその錯雜せる地形に對する無統一の名稱である。例へば北尾根三峯から延びて、三、四のコルから落ちるルンゼと東壁直下から發するルンゼとを分けて奥又白ボーデンに至る稜の如きは、或ひはインゼルと呼ばれ（ヨツホ、3）或ひはサネ尾根（わらぢ、4）と呼ばれてゐる。

そしてこの稜の兩側のルンゼも夫々全く調停す可からざる名稱を附せられてゐる。更に單一の名稱しか附せられてゐても、必ずしも適當と思はれざるものもあり（例へば東壁正面に張り出す約百米の垂直な矩形の大岩盤を右岩稜と云ふが如き（わらぢ、4——）、從來私達のグループで使ひ馴れたものを用ふる事とし、かなりの困惑を感じたが結局、煩瑣でも適當な名稱の無いものはそのまゝとして新しい名稱を附する事をしなかつた。用ひられた名稱については、附圖と照應すれば意味は通づると思はれるのでこゝに述べる事を避け度い。

A、主要なる岩場に就いての一覽書

之は一つの覺書であつて、現在その必要も少いと考へられるが、唯以下の記述に於て、多少ちな不明を除く爲に、附圖の記號により私達の經驗の範圍内で簡單に記して置く。

前穗高東壁に就いて

普通云はれる様に、この眞正面には約百米の矩形の岩盤が張り出してゐる。このフエースはれるものでルートはこの兩側にとられる。

(1) 右側のルート (附圖I參照)

正面に張り出した岩稜とdフエースとの間は、松高によれば北壁とBリツジよりなるもので、は北壁乃至dフエースとのコンタクトラインを、積雪期の登路は上部でBリツジに入つたもの先づインゼルの左のルンゼ（このルンゼには二つの瀧がある）をつめると正面岩盤の直下に出る。なほルンゼにコンクリートの壁の様なdフエースが構へてゐる。（A點）つて右へ入ると目の前の下端に沿つて辿るもので雪のある時は問題なく、Bが取付となる。Bは困難である。Cは五米位の岩で右捲きに登るのであるが一A—Bはdフエースの交じつた急な所で、ハーケンなしには確實なジツヘルは不愉快な若干草

寸悪い。C—Dは北尾根四峰の頭から見ると確にテラス状をなしてゐるが、實際行つて見ると今迄の緊張を解かれてホッとする位で、特にテラスに着いた感じを與へない。BリッジからDまでは今迄の急崖とは違つて岩も大きくなり、右手にdフエースの鉋で削つた様な無氣味なフエースを見乍ら快適な登攀。D—E—Fは大きなリスについて右上りに登るルート。FからGは、極めて岩の緩んだ積木の様な感じのする所で不愉快である。Hは池からも仰がれるもので、この壁を特徴づけてゐる廣い然し傾斜したテラスで、最後の壁を背に奥又白ボーデンを眼下に見下して憩ふ氣分は素適に良い。aフエースは岩も堅く最もスツキリした登攀が味へる（附圖Ⅱ參照）。略々中央のクラックを登るのが普通で、一ピッチIに至る。

このクラックのつめで右から左上に出るのであるが、仲々バランスの難しい所。之を越えるとかなり廣い溜り場に出て全く解放される。IからJは大きなリスについて右上に上るもので最早問題はない。三〇米丁度一ピッチ、Jで岩は終り、頂直下の斜面をザイルを手繰つて行けば前穂高頂上の大きなケルンに出る。

（2）左側のルート（附圖Ⅱ參照）

cフエース又は正面岩盤とのコンタクトラインを登るもので、向つて左へ行く程草が附き傾斜も緩くなる。コンタクトラインとは第一テラスの北端の下、青白く色の變つた岩から眞直ぐ落ちてゐる部分で、正面岩盤の直下から左に取り附いて草の混つた急な面を右に左に上へ上へと登る。青白い岩の邊りは縦のクラックに沿つて上ると第一テラスに着く。こゝまで大きな溜り場は全くないので、落石の危險とジツヘルの不安に尖つた神經はこゝで全く解放される。第一テラス、第二テラス間の正面のbフエースは割目は多いが傾斜が強く、この四〇米は容易ではなからう。一

般には第一テラスの北端を廻り込む様に、第二テラスに續く緩いガラ場の稜線に出て容易に第二テラスに至る。

この二つが最も代表的なもので之以外については次の個々の紀行に譲り度い。

四峯バットレスについて（附圖Ⅲ參照）

この岩場程種々なルートが刻まれ、それ等が夫々各自の名稱を以て華やかな雰圍氣を醸してゐる所も少ないであらう。私達も二回の偵察行と三回のアタックをなし、夫々異なるルートを印してゐる。

(1) Aから取付くもの

インゼルの右側のルンゼに入つて小さい瀧を越すとこの岩から上へ延ある。之は池からも良く見える。その向ふの小さいルンゼから取付くもので、Bでルンゼを離れるリッジに出る、輕い登攀、（C點）。C—Dは緩い平易な場所、Dでアンザイレン、こゝから二ピッチ、このリブを一寸登つてから右側のリブに移る（E點）。D—E間三〇米一ピッチ、こゝは所謂オーバーハングの帶の下に當る所で、上下共に極めて傾斜強く洵に斷崖上の一支點と云つた感じ。F—Gはこのオーバーハングの帶に沿つて約一五米のトラバース、ホールドは小さく僅に草の附いたバンドでかなり緊張させられる。G—Hは傾斜は強いが灌木の根が摑める。Hは私達の所謂「祠（ホコラ）」で人間一人Fから三〇米一ピッチでHに着く。この邊確保用のハーケンを打たねばならない。

位入れる岩穴をなし、この中にケルンを積んでをいた。

この「祠」から右へ出て六、七米の浅いクーロアルに入る、極めてホールド少く殊にその出口Iは悪い。私達も一九三八年十月、來る可き冬の登攀に備へて四本ばかりこのクーロアールに打つてをいた。G—Iで丁度、オーバーハング帶の勢の弱くなつた部分を乘越すわけであり、その上のJで事實上の登攀を終り、ザイルを手繰つて頂まで歩ける。（以上は一般に「明大ルート」と呼ばれてゐる）

（2）A′から取付くもの

B′までは四峯バットレス末端の岩塔狀の岩の間のルンゼを登る。B′からC′までは左上へ行けさうな所をドン〳〵登るもので別に問題はない。C′からFまでは大きなクーロアールに入るもので上へ行く程惡く、Fに出る當りは仲々の惡場、傾斜全く強くハーケンなしには萎縮して手が出ない。

（3）甲南ルート

之は私達の仲間では完登したものではない。草の附いた廣い帶について、この帶の終點までつめて見たに止る。五峯側から見た所では此のつめから所謂オーバーハングの帶を越す邊りはかなり惡さうである。これは「甲南ルート」と心安く云はれるが、寡聞にしてその後餘り登られた話も聞かない。（關西岳聯報告、Ⅳ參照）

（4）正面岩壁

之も私達のグループでは完登したものではない。B″から急な草の僅についた帶に從つて登るとオーバーハングの直下C″に出る。こゝまでは別に難しい登攀ではない。C″は池からも見える白く變色した溜り場で、こゝまで登つた人は

かなりある。この上のオーバーハングの乗越は下が下だけに極めて困難なもので松高の人達の成功に敬意を表したい。（「山と渓谷」55號參照）然しC″まで來て引返すとなると、下りはアップザイレンにせよ充分な注意を要する。

私達はこの他三峯奥又白側、五峯フエース等も登つてゐるが特にとりあげる程のものとは思はれないので、次の個々の紀行に譲る。

B、無雪期の奥又白

（1）一九三七、八、一——八、五

小谷部、望月、森川、佐々木、日江井

岩壁を目指して最初の奥又白入り。然し長い縦走の後でもあり、一旦下山して灘の生一本を背負つて上高地に入り更に池に上る者もあり、それ程張りつめた氣分ではなかつた。

八、二　快晴

（A）四峯中南ルート試登（小谷部、望月、佐々木）

五人一緒にB″に至り分れて甲南ルートへ。佐々木不調、途中で引返す。小谷部、望月バンドのつめまで行くも愈々乗出さんとして動く岩に氣分を悪くし簡單に止める。

（B）四峯正面岩壁試登（森川、日江井）

C″まで好調、オーバーハングを一應アタックしてみたが退却と決す。下のバンドに小谷部達がゐるので一寸上つてもらひ、ザイルを下から繋いで二五米一杯の壯快なアップザイレンで下る。

八、三　快晴

（A）四峯バットレス（小谷部、森川）

A′より取付きB′、C′を經てFに經り、以後記號通り完登する。C′—Fの間、H—Iの間を惡いと思つた。所要五時間半。

（B）aルンゼより前穗高（望月、佐々木、日江井）

八、四　快晴

（A）前穗高東壁（森川、日江井）

右側のルート。取付點迄のルンゼのクレバス、シュルンドに苦勞する。dフエースとのコンタクトラインにかなり忠實に登る。早稻田の人が負傷した時のザイルの切れ端等を見る。Fより第二テラスへ出ず、直接Kを目指して登る。クラツク多く、上部はハーケンの效く割目の多いフエースを登つて、頂上迄所要四時間半。

（2）一九三七、一〇、二〇—一〇、二五

小谷部、森川、大塚、日江井

池の面には薄氷が張つて、それへ威壓的な壁が影を落す。私達の氣分も冬に具へてピンと張つてゐる。新雪は薄く岩壁の皺を浮上らせて、インゼルの兩側のルンゼは輕いラッセル。東壁は流石に夏とは違ふが、四峯は日當りのよい

爲あまり變らない。

一〇、二一　快晴

（A）　四峯バツツトレス（小谷部、大塚）

天幕（八、四五）――C點アンザイレン（一〇、一〇）――F點（一一、一五――一一、四〇）――J點（〇、五〇）――四峰（二、〇五――二、三〇）――北尾根を經て前穗高（四、〇〇――四、三〇）――歸幕（五、三〇）

AからKまで全く記號通り。私達がJ點に出た時森川達は、こゝから見ると垂直そのものゝcフエースの右端に取付いていくらも登つてゐない。一寸氣がかり。私達は沈んで行く陽光に丁度間に合つて、終始愉快な登行を續ける。aルンゼの下りは適度の雪で却つてよい。入口で間違つて下又白へ入りかけた外は全く快適な一日。

（B）　前穗高東壁（森川、日江井）

天幕（八、四五）――Cフエース直下（一一、三〇――一二、〇〇）――第一テラス（六、三〇）――第二テラス下端にてビヴァーク（七、〇〇）

インゼルの左側のルンゼは雪が切れると意外に惡い。一番目の瀧は埋れてゐたが二番目の小さい瀧の正面をハーケンで登つたので、こゝで時間をとつて取付がおそくなる。中央の岩盤とcフエースとのコンタクトラインを登つたが、確保用のハーケンを連續使用せねばならず仲々面倒、遂に第二テラスの下緣にてビヴークと決する。月が美しく上り、既に歸幕してゐる二人と大聲で話を交す。身體を確保する爲にハーケンを打つ頃は既に闇も濃く、美しい火花が散つてハーケンが食ひ込んで行く音が四方の壁に反響して行く。然し食糧も少く冷氣の身にしみるこの夜のビヴー

クは樂ではない。知つてるだけの歌から、隱し藝、五目並べに迄進んだが遂には夜明を待ち佗る。天候は次第に崩れて霧の朝を迎へた。

一〇、二二　曇霧

（A）　在天幕パーティ

「氣の毒に」と、冗談の中にも何かシンと來る不安を宿した氣持を抱き乍らも、シュラフを重ねて快眠した朝、霧の岩壁に先づ第一聲を送る。元氣な返事に安心、直ちに食糧、茶等を持ち前穗高へ。頂上には三時間も居り二、三度言葉も交したが判つきりせず、二人が登頂寸前、J點の近くのチムニー狀のリスの中で發した返事が意外な反響をし、且つ聞き違へたので捲くかどうかしたのかと思つて、一時頂上を去る。

（B）　東壁登攀パーティ

ビヴーク地（八、一〇）H、I、Jを經て前穗高（一、二〇——一一、四五）——歸幕（一一、四〇）

急いで登つたが疲勞の爲時間がかゝつた。頂上では僅か二〇分の違ひで迎へに來てくれた二人に會へず、空腹をかゝへて下る。

一〇、二四　快晴

（A）　前穗高東壁（小谷部、大塚）

天幕（七、五〇）——A點（一〇、三〇）——D點（〇、三〇——四、一五）——歸幕（四、五〇）

一〇、二五　曇

（A）　第二テラス（二、一〇——三、三〇）——前穗高頂上（三、

森川達が苦勞した二番目の瀧はインゼルに出て大きく捲く。東壁でも最も日の當らないこの邊では、アイゼンが必要な位。ハーケンを使用したのも時間のかゝつたのもD點迄、以後全く記號通り。四峯のパーテイも今日はピッチが早い。互ひにアドバイス（森川、日江井）を交換して北尾根を經て來た森川達と殆んど同時に登頂。成功を喜び合ふ。

（B）四峯バットレス

先ず取付近くで砲彈の様に尾をふるわせて落ちる落石に度膽をぬかれる。前日小谷部達の登つたのと殆んど同じルートで、所要四時間。唯EからGの間をFへ寄らず略々眞直ぐ登る。幾分惡かつた。

（3）一九三八、九、二一——二五

大塚（單獨）

九、二二　快晴、三峯奥又白側リッジ登攀、所要二時間五〇分。

昨年十月は埋れてゐたインゼルの、左側のルンゼの最初の瀧が出てゐるので、先づインゼルの突端へ上る。汚い岩場で一寸惡い。之から先頻々たる落石を避けてずつとこの稜線を歩いたが、いくつかの小岩塔があつて割合時間がかゝる。殊に最後の岩塔は肩でも借りねば越せない。左側を捲く。

三峯は「岩を積み重ねた様な感じ」で、假松も交じつてスツキリした登攀は味へない。終始稍四峯寄りを登つた爲二峯側を見なかつたのを殘念に思ふ。浮石が多く傾斜もゆるくないので困難な登攀ではないが危險はある。リュックサックと身體と分けて二〇米のザイルの兩端に結んで登つたが、荷物が假松の間に挾まつて却つて疲れ、又時間も費した。

(4) **一九三八、一〇、一八——二一**

佐々木、大塚、山田

一〇、一九　快晴　五峯奥又白側登攀

五峯奥又白側の下端に大きな岩穴がある。その右手から取付く。下半が面白くない事は判つたが、四・五のルンゼの落石が烈しいので。最後の右上に捩る様に上つてゐる岩稜の所までは全く汚い所、案外時間をとつた。最後の岩場丈なら、落石のない時は四・五の峯間ルンゼをつめた方がよい。この岩稜に移り上部で稜線から離れてフェースを登る。岩は堅いがホールドが少く悪い。佐々木に足を持つて貰つて大塚が打つたハーケンが見事に效いて突破する。こゝはaルンゼ下の奪掠點から四峯のプロフイールに續いて良く見える所である。之を乗切れば後は問題はない。所要七時間。五・六のコルから歸幕、急いで一時間。

(5) **一九三九、六、二二——二四**

大塚、山田

六、二四　晴一時曇　前穂高東壁

松高ルンゼ下天幕(五、一五)——池(七、一五——八、〇〇)——奪掠點(九、〇〇)——松高尾根上に出る(一一、〇〇)——V字狀雪溪を經て第一テラス(一、〇〇)——Bフエース左側のカンテを登り第二テラス(二、三〇——五、〇〇)——歸幕(六、四〇)

今年は雪が多いのか、夏山も近いと云ふに池の幕營地は一、二尺の雪の下になつて、池も雪の窪みに汚い水が溜つ

てゐる程度。奪掠點から松高尾根へは、aルンゼに入つて直ぐ右に上るルンゼ（雪がなければ登れないのではないかと思ふ）をつめる。一テラスからbフエースの左端、V字雪渓に面するカンテを登る、快よい岩場。第二テラスからはクラックH—Iでなくその右手の埋土の様な所（H′）から見ると一間四方位の殆んど水平にかぶつた岩が、二つ上下に並んでゐる（I′）のが見える。四本打つて三〇米一杯でI′の下に來る。ハーケンを打ちそれで身體を釣つてI′を過ぎて山田に上つて貰ひたかつたが、足場がないので止むを得ず適當な所で山田にジッヘルを賴んで、二つのかぶつた岩の間へもぐり込む。之から上三本連續に打つたハーケンが全く悪かつた。I′を過ぎて山田を確保。カラビナが足りないのをあげ三、四米下つてIの上の溜り場に着く。この四〇米に二時間を費す。之から上は普通のルートをとる。aフエースから落す石は、少し大きいものは大部分第二テラスで止らずcフエースを落ちて行くので、この登攀には充分の注意を要する。

C、積雪期の奥又白

(1) 一九三七年冬の試み

大きな計畫が次第に崩れ、あり餘る力を持ち乍ら遂に最後のものを逃してしまつた。それが冬の試だつたと云へるであらう。

簡單にこの計畫の骨子を述べよう。參加人員十七名、一部を德澤合宿班とし小谷部がその指導に當り、他は又白池

に幕營合宿し、一週間後小谷部は池に上り、池の合宿班の一部は下山し、かくして池には登攀隊とサポート隊だけが残る。登攀隊は小谷部、大塚を以て四峯バットレスを、森川、日江井を以て東壁を登ることゝなつてゐた。

この計畫の下に先發隊として森川以下五名十二月十七日夜出發した。以下簡單にこの計畫が傾いて行つた經過を辿らう。

一二、一八　晴　先發隊、中の湯へ。

一二、一九　小雪曇　同德澤へ

一二、二〇　小雪、先發隊松高ルンゼ登攀中雪崩に遭ふ。引返して德澤泊り。本隊この夜出發。この變更を迫られる。

一一人負傷し、ピツケル三本を失ひ計畫の

一二、二一　先發隊、負傷せる日江井を助けて中の湯へ、榎本は德澤に殘り荷の整理。本隊

々相談の末、日江井は小谷部が附添つて松本に下り、之以後池の合宿班を止めて德澤で全員合宿し、壁のアタツクはそれ以後に行ふ事とする。

一二、二二　薄晴　德澤へ。日江井、小谷部は松本へ。

一二、二三―二八　德澤合宿

かくして雪に明け雪に暮れ、一つの頂も踏まなかつた合宿も過ぎた。

一二、二九　雪　滯在

（小谷部、船本）（森川、大塚）を以て登攀隊とし、佐々木、里見、木島、山田を以てサポート隊とし、天候さへ恢

復すればいつでも上れる用意は出來た。

一二、三〇　雪　歸る日に急かれる里見、木島、山田は下山する。

望みのない天候、々々晴

一二、三一　曇時々晴

漸く好轉の兆が見える。「明日こそ」、「まだ〳〵充分の力もある」「サポートもゐる」そんな氣持で明日を待つた。

——之迄の經過「記錄」一六頁及雪崩の項參照——

一、一　快晴　德澤（二、三〇）——松高ルンゼ下シーデポ（四、二〇——六、二〇）——池（一〇、一〇）

十二時起き、變なあ元旦だ。「お目出度う」と云ふ言葉も出發を前にしてあまりそぐはない氣分。

負荷約四貫、ルンゼ入口のデポに來るとまだ眞暗、凍つた飯を食つて夜の白むのを待つ。再びこのルンゼにラッセルの歩を踏み出す。

默々として唯登る。ラッセルはこの前よりは樂だが、それでも仲々よく潛る。「この邊だつたなあ」歩みを止め上を見、下を見一寸感慨無量。二番目のルンゼが左から壁狀に入つてゐる手前の邊り、森川がトップで進んでゐる。「來た〳〵」ギョットとして見れば、この上でルンゼが左に曲がつてゐるその邊りから、多數のブロックがかなりの勢で落ちてくる。左へ左へ、上を見乍ら懸命に逃げる。ラストの大塚は頭部に一つガンと食らつた。ルンゼの中をどんどん落ちて行くが、いくつかの溝を作る丈でルンゼの雪は全く落着いてゐる。皆顏を見合せてしまつた。それでも之でルンゼの雪の落着き具合は證明された譯で、暗い氣分の中にも再び登行は續けられる。「來た〳〵」小谷部の聲、ハ

ッとしたが今度は冗談だつた。「冗談も時による」森川が怒る。大塚がトップとなる。端ばかり歩いて反つて深いラッセルに悩む。恐しい逃げ出したい様な數時間だつたが、最後にルンゼが捻れて瀧となつてゐる所を、佐々木の強引なラッセルで乘切つてボーデンの下端に出る。解放された氣分、仰げばボーデンを圍む岩峯はしきりに雪烟をあげてゐる。始めは、ブロックの落ちた溝に沿つて、最後はかなり深いラッセルを空身になつて續け、十時過、遂に池に出る。秋に縛りつけて下りた樺には、そのまゝに支柱等がある。然し四邊の景觀は全く一變してゐる。直ちに池の東南隅に天幕を張る。張綱にはボートの應援旗をつけたり、中からはラジウスが快よい音をたてる。すつかり良い氣分になつて上を仰げば、又白尾根から北尾根へかけて黒々と立つ岩峯の頭からは雪烟が生あるものゝ如く吹上り躍り、そして黒いばかりの空にすひ込まれて行く。午後の陽に峯頭だけ赤い北尾根を背に、この時撮つた記念撮影には、建設の喜の中にも明日への逞しい意慾を漲らせた顔が笑つてゐる。

三時、森川の作つてくれたオートミールを腹につめて四人はラッセルに行く。

（A）四峯A點迄（小谷部、船本）

ラッセルは輕い。方解石の上のルンゼへ入るとクレヴアスがある。更に之を越す、取付にはシュルンドが開いてゐる。ザイルがないのでこゝまでゝ止めたが、之で明日アンザイレンしてこのシュルンドを越せばよい譯だ。

（B）東壁直下迄（佐々木、大塚）

インゼルの下で別れて左側のルンゼに入る。今は瀧もなく傾斜もそれ程急ではない。何しろ空身なので調子良く上つて、インゼルが三峯につながる邊りに來る。トップに歩いてゐた佐々木が突然音もなく落込んだ。雪がその穴に崩

れ込んで姿が見えなくなつた。ハッと驚いたが佐々木は慌てず、突蹉に足を開いてクレバスの兩壁にふんばつて止つた。落ち込んで行く雪の中は底もなく暗い。「大丈夫か」穴を覗き込むと、一尺ばかりの下に頭が見える。先づピッケルを差し出して大塚がジッヘル、佐々木はチムニーの出口から出る様にピッケルを握る手に力をこめて這ひ出る。ホッと一息、壁の取付も近い。明日はこゝからアンザイレンすればよい。夕闇迫るルンゼを急いで下りたが天幕に着く頃は眞暗だつた。「御苦勞」と迎へられる。「今何度と思ふ」と聞くから「さあ、十度か」と云へば「十七度だ」との返事、案外冷へる。

一、二、雪降烈し、大塚、船本下山

期待を以て迎へた朝だつたが、昨夜寢る頃の雲行の變調で今朝は酷い降りだ。歸省に迫られる二人は下る事とし又計畫を變へる。尤も食糧の不足からも斯くせざるを得ない。昨日の堅濠の様なラッセルも消えた中を、雪崩を慮つてルンゼ左岸の夏道の尾根を下る。小谷部に途中迄見送つてもらふ。時々灌木の間に首迄も落込む。然し安全に下降。愈々登攀は小谷部、森川で東壁を登る事となる。

一、三―四　吹雪、滯在

一、五　半晴小雪　インゼル下端迄ラッセル

薄日がさして天幕が急に明るくなる。明日の登攀に備へてラッセルせねばならない。佐々木は天幕番となり小谷部森川は外へ出る。驚く様な迫力の景觀だ。東壁は蔽ふものもない。鋭いスカイラインから雪烟が捲上り、早い雲がその上を飛驒へ流れて行く。「山は生きてゐる。」その生命に觸れた時丈、私達のみすぼらしい魂も一時に何か素晴しい

ものに同化する様だ。

雪崩の危險を考へてインゼル突端迄でラッセルを引上げる。天幕に歸る頃は美しい夕燒も去つて、亂雲に仄に名殘りの映光が美しい。星が輝き出す。天幕には灯が點つた。飽食して寢る。

一六、晴後雪　東壁へ向ふ

午前三時、谷も峯も深い曉暗に眠る頃私達の天幕は活動を始める。ユラ〳〵とほの暗い蠟燭の火が搖ると、黒い影法師が動き廻る。湯氣が濛々と立込め、ミルクの香が充滿する間に夜の中に用意したリユックの中を一應點檢、手早くオーツを流し込み、幕内の後始末を佐々木に賴んで外に出る。風は無い様だ。懷中電燈の光に方三尺の前方のみを見乍ら進む。ラッセルの終點迄來ると夜が明けてくる。

黒い雲が東の空一面にかゝつて何か物凄い氣分、然し頭上は青空だ。嫌な朝燒がする。左のルンゼに入つて休む事なしに登る。輪カンをはいて丁度足首が潜る程度、岩壁直下に着く。輕い食事、ふと見ると空一面ヴエールがかゝつてゐる様、然しまだ保つだらう。アンザイレン、①から取付く。dフエース直下は極度に急で、下手にトラバースする事は出來ない。その緣を辿つて先づ小谷部がトップで北壁の直下dフエースとのコンタクトラインに着く。こゝから釣瓶に登つて正面を避け稍々左手に②に着く、小さいリツジの末端、小谷部が登つて來てハーケンを打つて森川がジッヘル、この邊からそろ〳〵惡い。氣が附くと天候は次第に惡化するばかり、私達は考へ込んだ。「行かうか」、「戻るか」、行けない程の天候でもなさゝうだ。然し無理をする事に對する反省と手痛い經驗とが鋭く迫つてくる。「俺はよい、若し成功すれば、更に又君は試みるだらう。それが君の缺點だ、今登る可き時ではない。」之が小谷部の言葉

だつた。然し暫らく迷つた。恐らく一時間以上も。その間に空は暗くなる一方、小雪は烈しくなる。遂に意を決してアップザイレン、ザイルを引いてしまつた。前穂高へ登る筈だつた佐々木も私達の歸りを察して、溫い食事を用意してゐて呉れた。

(2) 一九三八年春の登攀（主として森川の手記より）

三、一五　晴　森川澤より德澤へ、船本と合す。

勃然と燃え上り、あるだけの力を使ひ盡して兎も角も最後のものを握つた。それが春の登攀だつた。

二、三貫の荷ですいゝ〳〵上高地の平を進む。何度も見馴れた穂高の峯だが今日も亦相變らず氣分が良い。

吉城屋の先で河原に出ると、そろ〳〵前穂高と東壁の上部が見えてくる。この時森川の頭を占めてゐたものは、「この三月登らなければ何日登れるか」、完成とか、自分のものとするとか云つた感情が、一切それに繋がつてゐる、そのものが自分の手の中から逃げて行きさうな氣もする。捕めさうにも思ふ。今逃したら永久に歸つては來ない、「驕氣にかられて」或ひはそんな氣分だつたらう。

夜は佐々木、船本と相談の末、極めて身體の調子惡く發病の兆ある佐々木は下山と決し、短期輕裝を以て、森川、船本は池から東壁をアタックする事とする。

三、一六　快晴　德澤（九、三〇）——又白池（二、〇〇）

出發もおくれる。今日も穂高の山は美しく晴れ渡つてゐる。凍つた雪面に小舍からアイゼンで踏み出した私達のリュックの中には、カボツク、シート二枚、石油一ガロン、ラジウス一個、スコツプ一、ザイル（三〇米一、二〇米一）、

登攀具、防寒具類等がつまつてゐる。天幕をやめて雪洞を根據とする事には大きな興味を持ゼ下に來る。ルンゼは冬より一層緩く見える。然しデブリは全く戰慄的だ。立止つて暫々たみ〳〵とした氣分に襲はれる。大快晴の天候に汗をかき乍らもルンゼをアイゼンで簡單に登つぺりとした斜面が開けて、雪崩が越して流れる危險が思はれる。例の樺の木の邊に雪洞を深さ五、六尺の穴を掘つて、その底から長さ七尺位に横に掘り、出口を池の側として穴の片シートを敷きカボツクを置くと之で私達の家が出來たわけだ。入口にはシートをハーケンで當らないが、中は冷々としてラジウスを焚かなければ外と變らない。貧しい經驗ではあつた意し度い事は

一、天井を厚くせねばならない。落ちる危險が考へられるから。

二、ラジウスを焚いても水がたれる事はなく濕氣はあまり關係ない。

三、中に火氣がなければ雪洞の溫度は略々外氣と變らない。但しラジウスを焚いても零下一、二度を越えなかつた。

四、始めから廣く掘る事、落着いてしまつてから內部を廣くする事は不便である。

等であつて總じて雪洞の居心地は惡くないと云へる。荷物を入れて落着いた頃には日も落ち暗かつた。唯ラジウスの調子の惡いのが最も私達を腐らせた。〔氣壓をゆるめる栓に 故障が出來て、こゝから漏るらしい。止むなく蠟をたらして應急の處置を施したが、この爲すつかり用意して寢たのは十一時を過ぎてゐた。

三、一七　快晴　前穗高東壁登攀

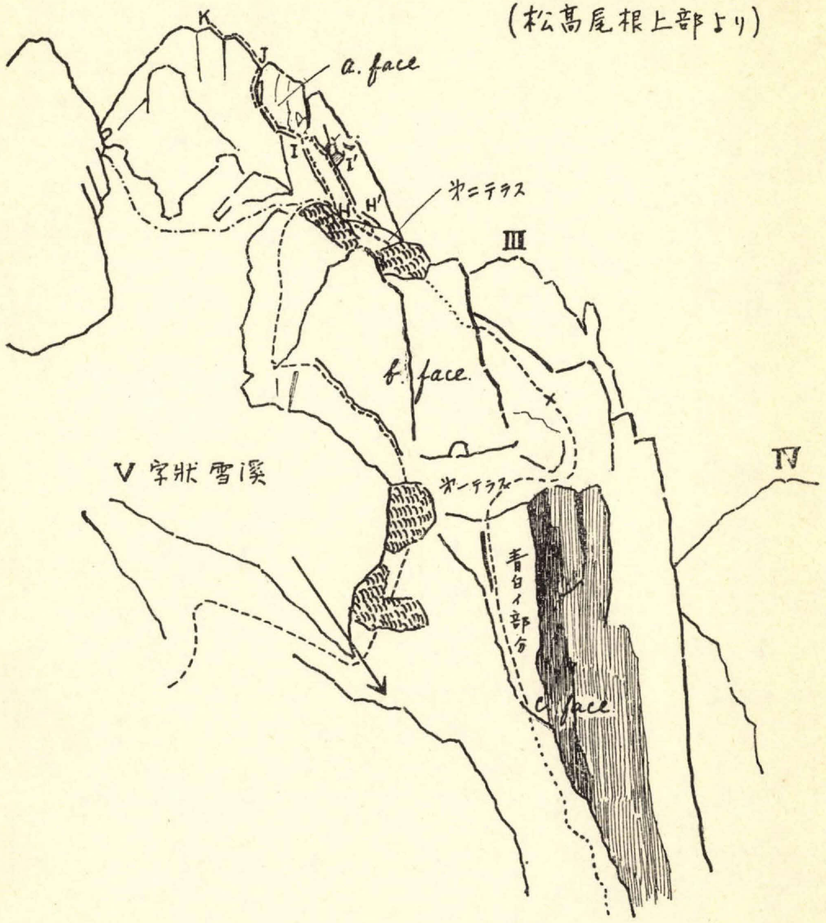
今朝もラジウスの不調に苦しみ、三時に起きたのに出發は六時となつた。然しそれ程焦りもしなかつた、天狗尾根の天幕を出て荒澤北俣へ下つて行く時の様な悲壯な氣持もしなかつた。この地域に對する自信と云ふか、そんな感情が支配してゐたからだらう。船本、森川と交替にラッセルして岩壁の下に來る（八、一五）。腰を下して見上げれば雪のつき方もどうやらよい様だ。十二月と餘り違ふ様にも思はれない。雪のつくリミツトが低いからであらう。ルートも十二月通りに取付く外はない様だ。

「さあ、行かう」私達は立上つた（八、四五）。①—②迄キックステップで行ける。②あまり困難を感じない。それに今日こそ天候は全く安心だ。明るい氣分になる。②の上、十二月の引返點に來る。森川は「こゝが一番悪い」と云ひ乍ら③に進む。②—③で一時間以上を要した。③から十米ばかり淺い溝に沿つて登る。②の上のリブを左へ乗越して、③に達する。かぶつた雪にぶつゝかつて右へ逃げる。森川が崩す雪は全く船本にふりかゝつて船本は嚊りついてゐる中不覺にもピツケルに身體が觸れてアツと云ふ間もなジッヘル、然し苦しみの彼岸の寶庫へ分け入つて行く様な氣持だ。③から三十米急な雪壁に衝き的る（④）。確保用に一本打たうとピツケルを外して傍の雪に突き指す。打つてゐる中不覺にもピツケルに身體が觸れてアツと云ふ間もなく落してしまつた。止むを得ない。然しアイスバイルでやつて行けさうだ。④で眞直ぐ上らうともしたが駄目だ。右へ大きくトラバース、眞下に取付點が見えてそこには暖な日が當つてゐる。然しこのトラバースは全く底なしの雪でとてもピツチが上らない。船本の④のジッヘルも極めて不確實、捲き終つて約五六米眞直ぐ登るとよいテラス⑤に出る。④—⑤で一—二時間を要する。こゝから岩場となる。この上でL字形をしたスラブとなりハーケンからハーケンへ渡り歩く。トツプとして最も時間を要した所でザイルの延びは極めて悪かつた（⑥）。⑥で既に四時を過ぎ、船本

は「行けるか」と不安をもらしたがもう第二テラスが目の上ではないか、下りるより上つた方が樂だ。それより外に切抜ける道はない、と森川は考へた。幸にも⑥から上は小尾根となつて一寸息が抜ける。岩と雪の連續でうまく登れる。然し⑦へ出るとこの稜も痩てその先はオーバーハングになつてゐる。兩側の溝へ逃げる事も出來ない。「之さへ乘切れば」「之が乘切れなかつたら」。考へる事はない。森川は猛然ぶつかつた。色々試みた末見出した一寸四方位のホールドに、アイゼンの齒一本を乘せて强引に乘切つた。そこは最早第二テラスへ續く末端であつた。アイスバイルの先を岩のさけ目にたゝき込んでそれにザイルを廻して船本をジツヘル。が仲々上つて來ない。今朝から何も食つてゐない爲か、地形の爲か、發音も明瞭を缺いて互ひによく聞きとれない。「ザイルに摑つて上れ」と云ふ。船本の體重が全くかゝる。三四回試みる。突然グツト肩に應へる。スリツプだ。アイスバイルをゆるめる。激しい息使ひがザイルを傳はる。暫らく休んだ後又上がつて來る。然し見透しはついたので氣分は樂だ。遂に船本もこのオーバーハングを乘切る。左上にテラスへ出る。驚いた事に午後九時を過ぎてゐる。食慾もない。最後の壁にも未練はなかつた。正直に云へば、一も二もなく捲いて行かうと思つた。左へトラバース、V字狀ルンゼへ入る。それからステツプを切り二時間近く費して稜線へ出た。頂上は十分とはかゝらないが別に踏みたいとは思はなかつた。下りはザイルを常に張つてゐなければならないので森川が一寸スリツプしたが直ちに止る。月明で懷中電燈も要らない。昂揚した氣分も何もなく、唯しんみりした氣持でルンゼを下つた。最後の斜面を滑落し乍ら下り雪洞に入る。色々な氣持が一度にドカツと來て、何をするのも面倒だつた。殊に手を使ふのはとても煩しかつた。

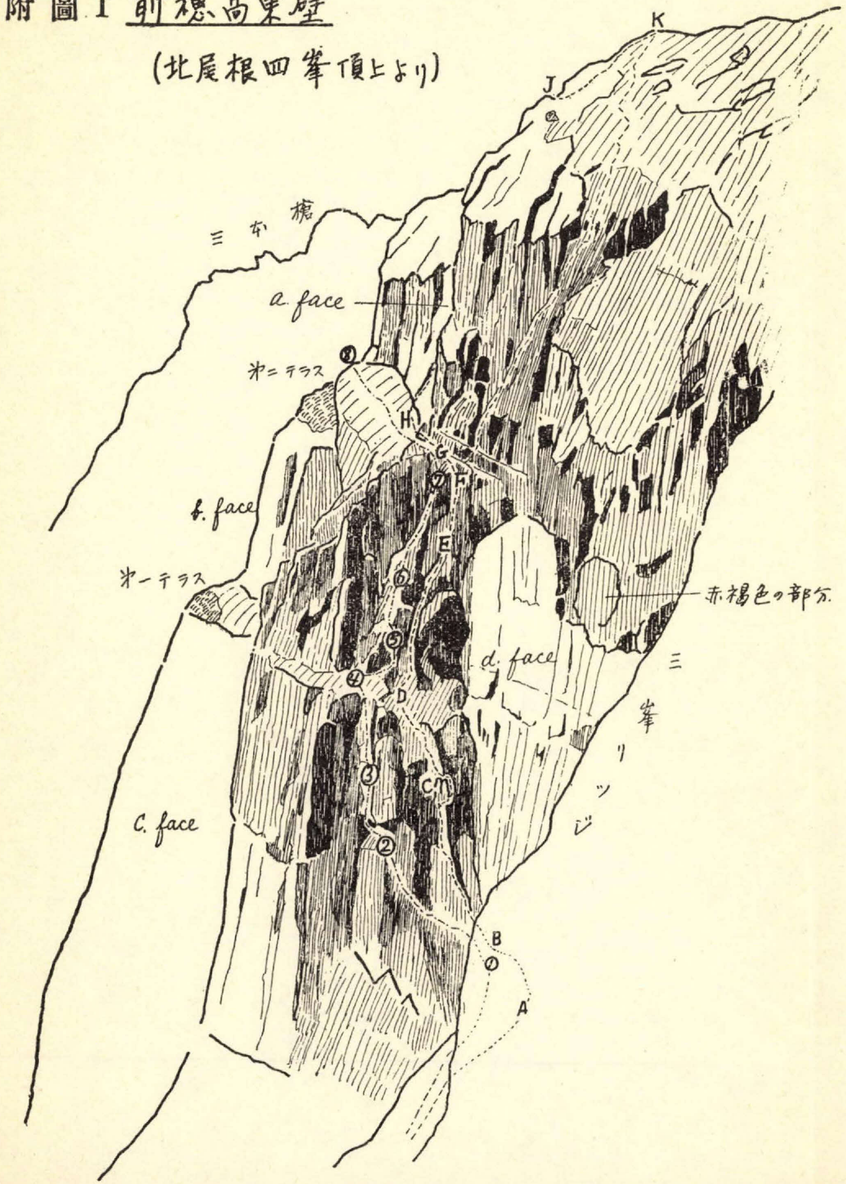
附圖 II　前穂高東壁

（松高尾根上部より）



附圖 I　前穂高東壁

（北尾根四峯頂上より）



附圖 III　四峯バットレス

（又白池より）



――之以後の経過については凍傷の項参照――

（附記）――森川の手記より――

この登攀程批判せらる可き多くの要素を持つものは少いであらう。然し、唯私は次にこの登攀程批判せられたい。即ち二日遅れて入山した小谷部との聯絡、及びかゝる登攀に對する當時、小谷部は關西に行つてゐた。その爲に互ひの聯絡を缺いてゐたし、でもあり、私は試驗と家人の病氣とで互ひに計畫に對する見通しをはつきり言明出來ない立つてからも、小谷部は或ひは來られないかも知れないと思はれたし、又實社會の生活を前に向いてゐるかも自分には多少危まれた點もあつて、小谷部との登攀を望んではゐたが期待する事は出來なかつた。事實德澤を出て愈々池に上る時には忘れてさへゐるし、劍の八ツ峯、源次郎尾根及び小槍等でも行をヴアリエーションはトツプさへしつかりしてゐれば、セカンドは例へ五十パーセントの力でも相當やれると云ふ氣持があつた。それに船本は雪には馴れて居り、この程度の飛躍をそれ程無理な事とは思はなかつた。むしろグン〳〵延びて行く彼の氣持が期待する事が出來なかつた。

更に、從來私は、商大山岳部の主柱の一人となつて貰ひたい期待が强かつた。

以上がザイルカメラードに對する自分の氣持であるが、全ての批判を越えて私が言ひ得るのは、「雪崩の時には完全に負けたと思つたが、この登攀では自分は負けたとは思はない。唯自分の最大の弱點を衝かれた事は認めるが」と云ふ一點であつた。

三、雪崩について

この項目の下に私達が記さうとするのは、奥又白谷全體を對象とするものではない。唯私達が一九三七年十二月二十日、松高ルンゼに於て遭遇した雪崩に就いて事實を述べ、將來の前進へのより豐なる礎を築かうとするに過ぎない。勿論奥又白谷全體に於ける雪崩に就いても、私達は概括的な事を云ふ丈の力はある。然しそれは登攀の個々の部分で云へる事であり、特に玆に取上げる程の豐富なものでもなく、又その様な共同財産への附加分よりも、私達の敗慘の記錄自身の方が私達のみならず、一般にも價値多きものと思はれるからである。

A、四人の日記より

前日（一九三七年十二月十九日）到着のおくれた事と池へ上げる荷物の組變へ等で、昨夜寢たのはかなりおそく、今朝の起床はもの憂いものだつた。窓際の寒暖計は零下五度を示してゐる。それに朝から小雪がちらついてゐる。それでも出發をどうしようと言出す者もなかつた。「ルンゼ下までは兎も角」皆そんな氣持で出發と云ふ事になつた。「今日は止めといた方がいゝぜ」と云ふ西山爺さんの聲を背に梓川の河原に出た。雪の吹き荒ぶ河原を強い追風に背を丸くして一列に進んで行く様は、その時の寫眞を見ても唯暗い感じと云ふ外はない。左に奥又白谷に入ると風はバッタリ

止んだが小雪は相變らず飛んで、ルンゼ下の臺地の登高も割合に潜つて思つた程樂でもなかつた。（九、四五―一〇、二〇）吹溜りの爲か、靴のまゝだと時々腿迄も落込む。大塚がデポして輪カンに變へる。「降雪中の雪崩は大丈夫か」と云つて見たが別に誰も返事をしなつた。勿論そう云つた大塚とて、この位の雪降りでまだ見た事もない雪崩が自分達の所へやつて來るなんて、現實的には感じられなかつた。それに見たいが一様に潜り、雪のなじみは惡いとは思はれない。「登つちやはう」と云ふ程の間柄でもなかつたが皆の氣持も似通つたものだつた。

こんな調子でルンゼの出口のデブリの山に向つて、先づラツセルの第一歩が日江井から始められた。最初から仲々深いラツセルで、ジツグザツグ氣味に上へ上つて、大體ラツセルが五人一順して左からルンゼ左岸の小尾根の切開きが下から上つて來て、最初に深い灌木から拔けて傾斜は緩いが瀧の邊りに來た。こゝはルンゼ左岸の小尾根の切開きが下から、左横に見える地點である。今から考へれば、五人のラツセルで一時間も上つて來た事を痩せた尾根となる邊りたるものだつたと云はねばならない。こゝで森川に替つて大塚がトツプとなり以下榎本、日江井、森川の順となつた。雪は相變らず膝を越し、踏んでも〳〵ズク〳〵して餘り締りのない樣な狀態で、傾斜の急な事も加はつてかなり辛いラツセルだつた。それでもトツプ以外は樂なもので、「眞逆（マサカ）」と云つた氣持で皆それ程氣にもせず、點々と前の者の足を見乍ら輪カンの跡に次々に足を運んでゐた。

ふと先頭にゐた大塚は、强くはないが迫る樣な氣配を感じて頭を上げた。一瞬、土用波の樣な白いものが目に浮んだ。それが雪崩だと云ふ意識が頭に響く前に、もう足は雪面を離れ、身體は毬の樣に、落下する雪の中に投げ込まれ

てゐた。

この土用波の様な白い塊まりを瞬時でも見た者にとつては永久に忘れる事の出來ないものであつたが、何も見ないで全く突然、五里霧中の世界に投げ込まれた者の受けた印象は、一層奇異なものであつた。船本は「アツと云ふ間もなく、浮いた感じさへなく」と云ひ、始めは何が何だかさつぱりわからなかつた、いショツクを受けた」と云つてゐる。

それから後は一様に、唯縦になつたり逆さになつたりして廻轉するのが苦しく感じられる丈で、あまり落ちてゐると云ふ感じは受けない。無我夢中の間にも、自分達が雪崩に捲き込まれたのだと云ふ意識がはつきりすると、「とうとうやられてしまつた。もうどうにもならない」と云ふ觀念と共に、粉雪が鼻から胸に一杯につまつてくる様な感じがして、息苦しくてたまらないので手で鼻をおさへる。がこのまゝでは雪崩の下敷になつてしまふと思つて、兩手で跪がき、遊泳運動の眞似をしたのも覺えてゐる。

一切が次第に引き込まれる夢の中の出來事の様で、ヒヨッと氣がついた時にはもう立上りかけてゐた(大塚)。何處もひつかゝらずにスッと立つた。「助かつた」と先づ感じた。口から少し血を吐いた。然しそんな事より自分が助かつたと云ふ喜びは蔽ふ可くもない。「俺だけではない」、「俺は助かつた」、何とも云へない興奮、「あゝ、シーデボがあんなに上にある」「オーオー」と泣聲とも嘆聲ともつかぬ興奮の聲をあげてゐる。船本だ、「お一日江井もゐる」。かなり右手のデブリの上に二人て來る。

この落下し始めた時から立上る迄の經過は、かなり人によつて異るもので、この爲に左腕を骨折した日江井は次の

様に云つてゐる。

「丸太の上を轉がされる様な感じだ。今度こそ駄目だ……また手を動かす。然しどれが手で……しない。家の事、學校の事がやたらに目に浮ぶ。呼吸はこらへてしなかつた。又樂になる。ら止つたらしい。夢現の中からはつと目を覺した様に少々ぼんやりしてゐる。が雪の上にねつた、まだ生きてゐたのだつた。起き上らうとした、駄目だ、見れば右足が雪の中だ。取らうと左手を使はうとするが駄目、どうにかしたらしい。右手で掘つて起き上らうとしたが又倒れる。足が痺れてゐるらしい。

かうして雪崩がとまつた後暫らくは、「自分が助かつた」と云ふ意識を中心に唯興奮にかれ」と呼び、榎本は「森川々々々」と連呼してゐる。「森川がゐない」、「日江井は骨折した」。かになつて來た。

先程膝迄もぐつた粉雪が、今は靴のまゝでもぬからない。長さ一〇〇米、幅五〇米、厚さ一米半もあるデブリが一面に廣がつて、この中に埋れてゐる森川一人を探すのが、一寸雲を摑む様な頼りなさを覺えて手が附かない。先づ雪上に散在してゐるリュック等一切を集めて見たが、皆目見當がつかない。「自分達丈の力では最早どうしやうもない」と云ふ弱氣が支配して來て、船本と榎本とが更に捜索を續け、大塚は德澤に救援を求めやうと云ふ事になつた。然し考へて見れば、今一人でも減ればだけ望み薄となるではないか。大塚は一應スキーをつけたが下る事を逡巡してゐる。再び集つて森川がゐるとしたら四人の靜止地點の間ではないか、と云つて各自の地點を言ひ合ふ。かくしてデブリの上をさ迷ふ中、實に奇蹟的にも

船本は森川の掌を見出した。

「ふと青く透けた方一尺位のブロツクがあつたので、單調を破るものなら徽塵も看過さなかつた私は、直ちに引きおこして見た。その下の雪上に見たものこそ友の掌ではないか」とはこの時の船本の言葉である。

「居た〳〵」船本の狂氣の様な聲に馳けつければ、素手で何も見えない雪を必死になつて掘つてゐるではないか、恐ろしい様な不安と祈とを以て皆掘つた。その大塚の手の下に遂に森川の頭髪が現れた。次いで顏面が、既に失神して額のあたりは血に染まつてゐる。「森川々々！」と叫びつゝ顏の周圍を掘りつゞける。「おゝ」半ば目を開き乍ら唸る様に聲を發した。この時の、死からそれでも「油斷するな、安心しちや駄目だ」と勵まし乍ら、疲れた腕を以て渾身の努力を續ける。榎本はシヤベルを持ち來り、腹部を掘り出した。石油五ガロン鑵を入れたリユツクは兩肩を放れず、右手はバンドを通してピツケルに連つてゐるので容易に掘り出せない。「早く〳〵、又後から來る」と森川もせき立てる。この間掘る者も一層二度目の雪崩が來はしないかと焦りに焦つた。一方では冷たくなつて感覺を失ひかけてゐる森川の手を摩擦し、口の中へ入れて溫め、漸くにして彼は元氣に立ち上つた。

私達はこゝで、雪崩の爲に全く埋沒され十五分間も窒息してゐた森川の言葉に耳を傾けねばならない。

「ゴーと音がしたと思つた。ふと見れば土用波の様な雪煙、全身ぶちのめされる様なショツク、身體が大きく廻轉すると呼吸が苦しく、鼻や口の中に雪がつまつてくる様だ、その中に頭が上になつて樂になる。ドン〳〵

落ちて行く。氣は割合に確だ。あゝたうとう雪崩だ、あの恐れてゐた雪崩だ、體のシンからくやうだ。色々な事が烈しく頭に浮ぶ。又何かガンと打當つた。身體はグル〳〵廻る。それが苦しい。このまゝではいけないと急に思ひ出して手足を動かした。次第にスピードは止る。いくら跪いても段々沈んで行くやうだ。止つた、頭の上の方で雪がボト〳〵音を立てる。身體に力が戻つて來た。エーツ、大丈夫〳〵、鉛を呑んだ様な苦しさ、身體がギューと締る。夢中で顏を前後に動かし手足をふん張る。ビクともしない。僅かに口の前に二、三分の間隙が出來た。左手が一寸のびた様だ、穴倉の底に落込んで行くやうだ。他の者はどうしたらう。こんな所で死ぬのは殘念だ。胸がしまる。呼吸がつまる。と思ふ中判らなくなつてしまつた。

目が醒めた、ワーと云ふ凄じい聲、左手の方が輕くなつた。人聲がする。自分は今掘り出されてゐる。助かつた。

オーイ！　生きてゐるぞと云つてやり度かつたが夢の中にゐるやう、身體の意識がない。それでも上體が掘り出されて自由になると、急に恐ろしくなつた。上から何か落ちて來て、又もとの穴に埋つてしまひさう、本能的に早く〳〵とせき立てた。」

かうして森川は立ち上つた。締めつけられた身體の痛みで、ヨロ〳〵とデブリの上を歩く。傍には骨折した日江井も來てゐる。皆無言でデポに戻つた。深い感慨が胸にこもつて喜びの握手も何もしなかつた。恐ろしい所から早く逃げて行きたい氣持、實際そんな氣持に驅れて、私達は荷物の一部をリュックから出し、輕身になつてスキーをつけた。そして輪カンで下る日江井の前後を少しでも歩きよい様に踏みならし乍ら、依然降り止まない雪の中を德澤へ向つた。

B、批判

（1）雪崩の性質について

私達の觀察し得た範圍で、この雪崩に就いて一つの分析を試みて見度い。二十日迄の天候は大體十八日晴、十九日小雪後曇であつて、廿日は朝から烈しくはないが雪降りで風は左程吹かず、溫度は正確には明かでないがノルマルな狀態にあつた。積雪は膝まで沈み、足をあげて一應踏み、力を入れて一段上らうとすると今踏んだ雪が崩れて元に戻ると云ふ具合で、香しいものではなかつた。之は十八日の晴が中の湯迄の事であつて、上高地の方はそれ程日が當らず、十九日もぐづついた天氣であつた事によるものと思はれる。時刻はルンゼを登り始めたのが十時二十分、雪崩に遭つたのが十一時二十分であるが、當日の天候からすればこの時間について普通云はれる程の危險性は、この時には寧ろ少なかつたと云へやう。

松高ルンゼの地形は奥又白谷に關心を持つ者には周知の事であるが、上部で稍左に曲がる外は概ね眞直で狹隘な樋狀をなして居り、夏は滑狀の小さな瀧が連續し、左岸は草付で所々に灌木を混へ、右岸からはルンゼが入つてゐる。上端は、池へ上る手前邊りから二本のドブとなつて始り、それが合してルンゼとなり、下端は左岸に門柱のやうな岩があつて狹まり、一擧に扇狀に開いて奥又白本流右岸の臺地に入つてゐる。高距約四〇〇米、平均傾斜三〇度位と云はれよう。

雪崩自身について見るに、その落下速度は極めて早く、大塚は見た時から雪崩だと氣がついた時には、既に落下する雪の中にあり、その間リュックを外す事さへ意識に上らなかつたと云つてゐる。更にデブリは大きなブロツクは極めて少く、落下中皆一様に鼻や口から雪が胸に詰つてくる様に感じた點も注目される。最後に、我々の行動が雪崩を引き起す事に關係はなかつた事は勿論である。又前述の如くスノーボールの崩落もなく、登高中雪面に裂線が入ると云ふ事もなかつた。

之等より判斷して私達は、この雪崩は前日迄の天候が積雪を落着かせる事意想外に少く、十九日より二十日への降雪量は逆に多く、この爲ルンゼの雪自體が動く程ではなかつたが、何か外に衝動があれば直ちに誘はれる様な狀態にあり、ルンゼより一層積雪の保持力の少い、右岸の壁狀のルンゼが既に飽和狀態に達し、それが僅なショツクで落ちて發した、第一次の乾燥新雪表層雪崩であるとの見解に達した。デブリがそれ程大きなものでなかつた點からも、この雪崩は松高ルンゼ内に留るものと思ふ。一月元旦の登高中も、二本目のルンゼの入る邊りで最大方一米もある大きなブロツクの許多の崩落に遭つたがこの時は前日の半日の快晴と烈風とでルンゼ内の雪が充分しまつてゐた爲に事無きを得たが、外にもこの邊で輕い雪崩に流された記錄もあるので「登山とスキー」12號參照)、充分の注意を要するものと思ふ。尙このブロツクは奥又白本谷上部の左側、及び池から岩壁へ行く時捲いて行く左手の壁から發するものである。

(2) 被害狀況

日江井上膊部骨折竝兩膝打撲、森川頭部に裂傷、その他物質上ではピツケル三本、輪カン、手袋、スキー帽、眼鏡

等を失つてゐる。リユックサツクは五個共（内二個森川日江井は身につけたまゝ、他は雪上に散在して）埋没を免れた。

人間の側の被害が僅少之丈で濟んだ事は先づ〳〵幸と云はねばならぬであらうが、荷物についても場合により單に無くなつただけでは濟まされず、それが間接に作用して不幸をひきおこす危險性を餘りに強く見せつけられたので、こゝに一言しておく。

ピツケルのバンド下について、堅く手を通して置く可きか否かについては、當時も色々話し合つたが確たる結論には至らなかつた。唯具體的にはピツケルの扮失と云ふ事のみを以ても、私達の以後の計畫は縮少されざるを得なかつた。輪カンの失くなつた數は今判つきり覺えてゐないが、之が身體の埋沒に影響する所はさしてないから、充分堅くつけて置く可きであらう。

次に手袋であるが、發掘された時森川の左手は素手の儘で、早稻田大學の針ノ木谷に於ける例からしても、之によつて起る凍傷は最も恐る可きもので既に感覺を半ば失つてをり、又大塚も毛の手袋及びその下の軍手も失つてゐる例からしても、之によつて起る凍傷は最も恐る可きものであらう。手袋自身を失つては、之を失つた場合以後の行動にどれだけ支障を來すかは改めて云ふ迄もない。

最後に眼鏡についてゞある。事實森川は落下中眼鏡を奪はれた事で、替への用意を忘れてはならない。

（3）裝備、負荷との關係

以後日江井の替へを借りてゐる。

裝備、殊に負荷と雪崩との關係については私達は從來餘り注意する所がなかつた。然し具體的にはねた森川が埋められ、支柱を持つてゐた日江井が負傷した事實によつて深い反省を要求された。況から引續いてゐる問題であるが、物が失くなつた場合の支障と危險から、更に何を持つてゐたかを取り上げて見度い。何に靜止したかを取り上げて見度い。

當日の目的は先發隊として又白の池への荷上げであり、その負荷の內容の主なるものを記せば、森川(石油五ガロン鑵一箇)、榎本(食糧、主として鑵詰類)、船本(天幕、內張)、大塚(登攀具)、日江井(支柱二組)であり一人大體四、五貫前後であつた。こゝで簡單につけ加へねばならぬ事は、私達の天幕は堅固に過ぎて支柱が餘りにも重く量張る點である。日江井だけが他の四人の靜止地點から遙に橫に外れ又負傷した原因は、登攀中の位置の密接からしても彼の負荷の支柱による以外には求められないも、彼がリユツクのバンドを堅く胸にしめてゐた外に、比較的量は小さいが重みのあるリユツクが遂に兩肩から離れ得なかつた點に求められると思ふ。森川、日江井以外の三人は、恐らく落下後幾何もなくリユツクが外れ、落ちて行く雪崩の表面を轉々として最後迄埋められる事はなかつたに違ひない。尙日江井のリユツクサツクは最後迄肩を離れず、右足が埋められてゐた事も附け加へてをく。

靜止時の位置については別に書加へる事もないが、ルンゼの中央に密着してゐた五人は前記の日江井のみを例外として、靜止時に於ても單に間隔が少し廣がつた程度に留り、この事は翌年六月之等の遺失品を捜索に入つた佐々木の觀察によれば、身體を離れた物品についても大體同樣に云へる事で、埋沒者の捜

索上重要な點であらう。

（4）雪崩紐について

十二月二十日のルンゼの登行には、私達は雪崩紐を上部で多數のかなり大きなブロックの崩落に遭つた。雪崩に際して森川の身體は、仰向け頭部を上に割合に樂な姿勢で大體左の掌が一尺足らず、腰から足へかけて二、三尺の點に埋められてゐた事を考へれば、雪崩紐を使用したブリの上に出る可能性はかなり大きかつたと云へる。

然しこの雪崩紐には使用上注意す可き點がある。それは雪崩紐をつけても急斜面の登行には、者の邪魔になり、手で持つてゐるのも面倒なのでつひ束ねてバンド等に挾み勝ちな點である。事實私達が再度ルンゼを登つてブロックの崩落に遭つた時も、挾んであつた雪崩紐を外す者は一人もなかつた。之では雪崩紐の效果も減殺されると思はれ、面倒でも矢張り身體が落ちたら紐が直ぐ延る樣にして置かねばならない。私達もこれ以來輪にして片手で持つて登行を續けた。

（5）事後の處置について

以後の記述はあまり芳しいものでないが、それ丈に私達の身に徹して味つた事なので一言して置く次第である。

それは極めて「當り前」の事であるが、デブリの中に友が埋没してゐる場合には、近くに多数の救援者を短時間に確實に求められる場合以外には、一人も立ち去らず又諦めないで、先づ自分達の靜止地點と落下前の位置を考へて捜索する事である。この捜索は勝手にせず、先づ埋没を免れた者、及び所持品の出た場所の周圍を決めてかゝる事で、發掘に際してはピツケル、スコツプ等で荒々しく取扱はぬ事が肝要である。之等の事は今更云ふ迄もない事であるが、然し現實になると廣いデブリの累々とした上を、二度目の雪崩に脅え乍ら何時間も捜索する事はたつた今受けた精神的打撃が少くないだけに、決して口で云ふ程容易な事ではないからである。又一般の書物にある様に、ストツクを以て雪中に探りを入れると云ふ言葉も、私達の遭遇した様な完全な粉雪の雪崩でさへ、そのデブリはとてもストツクで手に負ない固さで、捜索上の困難も砂濱の寶探しの比でない事を一言しておく。

（6）同想と反省

——森川の手記より——

「登つちやはう」自分は言つてしまつた。二日すれば皆來る。早く前穗高の壁も見度い。我々は愚圖々々と日を過してはゐられない。それに一時も早く天幕を張つて、この計畫の遂行の上に大きな礎石を据ゑて見度いと云ふ考へに一杯だつた。

自分がリーダーとしてこの時引返す氣持は、十の中二、三位しかなかつた事を明瞭にしておき度い。我々は雪崩の文獻上の研究や體驗談は相當知つてゐる。然し實際の雪崩を身近かに體驗した事は一度もない。精々遠くから眺めた位である。

スノーボールの崩落もない。ルンゼそのものゝ流動は考へられない。それにこの雪の中を折角上つて來たと云ふ横着な氣持も働いてゐた。止つてゐる足先が痛い。急いで凍つた飯をテルモスのお茶で流し込んで立上つた。

氣は割合確だ。あゝたうとう雪崩だ。雪山に入り、戰ひ、親しんで來た長い間絶えず恐れつゞけたのだ。體のシンから何か堅いものが拔け出して行く樣で身體全體に力がなくなつた。

日頃元氣の日江井もこの雪崩に打ちのめされて、重い足取りで下つて行く。苦しいだらう、痛むだらう、何も出來ぬ自分が情けなかつた。小舍に歸りついたのは三時頃であつた。懷しい爐邊に腰を下した時、沁み出す樣な悲痛の涙をどうする事も出來なかつた。滅入りさうになる氣を引立てゝ日江井の手當にかゝる。之から一體どうしたらよいのだらう。皆精神も肉體も打ちのめされてゐる。大切なメンバーの一人は起てない。先發隊の仕事は今の所中止の外はない。我々は二度あのルンゼを登る氣力すらない。

九月以來好調に進んで來たこの計畫が、今になつて諦めねばならないのか、皆默つて一言も喋らない。

次の日輕い雪の舞ふ梓川ベリを、日江井を送つて中の湯まで行く。この一日激しい自責、氣持、自分はリーダーとしての資格があるのだらうか。一切の滅入りさうな氣持の底から滾る樣な反撥心、登高慾が沸いて來た。あのルンゼの上の幕營地からは八ツも南も見える。俺達は山男ではないか。

然し又中の湯で丁度今着いたばかりの後發隊の顔を見ると、唯譯もなく興奮する心の動搖を抑へる事が出來なかつた。

あの場合危險の可能性は充分考へられたのだ。止めねばならなかつた。全計畫の遂行上の障害等問題にならない。それが自分の結論だつた。

四、凍傷について

之も亦敗慘の記錄である。幾度か、雪と氷と岩との戰ひを續け何事もなかつた私達が、どうしてこの登攀（一九三八年三月に於る前穗高東壁の登攀をさす）に際して凍傷に冒されたのか？　考へねばならぬ多くの點を含むものであるが先づ私達は事實の經過を時間的順序に述べ、次に登山者としての立場から反省と批判とを記して見度い。

A、經過報告

（1）登攀中（雪洞に歸る迄）

先づ足部について言へば、トップの森川は最困難部を突破する迄殆んど痛みを覺えず、その登攀の緊張と連續性と

の爲にむしろ冬季の北岳バットレス及荒澤奥壁に於けるジッヘル中より樂だつたと云つてゐる。然し足が濡れてゐると云ふ自覺はあつた。とは云へ勿論靴下は替へなかつたし、又その餘裕もなかつた。然し登攀を了へて下る頃になると感覺は全くなく、バランス極度に惡くなり輕いスリップさへしてゐる。船本は一ケ所に一時間もジッヘルする事數囘に亘り、其間足をバタ〳〵させては冷寒を防いでゐた。下りは却つてむしろ森川より調子は良かつた。

手は前々から充分注意し、殊に森川は毛の手袋三、軍手三を用意してゐた。先づ岩壁下までスキー手袋、岩場にかゝると毛の厚いもの、暫らく登つて惡くなると右手のみ軍手に替へた。三足の軍手を次々に替へたが、午後五時頃三足共使ひ切る。氣溫下り濡れた手袋に堪へられず毛の手袋に替へる。惡くて又素手になる事屢々、指頭は感覺を失ひ、止むなく口で嚙む。既にその頃中指の凍傷にかゝれるを自覺す。然し精神的緊張の爲痛痒を感ぜず。第二テラスにて摩擦し新しき毛の手袋に替へる。船本はこの間スキー手袋一着で通し、第二テラスにて右手のみ純毛の手袋に替へる。森川下りに際しピツケルの把握に多少の困難を覺える。

（2）雪洞に歸りて

手足の感覺弱まり空腹なれど水分以外を慾せず、蜜柑、チヨコレートを食ひ、特に船本は海綿の様なパンを相當攝る。極度の肉體的疲勞と、「壁をやつてしまつた」、「雪洞に歸つて來た」と云ふ二樣の安心とで、以上の經過から凍傷を自覺せるも手當に力を盡す事が出來なかつた。船本は左右の靴をぬぐ。森川は左足は辛じて脫ぎたるも右足は船本の助力を以てしても脫げず、恐らく足と靴下と靴との間隙が凍りついてしまつたのであらう。船本水を作らんとし

たがラジウス不調で斷念、二人共冷酒を飲む。「この儘ではいけない」と知りつゝも、靴のに入る快適さについての過去の經驗も作用して、シュラーフザックの中でごそ〳〵足を摩擦する中、時しか眠りに導いてしまつた。

森川は夜中に目が醒め手足の先が痛む。睡いが無理にこすりつける。その中又眠る。

（3）第　二　日（同じく雪洞にて）

雪洞に目を醒した時、船本の手指の先は蒼白く感覺を失つてゐた。オゾを塗る。晝頃小谷部來る。雪洞を廣く掘ると云ふので、船本は象足をはいて外に出る。足先に全く力が入らず足の方も案外重い事を知つた。二人共患部は一體に白みがかり、痛みは少いが感覺がない。小谷部二人の患部を摩擦する。森川はワセリンを塗り、二人共繃帶をする。この時小谷部の足指、船本の手指は切斷せねばならぬと豫斷したが、森川は、足先は變色して爪がぬけ變り右手指は水泡が生じてくづれる程度と考へ、船本も手指は森川の足より惡いが、それでも切る事はあるまいと思つてゐた。疲勞も尚去らないのでもう一晩雪洞に送る事とし、一切の世話は小谷部がやつて呉れる。

（4）第　三　日（雪洞を出で德澤へ）

朝起きて繃帶を外すと、森川の手足の指は倍程に脹れ上り、氷泡を生じて赤褐色に變じてゐる。驚いて直ちに水泡をつぶし、ワセリンを塗りつゝ堅く繃帶をして靴に塡めこむ。船本の手指も赤褐色に變じ、足の方は小谷部の靴下を

借りともかくも靴に塡めこむ。

アンザイレンで、小谷部にジツヘルを頼んで愴惶として下る。バランス悪く心許ない足どり、森川は身體の疲勞に惱み船本は踵のみで歩く爲むしろ踵の痛みに苦しむ。德澤に着く、船本の右手は赤褐色に變じ掌がふくれて來た。相當重態なるを知り素人療法を避け、患部を溫めぬ樣火燵から足を出し、森川は右足が再びはけなくなるのを恐れて靴のまゝ寢る。この日船本、小谷部と共に祝杯のビールをあげる。

（5）第四日（德澤より松本へ）

食慾別に減づる事もなく、割合に元氣でアイゼンをつけて出發。五千尺にて晝食、手指は濃紫色に變ずる。上條末雄に船本の荷物のぐちや〳〵して肉が崩れたのではないかと心配する。中の湯附近で末雄が船本の靴を觸つた時熱の爲に靴迄もあつかつた。坂卷で末雄に足を揉んでもらふ。特に患部だけでなく全身の苦痛も烈しく、歩行愈々困難となる。踵のみで歩くので、休んで立上る時を思ふと休む事も出來ない。既に日はとつぷり暮れて、一つしかない懷中電燈の淡い光にデブリを渡り〳〵進む。時折路上の石に躓づき激痛が全身に響く、次第に自分の足の不安が色濃く、暗い氣持に陷る。デブリも幾つか越えた。然し谷の夜道はあまりに遠い。道を知りつゝも、一寸歩いては末雄に「もうどの位」と聞いて見る。言語に絶する辛さ！　船本は中氣の老人の如くと云つてゐる。乾き切つた咽喉を潤す所々の清水と、末雄の激勵に遂に澤渡の發電所の灯を見出した時の嬉しさ！　もう寢たまゝ何處までも運んでもらへるのだと思つた時の安堵、然し下界に近づくに

従つて切斷の不安は增して來た。

（6）病院にて

大病院で詳しく見もしないで直ちに切斷される事を恐れる。さりとてチヤチな病院でらない。色々考へたが結局飯田屋の紹介で藤森病院に行く。運轉手に背負はれて病院の玄げず皮を切つて出す。廊下を這つて診察室に入り靴下を取つて足指がついてゐるのに一感覺は全くなかつた。醫者は「何んだこんなもの、大した事はない」と云ふ。二、三回過を見なければはつきりは云へないが先づ大丈夫だと云ふ。消毒の上赤チンをつけてそを貼布する。飯田屋に泊る。その夜は大丈夫との事に喜び合ふ。

（7）第五日（船本歸京、森川は殘る）

朝十時頃二人は病院へ、症狀手當別に變つた事なく苦痛なし。夜七時船本飯田屋の番數日手當をして樣子を見て歸る事とし、病院往復の不便の爲入院を決心する。

（8）第六日

朝船本着京、豫て打電せる友に助けられて下宿へ。先輩望月達夫氏來る。午後より發熱次第に烈しく三九度六分と

なり、驚いて中野の井上博士の診察を受ければ意外に悪く、凍傷による毒素が體内を循環し腎臓炎併發の怖ありとて早速手術、兩手足の感覺の殘存部分迄削られ、輸血、注射を繰返へし容態急變す。望月先輩を察して電話歸京を促さる。

（9）第七日

森川飯田屋の番頭に背負はれて乘車、鹽尻邊りより發熱、吐氣を催し、轉々と苦しむ。左足はほてり、右足は感覺なし。新宿着直ちに築地の林病院に入院、醫者の診斷、「切斷か否か不明、凍傷の程度は第二期と第三期の中間、發熱四〇度」

（10）以後の經過

かくて二人共、殊に船本は內臟機關の衰弱で一時は生命を保證されぬ重態に陷入つたが、其後次第に回復し森川は右足指全部殆んど附根より、船本は右足指全部附根近くより及び右手藥指第一關節より夫々切斷、六月七日船本先づ退院し、同月廿二日森川の退院を見た。

B、原因及び反省（主として船本の手記より）

（1）裝　備

登攀中森川は毛の手袋、福手を次々に乾燥せるものに替へ五枚を使用し、更に第二テラスで右手のスキー手袋一枚であつたが殆んど冷寒を覺えず、第二テラスで右手の替へた。船本は新調の純毛の手袋に替へた。然し替手袋の不足が船本の凍傷を重からしめた原因であつた。

靴下は二人共二枚、然し船本の一枚は綿が交つてゐた。靴は完全なもので大さも適當してゐた。

來日數も經ち、その間の手入れは充分でなかつた。

アイゼンは勿論岩壁登攀の際でもあり、ゆるめに結ぶ事は不可能であつた。

足指の凍傷について最も問題となるのはウインドトラウザー乃至オーバーシューズを用ひ之はサポーター無く唯二人のみで池に而も一時に上る爲に、負荷を極度に節減せねばならなかつた事と、困難な登攀に於る行動の活潑さを慮つて用ひなかつたのであるが、足首から入る雪を防ぎ、靴内の濕潤を減ずる事を考へれば、こゝに足をやられた最大の原因があつたものと思はれる。

（2）氣　温

登攀日の溫度は二人の疲勞の爲調べる事が出來なかつたのであるが、先づ前日と同程度卽ち最低零下一〇度と思はれる。頭部にレースキヤップを被つたのみで、耳も顏も全く無事であつた事より推しても、寒氣はそれ程問題とはならない。濕潤性は嚴冬に比して大であり、殊に今春の天候は上高地では日中は夏の樣な暑さが續いた程であり、晝夜

の溫度の差が大であつた事は大きな原因である。

（3）雪　洞

寒暖計で計つた所では、内部でラジウスを焚かなければ雪洞内の溫度は外に變らない。但し風を通さない點をも考慮する事は出來ない。溫濕潤性は私達の貧しい經驗では何とも云へない。然し雪山で天幕に入る事は、疲勞の爲早くシュラーフサックに入り摩擦の自由を奪はれた事に依り特に影響を受けたとは思はれない。サックに入る事に等しいと云ふ森川の言によれば、雪洞を用ひた事は、一應注目す可きであらう。尤も雪洞を用ひた事

（4）食　事

登攀前夜の食事は豪勢を極め、凡ゆる榮養素を豐富に攝取した。然し登攀に際しては取附下でパンと紅茶を攝つたのみで、岩壁にかゝつてからは二人共に立つ餘地さへなく、又リュックサックを下す場所も少なかつた程で、一切の食事を充分攝り得なかつた事は全身的疲勞の大きな原因であつた。

又登攀を了へて雪洞に歸つても、水分の不足と過激の疲勞は食慾を減退せしめ、森川は蜜柑、酒、ソーセージ、チョコレートの少量を船本は右の外にパンを食つたが充分とは云へなかつた。

（5）睡　眠

十六日、徳澤より五貫程の荷を負つて池へ登り、直ちに雪洞を掘つたので相當の疲勞を免れなかつた。而も寢たのが十一時、起床三時、四時間の睡眠は前日の疲勞に對しては不充分であつた。

右に列擧したものが、大體この不幸を起させた一連の原因であらうと思はれる。次に私達は、兩手兩足の烈しい凍傷にかゝつたが何故右手右足のみ重く、指趾の切斷に及んだかについて見るに、指趾は心臟より遠き爲凍傷にかゝり易いものであるが、右手はピケルを持ち、右足は登攀或ひはジツヘルに際して效き足となり右足に特に血行惡くかゝる結果を招いたものであらう。

C、事後の處置について

(6) 摩擦

前述の如く、「やられた」と云ふ自覺はあつたが、それに力を盡すには餘りに全身の疲勞と睡魔が烈しかつた。殊に森川は靴のまゝシユラフに入つてしまつた。森川の足が船本より重かつたのは全くこの點にかゝつてゐる。翌朝目を醒した時は既に遲く摩擦は全く無用であつた。

(7) 下　山

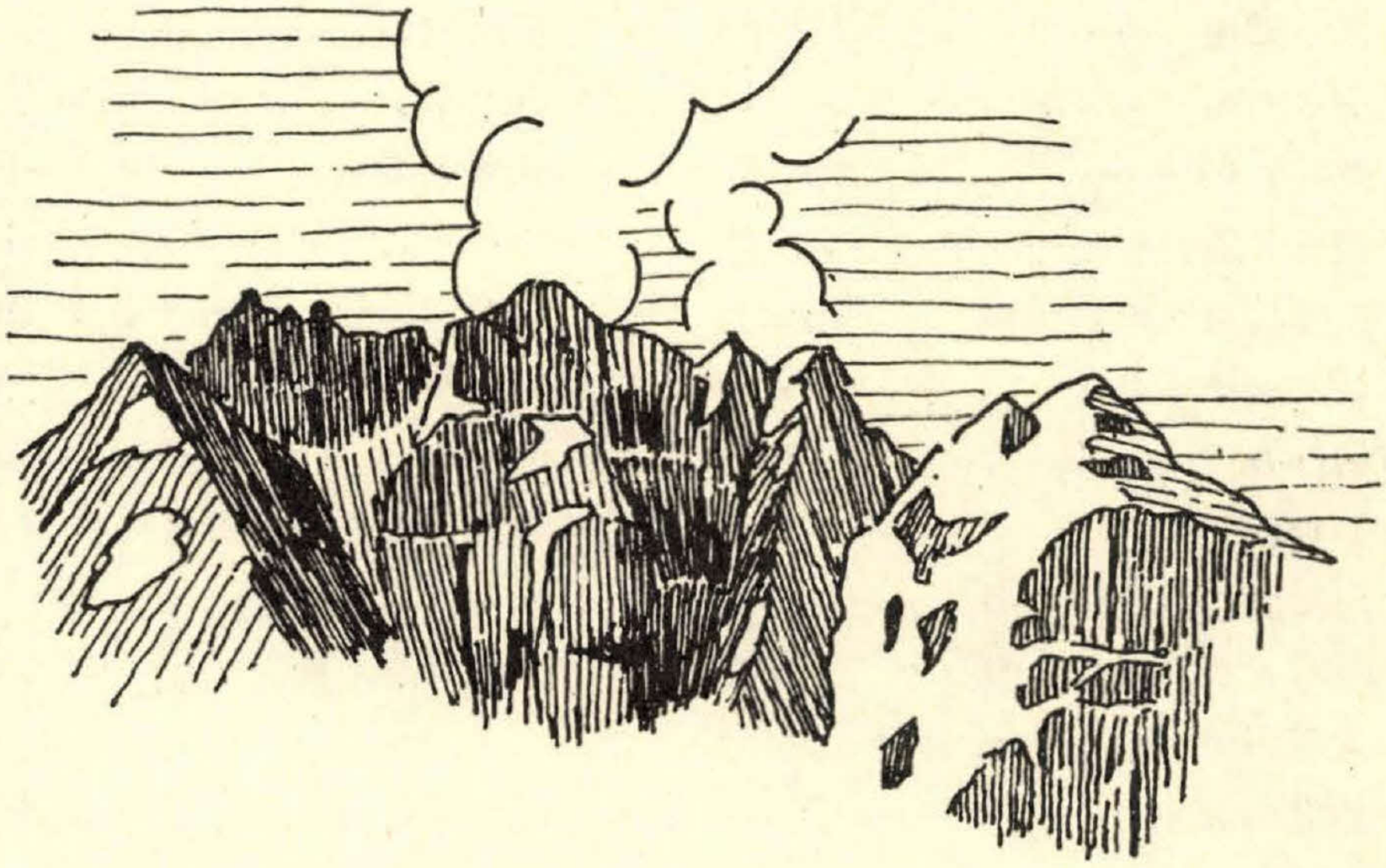
徳澤、澤渡間の徒歩が以後の治療上に及ぼした影響についても無視出來ない。勿論歩く元氣はあつたがもし人夫の背に負はれて下りたとしたら、恐らく凍傷も局部的で濟み、船本の如き全身的內臟疾患は起らなかつたであらうし、又事實踵の烈しい靴づれが避けられた事は否まれない。

以上が大體事實に側して檢討した客觀的要點であるが、この外に、「何故この登攀でやられたのか」「もし……してゐたら、少しでも輕く濟んだらう」と反省される點を簡單に左に揭げて置きたい。

(一)計畫の急變した時準備が不完全であつたこと。
(二)サポート隊の居なかつたこと。
(三)登攀日の出發時間の遲く、思つたより困難であつたこと。
(四)個人的理由の爲登攀を急いだこと。
等である。

以上で私達は前穗高東面、奥又白谷に對する記述を終るものであるが、最後にこの記述の生成について明にしてをき度い。序は全く大塚の責任であり、登攀及行動、雪崩、凍傷については、森川、船本、日江井、大塚の提供した材料より編輯せるもので、大塚がその任に當つた。尙特に一人の記述を中心としたものはその旨記してをいた。

——了——



錄　　記

1937.4——1939.6

登 山 記 錄 索 引

記錄中非常に簡單なもの、スキー行等は省いた。
ゴチツクは登行の月、( )内の字は頁數を示す。

北アルプス

八方尾根…… 12(15, 16)
唐松五龍……3(24, 44)
鹿島槍……10(13)
冷入り爺岳…… 4(24)
鹿島槍東及天狗尾根…… 5(25)
劔八ツ峰……5(2)
劔澤合宿……7(6)
劔槍縱走……7(8)
南澤烏帽子……7(9)
劔針ノ木大瀧越…… 7(10)
大瀧山……10(13)
燕槍縱走…… 7(27)
槍常念…… 7(30)
大瀧常念…… 7(30)
奥又白生活 …… 1(18)3(21)6(49)
8(11)9(31)10(14, 33)
德澤より奥又白谷…… 6(26)
明神東稜……10(32)
槍澤涸澤行…… 3(21)
涸澤合宿…… 7(27)
奥穗高岳…… 3(22)
北穗高岳……10(13)
德澤小舍生活……10(33)12(16)
横尾岩小舍生活 ……12(36)
白出より槍見…… 7(29)
疊岩ジヤンダルム…… 7(30)
岳川谷合宿…… 3(41)
乘鞍岳合宿……12(39)

南アルプス

甲斐駒仙丈鳳凰山縱走… 6(6, 48)
駒ケ岳仙丈岳……5(5)
駒仙丈鋸岳……10(14)
釜無川より鋸岳……11(35)
白峰三山…… 5(26)10(15)
シレイ澤岩小舍生活…… 8(30)
北岳…… 4(46)
聖澤より赤石岳鹽見岳…… 8(12)
大井川東俣より
鹽見越え西俣へ…… 4(47)

八 ケ 岳

八ケ岳合宿…… 3(20)4(1)

奥秩父方面

御座山……10(34)
三峰縱走……11(35)
將監峠雲取山……10(34)
金峰山…… 4(25)
奥秩父縱走…… 9(12)
乾德山…… 5(25)11(36)
大菩薩峠…… 5(26)10(15)

富士及び其附近

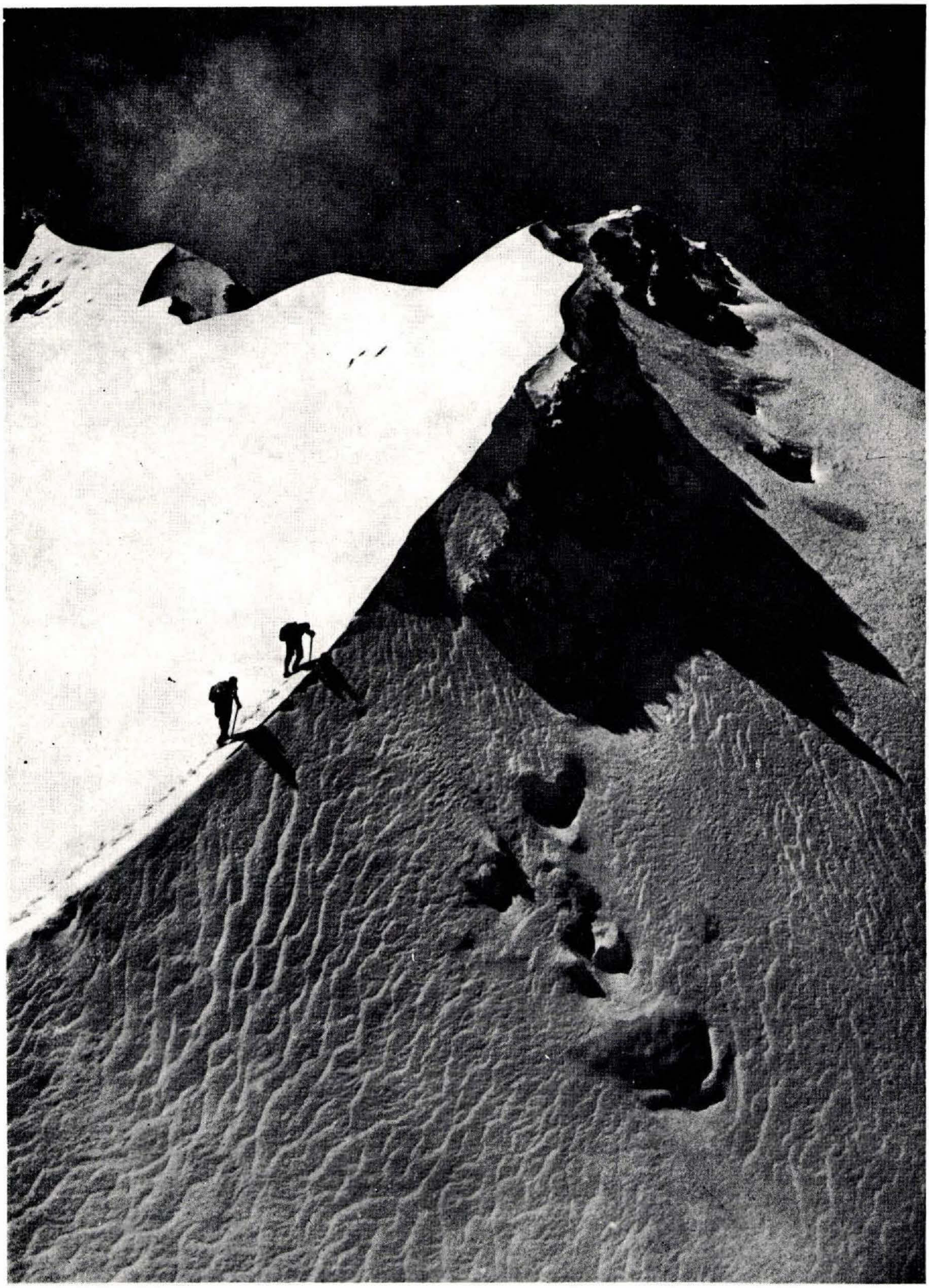
富士山… 4(45)5(1)11(36)12(16)
三ツ峠……5(48)6(49)
大倉高丸…… 4(1, 45)

上越・東北地方

谷川岳……5(48)6(5)9(32)
朝日岳……6(5)
蓬峠越え……11(15)
鳥海山…… 3(22)



千蛇谷にて　　原　鐵三郎



雪稜を辿る　　大塚　武

大倉高丸（新入部員歓迎登山）　小谷部全助、望月達夫、小林重吉、森川眞三郎、佐々木誠、鷲崎雄四郎、岩崎利一、原鐵三郎、大塚武、日江井正己、齋藤明智、里見治男、高橋廣三郎、宮城恭一（以下新入部員）木島利夫、小泉三郎、山田亮三、久保孝一郎、八藤雄一

昭和十二年度（一九三七、四――一九三八、三）

八ケ岳（行者小舎生活）　望月達夫、日江井正己、里見治男、高橋廣三郎

四、二六　曇時々晴　上槻之木（八、〇五）――南澤經由――奥ノ行者小舎（五、五〇）

時々陽はあたるも八ケ岳一帯は濃霧に閉されてゐた。製板小舎より殘雪を見、中ノ行者より輪カンをつける。

奥ノ行者小舎附近で積雪一米位、小舎の土間には厚く氷が張つて仲々よく寒氣を通す。

四、二七　曇ガス

午前中岩崎、日江井、里見、高橋赤岳へ向ふ。午後岩崎下山夕刻天氣好轉の徴あり、南澤を遡つて赤岳、横岳の岩稜を偵察小舎に歸つた頃西方遙に槍穗高の白銀の連嶺が夕陽に映え、青空のドン〳〵擴つて行くのを見て喜ぶ。

四、二八　快晴

今日は二班に分れ、望月、大塚、日江井は赤岳直下へ、里見、高橋は阿彌陀及び赤岳へ向ふ。

赤岳岩稜、中岳、赤岳のコルへ出る澤を暫く登り中途で左手赤岳へ入る急なクーロアールを登つて偃松の尾根へ出る。暫らくして岩場の下へ出た。（此處は夏道からも容易に捲いて來れる）

富士山　森川眞三郎、佐々木誠

四、二六　曇後雨、田野鑛泉――大月――五合目小舎

四、二七　曇　小舎（五、〇〇）――頂上（一一、二〇）――〇、〇〇――五合（二、〇〇）――歸京

裾野は可憐なる富士櫻の眞盛り、連日の雨は富士では雪で、それが腐つてゐて登頂にはアイゼンを用ひず、ゾムメルシーが殆んど頂上近くから使へて快適なる滑降を樂しむ。

大體赤岳直下の岩場は赤岳頂上から落ちてゐる岩稜を中心に、左右一本づゝの岩稜が認められる。今我々の向つてゐるのはその右側の岩稜にあたる譯である。岩は右側程堅くスツキリしてゐる樣であり、この稜も所々ツルム狀の岩塊を交へた痩尾根で規模こそ小さいがハーケンも效く岩質であるし、良き練習場の一たるを失はないと思ふ。この時の所要時間は約二時間。

歸途三人は阿彌陀へ廻つて横岳西壁を眺めたが、取付迄の森林帶に敬遠する。

四、二九　快晴

石室下の尾根より横岳へ、往復八時間。豫定してゐた横岳の西壁は止めて今日は五人一緒にのんびりと動く。

四、三〇　晴

大塚は風邪氣味なので往路通り下山。殘る四名は權現へ縱走する。

小舍(九、一〇)——赤岳、權現への稜線へ出る(一〇、四五——五五)——權現岳(一一、五〇——一二、四五)——編笠山(四、一〇)——押手川(五、一五)——小淵澤(八、〇〇)

晝食をしてゐる頃硫黄より來た靜高の人と一緒になり相前後して行く。權現迄は雪意外に少く早く着く。編笠小舍附近は軟雪多く殊に森林帶はぼく〳〵もぐる。雪は編笠を越えて押手川迄續いてゐた。八ツの高原はほんとに心地よい。前方の甲斐駒は何處から見るよりも高く感ぜられる。

(附記)　この季節の奥ノ行者小舍はかなり寒い。水は先づ得られないのがノルマルであらう。朝は雪もしまつてゐるので輪カンは殆んど不用でアイゼンの領域である。

劍岳八ツ峯

森川眞三郎

五、二〇　曇　上野(九、〇〇)夜行

かね〳〵約束してやつと思ひがかなつた兩名、佐々木、森川座席にくつろいで歡談暫し、もう山に登つた氣になつて居る途端、車内電報、情なや佐々木は急用で眞夜中の横川で廻れ右して東京へ。

五、二一　曇、雨　富山——稱名ホテル(三、二〇)

相棒に行かれる、雨は降る。南富山でぼんやり連絡の惡い電車を待つて居る中に、いやになつて了つた。此儘歸つてやらうかと思つては、灰色の空の向ふの見えない山々を想像して、ぢつとして居た。八ツ峯を登りあはよくばチンネを一本と考へて居たので、持つて來たザイルにも申譯なし、遂に佐伯兼盛を同道する事にした。雨上りの芦峅の部落はみずぼらしい精氣が立ちこめて、何か繪の樣な景色だつた。

五、二二　雨後晴　稱名(一二、〇〇)——天狗平ノ小舍(五、四〇)

上から降りて來た人夫が、今年は雪が少くて八ツ峯邊りも夏山と大差ないと云ふし、よく考へて見るとこれから一週間も大名旅行すると歸れなくなる恐れがあるので、兼盛を歸す事にした。登る程に空は晴れて追分邊りからまぶしい樣な白銀の山肌

が見え隠れする。夜は廣い小舍に唯一人、月が皎々と彌陀ケ原を照して居た。

五、二二　曇後快晴　小舍（五、四〇）——室堂（六、四〇）——別山乘越小舍（九、四〇）

見事な快晴、雄山から別山、劔へかけての稜線に圍れた、一大盆地と云つた感じの彌陀ケ原の眞中に、たつた一人ぽつんとした黒點は、雪原と云ふより沙漠の上を行く様な難行だつた。七ツ道具は勿論、自炊道具一式に、ゾンメルシーをつけると相當な重荷になる。汗が雪の上にぽた〳〵落ちた。苦勞は償はれて、劔澤のゾンメルは樂しかつた。小舍は相變らず、化物屋敷然と靜かなものだつた。

五、二四　晴後、暴風雨　小舍（前二、〇〇）——長次郎出合（二、五〇）——八ツ峯二、三間ヨル（五、五〇）——七、〇〇——もどる——劔澤小舍（九、一〇）——四、五〇）——乘越小舍（九、四〇）

午前零時カツキリ、小舍の柱時計が十二打つのを待つて起き出す。蠟燭の灯で準備をする。大きな自分の影法師がゆらゆらと邊り一杯になる。空は星一つ無く、天も地も全く眠りに落ちた劔澤の闇の中を、サク〳〵と下つて行つた。八ツ峯に取つく頃から天候は怪しくなり風は段々強くなつて、大粒の雨、岩陰に入つて凝つとして居たが、霧が捲き出して雨風は強くなるばかり遂に引返す決心をした。雪は少いと云つても、五月の長次郎谷は殆どグリセード、早いものだつた。雨にはウインドヤツケは無きも同樣、全身びしよ濡れで劔澤小舍に辛くも入り込む。寒いのでどん〳〵焚火をした。雨風は益々猛烈で暴風の狀態だ。此の雨で雪は今朝から二、三尺も減つた。

五、二五　大快晴　小舍（六、〇〇）——長次郎出合（六、五〇）——八ツ峯五、六間ヨル（九、〇〇——九、二〇）——三窓頭（一二、二五）——劔頂上（一、四〇——二、〇〇）——鶴御前——乘越小舍（五、二〇）

前日の疲勞で寢過ぎた爲、八ツ峯下半は斷念する。稜線は處々危かしい雪のナイフエツヂになつて、折柄の快晴に、見て居る中にどん〳〵融けて今にも崩れ落さうな所があつたが、大體夏道と大差無い。雪のお蔭で却つて歩きよい所がある。バランスの神經だけが極度に働かされた爲か、降りのグリセードは實に快適なものだつた。劔のてつぺんから日本海の海の色が冴えて見えた。軍隊劔の直下から、一氣に劔澤目がけて降る。小さな雪崩と一緒になつて痛快なグリセードだつた。風の無い靜かな夕暮、山は燃える程赤くなつた。今はもう、此の大きな小舍の主にでもなつた氣になつて、軒先に腰を下し悠々と此の景色を眺めた。遙か下の彌陀ケ原に夕闇が迫つて來る迄さうして居た。明日はもう下山だ。

五、二六　晴　小舍（六、五〇）——追分（〇、一〇——一、〇〇）——稱名（二、三〇——三、一〇）——藤橋——富山——歸京

雷鳥澤で猛烈な滑落を演じた他は痛快な滑降を樂む事が出來

た。雪を探し〳〵弘法迄はゾンメルを脫がずに濟んだ、里はもう初夏の氣候だつた。

富士山

小林重吉、鷲崎雄四郎、原鐵三郎、大塚武、日江井正已、里見治男、木島利夫、高橋廣三郎、宮城恭一、水田洋、山田亮三、小泉三郎

五、二二　晴　新宿(後二、三〇)——五合(八、四五)——馬返からは月明の針葉樹林の中を登る。

五、二三　曇　小舍(五、四五)——頂上(一一、一〇——一一、四五)——五合——歸京

雪は七合半より續いてゐる。アイゼンのツアツケが丁度埋る程度、下りのグリツセードも快適。

甲斐駒譽利支天南稜

大塚武、日江井正已

五、二四　曇後雨　日野春——大藪鑛泉(九、三〇)

牧ケ原で雨は本降りになつたので前日の疲勞と睡眠不足を癒やす爲鑛泉に宿る。夕方より天氣好轉。

五、二五　晴　鑛泉(六、四五)——サデの岩小舍(五、四〇)

大雨と融雪で大武川は意外に增水、且重荷の爲難行、赤薙橋までは道がよいが、後は細々とした道となる。時々樹間に摩利支天の白い花崗岩の岩頭が聳えて二人の心を躍らせる。

五、二六　晴後雨　摩利支天南稜登攀、所要五時間餘

六丁立の上、道が大武川へ下る所から右へ登り始める(六、〇〇)。こゝから取付くと中央の稜に至るのであるが、暫らくブツシュや石楠花を漕ぐと漸てこの稜の上部が大岩磐の連續で、而も傾斜の强い腐蝕した花崗岩のスラブであるのが見える。私達はこのスラブに壓倒されて、大きなバンドに從つて左側の稜に出る事とした。途中瀧のあるルンゼを橫斷して、左側の稜に出る(七、五〇)。この稜はブツシュ多く傾斜はかなり急で、所々の岩塊は肩に乘つて越えたりした。木を握つて腕力で上る所が多いので、最後には指がつゝつて困つたが、二、六〇〇米邊で上の帶につながる緩傾斜面に着き晝食とする(一〇、二五——四〇)。上の帶に入りそれに從ひ右へ上る。地獄谷が見える程この帶を捲き切つた所で容易な岩を眞直ぐ登つて摩利支天峯着(一一、一〇——三〇)。休んでゐると黒戸の山稜を頂近く登つて來る望月、船本の姿が見える。すつかり嬉しくなつて花崗岩の爛爛砂の斜面をかけ上つて頂に着く(一一、五〇——〇、五〇)。時間も早く技術的にも容易なものだつたが、始の緊張が强く、又時間的にも到底會へないと思つてゐた自分達の仲間にも會へたので、心の底からの充實感に醉つた。仙水峠を經て岩小舍着(四、二〇)。

五、二七　小雨　北澤小舍へ、望月、船本と一緒になる。

五、二八　晴後曇　淺夜峯往復、所要七時間。

一昨日登つた摩利支天の岩峯を心行くまで眺める。

五、二九　小雪後曇　小舍(九、三〇)——黒河内(四、一五)

朝は珍らしくも小雪がちらついた。新綠の美しい中を四人で戸臺川を下つて、伊那の里へ出る。

甲斐駒ケ岳、仙丈岳

望月達夫、船本文治

五、二五　快晴　横手（八、〇〇）——屏風小舍（三、四〇）
　昨日の雨は名殘なく晴れて、日野春から眺める駒、鳳凰の山脈は見上る空にグント高い。神社から笹平まで重荷と初夏の太陽にすつかりのびる。
五、二六　晴後雨　小舍（五、三〇）——駒頂上（一一、三〇）——一〇、五〇）——北澤小舍（四、一五）
　七丈小舍の下から殘雪が多くなる、雪が腐つてゐるのでアイゼン使用せず。頂上では摩利支天南稜に成功した豫科の連中と一緒になり仙水峠まで共に下る。
五、二七　雨
　小舍滯在。午後大武川から豫科の連中が來り合流する。
五、二八　晴　小舍（七、四〇）——仙丈岳（一一、〇〇）——五〇）——北澤小舍（一、四五）
　豫科の連中は淺夜へ出掛け僕達は仙丈へ登る。小仙丈に近づく頃から殘雪多く仙丈はまだ冬衣をぬぎきれない。ゾムメルシーを持つて來なかつたのが如何にも殘念。頂上では殘雪豐かな白峯より赤石の山波に接し惠まれた一日を喜ぶ。
五、二九　曇薄日　北澤小舍——黒河内——伊那

甲斐駒ケ岳

小泉三郎、山田亮三

五、二九　曇　臺ケ原（五、五〇）——屏風小舍（一、一〇）
　望月達夫、船本文治
五、三〇　曇後晴　小舍（五、五〇）——駒頂上（九、一五——一〇、五五）——臺ケ原（四、五五）
　霧で駄目だと思つてゐたが、頂上では割合に眺望に惠まれた。霧の晴間に北岳を始め雄大な南の連嶺を眺めてこんな大きな山を始めて見る二人は大喜び。午後は美事に晴れて、素晴しい綠の中を八ケ岳を眺めつゝ下る。

谷川岳、朝日岳

岩崎利一

六、二　晴　土合（五、五〇）——東鐵武能小舍（八、一五——二五）——清水峠——蓬峠——小舍（四、五〇）
　朝の間は峠の上に雲が懸つてゐたが、晝からは素晴しい天氣になる。雪は少いが、蓬峠の下から國道までは一氣にグリッセードが出來た。
六、三　晴　小舍（七、四五）——蓬峠を經て茂倉岳（一一、三〇）——トマの耳（一、二〇——一、三〇）——西黒澤、土合を經て歸舍（五、五〇）
　今日も天氣が良く遠く八海山迄よく見えた。
六、四　快晴　小舍（七、五〇）——大倉山一八五二米峯（一〇、三〇）——笠ケ岳（一一、四〇——〇、三〇）——清水峠、蓬峠を經て歸舍（五、三〇）
　笠ケ岳の池は大部分雪の下であつた。この尾根から眺めた一ノ倉、谷川方面は丁度大瀧山からの穗高連峯の眺めに匹敵する。實によい天氣で尾瀨の方が紫に浮び上つて見えた。

六、五　曇　小舎（七、四〇）——芝倉澤を經て茂倉、一の倉鞍部（〇、〇〇）——茂倉岳（〇、一〇——二、〇〇）——武能岳——小舎（四、二〇）

この邊の澤では最も雪の多い方であつて容易に登れる。最近に右俣の方から落ちたブロックは恰もローラーの様に雪渓を均してゐる。連日の好晴の後には注意を要する。尾根へ出ると流石に氣持が良い。一人旅の事とて大いにのんびり歩く。

六、六　雨、湯檜曾川沿ひに下山。

甲斐駒、仙丈、鳳凰縦走　里見治男、宮城恭一、木島利夫

六、五　曇後雨　韮崎——白須——屏風小舎（二、四五）

此晩雷鳴を伴ふ凄まじき豪雨、一同爐邊にて膽を冷す。

六、六　雨　小舎（七、一〇）——駒ヶ岳（一二、五〇——〇、四〇）——仙水峠（六、〇〇）——北澤小舎（七、一〇）

頂上に近づくに從つて雨は雪と變り、頂に立つた感激と共に云ひ知れぬ興奮を覺えた。宮城は所用でこゝより下山、六方石への下りで道を失ひ時間を食ふ、駒津峯からは夢中で馳下り北澤小舎まで息もつかなかつた。

六、七　雨　滯在

六、八　雨　滯在

六、九　雨　仙丈岳往復、所要時間七時間半

一寸の間霧が晴れて陽光を一杯に受けた仙丈の頂上が眞青な空をバックにクツキリと眼前に浮上つた時は、思はず快哉を叫んだ。足下の偃松から雷鳥が二羽飛び出す。この夜は星が輝き寒さも酷しい。明日の快晴を豫言するものだ。

六、一〇　快晴　小舎（五、三〇）——淺夜峯（一〇、〇〇——一一、〇〇）——早川尾根小舎（二、二〇——二、四五）——高嶺（五、二五——五、三〇）——北御室（六、五五）

仙水峠から淺夜への尾根から見える摩利支天南面は豪壯そのもの、心待ちにしてゐた北岳も姿を現はし、遙かに北アルプスの連峯も望まれる。

六、一一　晴　北御室（〇、〇〇）——青木の湯（二、二五——三、三〇）——鳥居峠を經て韮崎へ

鳥居峠の躑躅は美しい。實に感じのよい峠だ。

劍澤合宿　柿原謙一（先輩）、小谷部全助、小林重吉、森川眞三郎、鷲崎雄四郎、榎本直司、岩崎利一原鐵三郎、船本文治、大塚武、日江井正己、里見治男、宮城恭一、高橋廣三郎、木島利夫小泉三郎、山田亮三

（前書き）

六月になつてみん〳〵蟬が部室の周圍の雜木林で喧しく啼く樣になると、例年の如く夏山の計畫が本格的となつた。合宿は必ず行はれねばならない。今年は劍澤だと云ふ事は理窟無しに決定され、かくて準備は極めて圓滑に進んだ。この合宿の指針としてあげられた事項を左に簡單に記さう。

(1)先發隊、本隊を分け双方共富山から入り、劍澤迄小舍は全く無きものと假想する。
(2)初心者より直に、ヴアリエーション・ルートに導き、岩登り、グリッセードの練習を行はしめる事
(3)合宿解散後は幕營による縱走を行ふ事
食糧については昨年度より一層組織的に運ばれ等であり器具のものを排して七人用二張四人用一張二人用二張(倉庫)とし、食糧はパンをまとめてパツキングして送つた點と乾燥野菜を採用した點とが特記される。尙ほ此七人用天幕は先輩より新に惠贈されたものであり、こゝに厚く感謝の意を表する。

(行動)

七、九　曇後大雷雨　先發隊(小谷部、森川、岩崎、原、船本柿原)上野發
針葉樹第九號發刊の仕事の爲合宿に行けなくなつた望月、佐々木淋しく見送る。
七、一〇　曇後小雨　富山(六、四〇)——追分附近にて幕營(三、三〇)
ハイヤーの交渉に時間をとる。岩鏡が一面に咲く中に天幕を張る。彌陀ケ原も未だ靜である。
七、一一　曇時々晴　岩崎調子惡く滯在、我々のボツカが上つて行く。
七、一二　雨　發(八、〇〇)——劍澤三田平(二、〇〇)
岩崎はまだ惡いので小舍に殘して共に小止みを利用して天幕を張る。
この日後發隊、上野發
七、一三　雨　滯在
朝、晴さうなので森川、船本、原、源次郎尾根へ向ふもドシヤ降りとなつて引返す。岩崎入幕。
後發隊十一名ハイヤーの交渉に恐ろしく手間をとり稱名瀧下のコンクリート亭に天幕を敷いて寢る。
七、一四　曇後强雨　滯在
柿原、原せめて雄山詣りにでもと出掛ける。濡れ鼠となつて歸る。
後發隊は鏡石の小舍に泊る。雨ですつかり濡れた。
七、一五　曇後雨　滯在
柿原下山、森川乘越まで見送る。
後發隊入幕、地獄谷で一人寂しさうに下る柿原と會ふ。種々の行違ひで携行の天幕二張は遂に無駄骨、小舍を使ひ、而も三日かゝつたのは大に不滿、凄く張り切つた者、體はへばつても氣だけは張切つた者、すつかりへばつた者等々、十一人も居ると色々だ。
三田平では雪渓の消え際に五つも天幕が並び瞬く間に商大村が出來上る。夜は大コンパ、明日は休養と決まり遲く迄劍澤をゆるがす。
七、一六　雨　滯在

小止を見てはゾンメルシュー を樂む。珍らしくも小谷部のかけた罠に兎がかゝつた。兎の愚なせいか、我々の腕の上つたせいか、ともあれ、今にコンビーフは不要になると凄い鼻息、天幕内は意氣軒昂であるが外は相變らず雨がビショ〳〵。

七、一七　曇後雨　滯在

早朝準備したが段々天候が悪化し中止とする。午後より山田別山の岩場に遊ぶ。

が遊びに行つたのが始めとなつて三班に別れて別山の劔澤向の岩場で練習する。短いが面白い壁である。

七、一八　晴　夕立

○八ツ峯（A）　小谷部、里見、山田、小泉

○八ツ峯（B）　森川、船本、高橋、宮城

共にⅡ、Ⅲ間より前後して八ツ峯の頭へ出で長次郎より歸幕

小谷部、森川はザイルパーティーからはなれて直前を登る。久振りの晴に今日の八ツ峯は大いに賑はふ。

○源次郎尾根（A）　小林、岩崎、原

○源次郎尾根（B）　鷲塚、日江井、木島

○源次郎尾根（C）　大崎、榎本

三班一緒に長次郎から最初に左手に入るルンゼから取付いたが、山稜に出てどうにもならないギヤップに出喰して戻り更に長次郎を登り第二峯上のコルに出て登頂、平藏谷より歸幕。

七、一九　快晴

○クレオパトラ・ニードル　小谷部、里見、山田

長次郎から八ツ峯ⅦⅧのコルを經て取付く。

○源次郎尾根、森川、船本、高橋、宮城、小泉

平藏、長次郎間のルンゼより入る。

○八ツ峯（A）　小林、榎本、岩崎、原

ⅤⅥのコルより

○八ツ峯（B）　大塚、日江井、木島

ⅡⅢのコルより

快晴の劔岳のあちこちの岩峯に自分達の仲間がゐる。夕立にも見舞はれず充實した一日。

七、二〇　晴後曇雨　滯在

二日間の勞働で今日は休養とする。

七、二一　曇　滯在

豫定の合宿日數は過ぎたのにプランはかなり殘つてしまつた。一部中堅部員の間には、殘つてチンネ、八ツ峯長次郎側フエース等試みんとする主張もあつたが、結局その氣持で張切つて縱走に向はうではないかと云ふ事になつて、この夜は解散大コンパに暮れる。

七、二二　曇後晴

慌たゞしい天幕撤收、四班に分れて懐しき劔澤を去る。

劔澤より藥師、馬場へ（幕營による縱走）　森川眞三郎、船本文治、大塚武、日江井正已、里見治男、木島利夫、宮城恭一、高橋廣三郎、山田亮三、小泉三郎

七、二二　曇後晴　劍澤天幕（九、〇〇）——雄山——五色ケ原（五、〇〇）

夕方天幕を張り終えて夕陽の赤々と映える五色ケ原の草原から遙か南の槍の黒い尖峰を指さして、重荷を負つたこの大部隊があすこまで越えて行くのだと皆一様に深い感慨に浸つた。

七、二三　晴時々曇、五色ケ原（八、三〇）——スゴ乗越小舎から一時間許り先の薬師の肩にて幕營（三、一〇）

眞赤に夕焼のした西方の鰯雲が漸く紫紺に暮れる。この夜は幕外に出てコ、アを飲み歌を唱ひ、かくて心地良き露營地に第二夜を送る。

七、二四　曇後雨濃霧　幕營地（八、四五）——薬師岳——上ノ岳、黒部五郎の最低鞍部にて幕營（四、五〇）

今日は慘めだつた。上ノ岳邊りから降られて天幕を張り了へた時はヘソまで濡れる。七人用の天幕に十人入り濡れた衣服を脫いだ時の異臭は忘れ難い。夜になつて雨は上り再び星空となる。三人は天幕にくるまつてゴロ寢をする。

七、二五　晴後曇　幕營地（一〇、四五）——三俣蓮華——双六池（七、〇〇）

濡れ物を乾して今朝は出發が遲れる。薄暮の中で池畔に天幕を張り缺乏した石油と米を双六小舍に求め、食事を終つて寢た時は一一時を過ぎてゐた。

七、二六　曇霧　双六池（八、〇〇）——槍肩（一一、五〇）

幕營による集團縱走の目的を貫徹する爲に肩の小舍の近くに岩面を均して天幕を張る。見物人多く、稍々照れ臭さかつた。

七、二七　朝霧快晴　午前中、森川、船本、大塚、日江井の四名小槍へ登る。岩が濡れて鋲靴は快適ならず、他の者大槍登頂。

肩（〇、二〇）——上高地小梨平天幕（六、四〇）

愈々最後のゴールへ。急ぐ者は急ぎ、遲れる者は遲れる。小梨平の手前で一同勢揃ひして堂々上高地入り。

（後記）雨にたゝられて中堅部員としては可成り物足りなかつた劍澤の反動がこの縱走によく表れた。一口に劍槍縱走と云つても、之丈の人數で自分達だけの力で幕營を重ねてくる事はあまり容易な事ではない。その後最も多く思ひ出としてこの旅が皆の口に上るのも、單に參加者が多かつたと云ふ事以上のものをこの旅が有してゐたからではなからうか。

尙天幕はウインパー七人用二張を用ひ、燃料はラジウスと石油を用ひたが、天幕は支柱が重過ぎ、ラジウスは調子が悪く技術的には落第であつた。

南澤より烏帽子、槍縱走

七、二二　晴　劍澤（九、〇〇）——ザラ峠——平小舍（六、一〇）

原鐵三郎、岩崎利一

名殘は盡きぬ劍澤三田平を後に新なる希望を抱いて、縱走の途に上つた。この日霧多く時折振返ると日夜眺め暮した立山連峰が夢幻的に浮び上つてゐた。平に降る頃は夕方で、淙々たる

黒部の川瀬に耳を傾けると一昨年の初秋に訪れた藥師澤出合のあたりの事が想ひ起されて、云ひ知れぬ感に打たれた。

七、二三　晴　小舍（七、一五）――南澤を經て南澤乘越（一、三〇）――烏帽子小舍（四、四〇）

東澤を遡行する積りであつたが、思はぬ增水の爲南澤に變更この谷は荒れてゐて踏跡も殆んど無いが靜かな事は確によい。殊にその源流の雪渓邊りは最も優れてゐる。烏帽子小舍では、「蛋なんか居すか」と保證付であつたが相當ひどくやられた。

七、二四　曇後豪雨　小舍（七、二〇）――東澤乘越――水晶小舍（二、五〇）

永き山の生活に漸やく疲勞の兆候が見えて興味薄い道を豫想以上に時間をとる。赤岳の登りより豪雨に遭ひ、濡れ鼠の如く水晶小舍へ忍び入る。

七、二五　晴　小舍（六、三五）――槍ケ岳（二、二〇――三、〇〇）――大槍小舍（三、四〇）

劍、立山、烏帽子等來し方も、鷲羽、三俣蓮華、槍等の行末も一望の中にある。双六岳から突如として視界に入り來る穗高の峰々と西鎌尾根の途中から仰望する小槍大槍の岩塔は殊に印象的であつた。

七、二六　小雨　小舍（七、〇〇）――上高地（〇、〇〇）

鷲崎雄四郎、榎本直司

針の木越え、大瀧山越え

七、二二　劍澤――五色ケ原小舍。

天幕班と共に。夜は月が美しかつた。

七、二三　針の木を越えて一氣に大澤小舍へ行つて泊る。

七、二四　大澤小舍より大町へ出て對山館に泊る。暑い。

七、二五　下界は暑いので再び山へ舞戻る可く大瀧小舍へ。

七、二六　大瀧山を降り小雨の中を上高地へ、天幕を張つてゐる皆に合ふ。

上高地天幕日誌

七、二五　晴夜雨

針葉樹第九號刊行の爲劍澤合宿を放棄して在京せし望月達夫佐々木誠の兩名は殘務の一段落つきたる昨二四日夜行にて上高地に向け出發す。本日午頃上高地に到着。午後大天幕を小梨平に張る。

七、二六　雨時々止ム

天候思はしくないので午前九時頃ブラリと出掛け、明神池畔の嘉門治小屋に上條孫人を訪れたが折惡く不在。

本日正午頃、岩崎、原劍澤より平來る。又二時過大瀧越えにて鷲崎、南澤、烏帽子、槍を經て榎本來り賑かになる。夜分孫人天幕に來り晩く迄語り明かす。孫人泊る。

七、二七　快晴

望月、佐々木、榎本は明神岳へ。出發九時過、岳川林道二番目のガラ〳〵の澤（地圖に記號のあるもの）をつめる。望月調子惡く暫く行きし水場にて午睡。あとの二人は稜線迄行きて戻

る。歸幕五時半。

鷲崎、岩崎、原は天幕に滯在。

午後六時半頃劍澤より立山、藥師、槍の縱走を完了して森川、里見、宮城、高橋、木島、山田、小泉の諸氏と會し豫て大阪商大山岳部の山本、戸塚等の十名元氣に到着。七人用天幕を增設す。夜は大コンパをなす。

八、二八　半晴夕立

佐々木、鷲崎、船本は西穗高澤をつめて西穗高へ向ひしも夕立にあひて二俣より戻る。

岩崎、原、燒岳へ向ひ夕立の爲直下より下る。

高橋、宮城、山田、榎本歸京の途につく。他の者は天幕に滯在。

八、二九　曇後雨

午前中六人用天幕、大天幕を撤收し荷造を萬端とゝのへ午前

鷲崎、岩崎、原、里見、木島の五名歸京の途につく。

森川、佐々木霞澤岳へ向ひしも雨の爲二俣より引返へしホテルにて休息。他はテントに滯在。

七、三〇　雨後止ム

小泉歸京す。天候不順にて山へ行けず一同幾分腐り氣味なり。森川、佐々木德澤往復。

午後二時頃小谷部灘一本ブラ下げて關西より來る。夕刻孫人を招じ晩く迄痛飲す。(部員外二名燒岳へ)

七、三一　曇後晴

午前十時頃船本、大塚、德本越えにて下山す。本日より五名となる。

午後一時西糸屋の一室にて大阪商大山岳部の山本、戸塚等の五氏と會し豫て大阪商大山岳部より提案ありし三商大山岳部懇談會なるものにつき談合す。(但し之は其後成果をみず)

八、一　晴夕立

小谷部、望月、森川、佐々木、日江井の五名にて奥又白谷へ向ふ。(奥又白谷生活の記錄參照のこと)

八、五　晴

午後六時奥又白谷より五名歸着。

八、六　雨後止ム

奥又白生活

小谷部全助、望月達夫、森川眞三郎、佐々木誠、日江井正己

八、一　快晴夕立　池に天幕を張る。

八、二　晴夕立　五人二班に分つて四峰偵察、小谷部、望月、佐々木は甲南ルートへ、森川、日江井は正面岩壁へ。

八、三　晴　小谷部、森川、四峰明大ルート登攀、他の三名は普通のルートにて前穗高往復。

八、四　晴　森川、日江井は前穗高東壁登攀、他はのびる。

八、五　晴　上高地へ

尙之等一切について、詳しくは本文參照のこと。

聖澤より赤石岳、塩見岳

大塚　武、山田亮三

八、一三　快晴　下山波高島（五、〇八）——新倉（一一、四〇——〇、三〇）——轉付峠——流澤（七、〇〇）

お盆で山人は里へ出て來るのに二人は重荷を負つて山へ入る

八、一四　快晴　流澤（六、四〇）——椹島（九、五五——一一、二五）——神の鳴合（一、四五——二、二〇）——日影澤出合にて幕營（五、〇〇）

渡渉又渡渉の一日。

八、一五　快晴夕立　幕營地（八、〇〇）——大鐵砲（九、三〇）——次の釜を右岸から大きく捲かんとするも踏跡全く無く且つ急崖にして果さず、引返して鐵砲脇の砂上に幕營（二、五〇）

夕立烈しく水面は見る〳〵高まり、稍々不安を感ずるも間もなく止む。

八、一六　快晴　大鐵砲（六、四五）——上河内岳北の肩より發する標高數字ある尾根を登り二、二五〇米附近（五、〇〇）猛烈な藪尾根をかすかな踏跡に從つて頑張る。國境への見透しも定かならぬ尾根に天幕を敷いてゴロ寢をする。栗鼠が頭のまはりを徘徊して二人とも旺に水の夢を見る。

八、一七　快晴　幕營地（五、三〇）——國境線（九、〇五——九、二五）——上河内岳往復——聖平（一一、三〇）

八、一八　快晴後曇夕立　聖平（六、四五）——聖岳（九、〇〇——九、三〇）——百間洞（二、五〇）

八、一九　快晴後曇夕立　百間洞（七、三〇）——荒川岳——高山裏幕營地（三、五四〇——一一、三〇）——荒川岳——小河内岳——三伏小舍（二、五〇）

夕立に散々たゝかれて火もつかず、空腹を抱へて山びるを拂ひつゝ一夜を送る。

八、二〇　曇夕立　幕營地（七、二〇）——三伏小舍（二、五〇）

八、二一　快晴後曇夕立　三伏小舍（六、〇七）——鹽見岳——蝙蝠岳——西俣櫻島（二、〇〇）

この日時計破損時間不明。

八、二二　晴　櫻島（六、五〇）——新倉（〇、三〇）

聖澤はかなり難行した。伐採以來相當な年月を經たこの邊の谷では鐵砲が所々に殘骸を曝すのみで、昔の道は先づ最早通れないものと思はねばならぬ。

奥秩父縱走

大塚　武、日江井正己

九、三　晴　韮崎——八巻（六、三五）——黒森——松平牧場（一〇、四〇——一一、三〇）——瑞牆山往復——大日小舍（四、三〇）

牧場には人間の鹽の香を慕つて來ると云ふ馬も今は徴發されて一頭も居ない。

九、四　晴　小舍（七、三〇）――金峰山（一〇、二〇）――一一、三〇）――大弛小舍（二、〇五）
　五丈岩に遊んだり、信州側の黒い谷を見て過した一日。
九、五　快晴　小舍（七、〇〇）――北奥千丈――國師岳――甲武信岳――甲武信小舍（一、二五）
　美しき秋晴、然し思つた程の深さはない。殊に國師の頂等都會の公園的なのに失望する。
九、六　快晴後曇　小舍（七、〇〇）――破風山――雁坂峠――笠取小舍（一、三五）
　今日も晴、この邊の峠は仲々感じがよい。
九、七　晴後曇　小舍（七、三〇）――將監峠――飛龍山――雲取の腹を捲いて武州小舍（三、〇五）
　霧の茅戸の尾根を歩いた一日、仙人の鹿笛を聞く。
九、八　晴　小舍（七、三〇）――雲取山――唐松谷を下る――日原――氷川（五、三〇）
　晴天六日間、自分等の見た秩父は幽玄でも閑寂でもなく極めて明朗な秩父だつた。

鹿島槍ケ岳

岩崎利一、船本文治

一〇、七　曇後晴　築場（八、〇〇）――黒澤峠――鹿島川徒渉――冷澤小舍（一一、三〇－五〇）――二俣――冷池小舍（四、四五）
　白銀に裝はれた東尾根の岩峰を仰ぎつゝ、錦繍をまとへる黒澤峠に小憩。落葉に積る新雪を踏んで、赤岩尾根を登る。
一〇、八　雪　小舍より槍往復
　キレツト小舍へ入る豫定で出發したが、黒部より吹寄せる横なぐりの吹雪激しく、遂に引返す。
一〇、九　快晴　小舍（九、一五）――槍頂上（九、五〇――一〇、一〇）――爺岳――種池（一、一七――二、〇〇）――扇澤小舍（四、四五）――大町（八、一〇）
　蒼穹の下快情に惠まれ再び槍へ登る。歸途扇澤出合で路を失ひ、澤通し下つた。

北穗高岳、大瀧山

小谷部全助

一〇、一七　小雨　島々――（バス）――上高地――德澤小舍（五、〇〇）
一〇、一八　曇　德澤（六、〇〇）――涸澤池ノ平（九、〇〇）――北穗高澤――北穗頂上（一二、〇〇――四〇）――往路ヲ戻ル――德澤（四、三五）
　吹雪が續いた後なので冬山の樣な感じだつた。北穗高澤には小規模乍らデブリさへ出て居た。積雪は池ノ平の上から急に多くなり一尺から二尺位。
一〇、一九　曇　德澤（一一、〇〇）――大瀧山頂上（二、〇〇――、三〇）――德澤（四、四〇）
　手ぶら下駄ばきで出掛ける。紅葉と新雪の素晴しい眺望を滿喫して戻ると奥又白計畫でやつて來た森川、日江井、大塚が來

て居た。明日から四人で又白池の天幕へ行くことゝする。

奥又白生活　小谷部全助、森川眞三郎、日江井正已、大塚武

一〇、一九　曇　森川、日江井、大塚上高地より徳澤へ、先着の小谷部と合す。

一〇、二〇　快晴　徳澤(九、三〇)——池(三、三〇)

一〇、二一　快晴

(A)　Ⅳ峰バットレス　小谷部、大塚

(B)　前穂高東壁　森川、日江井

森川、日江井はこの日ビバーク、閤の中でハーケンを打つ音が聞え、懐中電燈がつく。大聲で話し合ふ。

一〇、二二　曇霧

小谷部、大塚はビバークせる二人を迎へに食糧を持ち前穂高へ。頂上に三時間居たが、二人が登頂寸前最後の壁のチムニー狀の所で發した返事が意外な反響をし、且つ聞き違へたので下へ降るか、横へ捲いたのだと思つて歸幕(一一時)。二〇分おくれて二人は登頂、空腹をかゝへて下る。

一〇、二三　晴後曇　滯在

一〇、二四　快晴

(A)　前穂高東壁　小谷部、大塚

(B)　Ⅳ峰バットレス　森川、日江井

惠まれた極めて愉快な登攀、頂上では、今度の行の全く成功せるを喜び合ひ乍ら一時間ものびる。

一〇、二五　快晴　下山

幕營用具の一部を例の木に縛りつけて池を下る。小谷部、森川は上高地よりバスで、大塚、日江井は大瀧小舍へ(五、〇〇)

一〇、二六　快晴　小舍(六、五〇)——一日市場(一、一〇)

尙登攀の詳細は本文參照のこと。

甲斐駒ケ岳、鋸岳、仙丈岳　山田亮三、小泉三郎

一〇、一九　曇　台ケ原(六、〇〇)——笹ノ平——屏風小舍(二、一〇)

一〇、二〇　快晴　小舍(八、五〇)——七丈小舍——頂上(一、〇〇——二、〇〇)——六合小舍(三、〇〇)

素晴しい快晴で頂上から三六〇度の眺望は實に良い。六合の小舍は期待通り感じが良かつた。良い月夜で小舍の窓から仙丈が物凄い。

一〇、二一　快晴後曇　小舍(六、一五)——第二高點(七、四五)——大ギヤップ澤を下り引返す——大ギヤップ(一〇、〇〇)——小舍(〇、四五)

大ギヤップ澤より鹿の窓に至るルンゼを見誤り、第一高點に達しなかつた。大ギヤップの附近は相當陰慘で一年生二人では一寸氣を呑まれて了つたのかも知れぬ。

一〇、二二　曇　小舍(八、四五)——六方石——仙水峠——北澤小舍(〇、一五)

小舎から六方石へ直接通ずる道を行つた。
一〇、二三　快晴　仙丈岳往復（七、三五――二、五〇）
一〇、二四　快晴　小舎――戸台――伊那――歸京
戸台川の紅葉が美しい。振返へると駒のあたりに白雲が飛んでゐる。

白峰三山

里見治男、宮城恭一、木島利夫
一〇、一九　晴　芦安（八、四五）――夜叉神峠（二、〇〇）――鮎差――蝮平小舎（五、二〇）
峠の登りはかなりこたへるが、眼前の三山の偉容は我々の山への思慕を高めずにはをかない。
一〇、二〇　晴　滞在
一〇、二一　晴　小舎（四、三〇）――砂拂（二、一五――三、〇〇）――池（九、〇〇――一〇、〇〇）――北岳小舎（五、四五）
北岳を捲いて釣尾根の針葉樹林の中は所により一尺位積つてゐる。
一〇、二二　雪後曇　北岳往復　滞在
一〇、二三　晴　小舎（五、三五）――間ノ岳（七、四五――八、三〇）――農鳥岳（一〇、〇〇――一一、〇〇）――大門澤――奈良田（五、一五）
素晴しい天氣、遙に北、中央、鹽見等の眺めが美しい。
豫定を變更して紅葉の山麓を強行、奈良田の民家に宿る。
一〇、二四　晴　ドノコヤ峠を越えて歸京

大菩薩峠

柿原謙一（先輩）、原鐵三郎
一〇、二八　番屋より往復
眺望は仲々良く、南にはまだ雪は見えないが富士山はかなり白い。茅戸で晝寢をしてのび〳〵と歩く。

大倉山、武能岳、蓬峠越

望月達夫、佐々木誠、大塚武、木島利夫
一一、二七　晴時々曇　土合より武能小舎着　空身にて武能澤出合對岸の尾根より大倉山往復所要七時間。
雪は約一二〇〇米邊より續き、途中で輪カンをつけたがよくもぐつた。一ノ倉の眺めも霧で裏切られた。
一一、二八　曇　小舎（五、三五）――武能岳（九、四〇――一一、〇〇）――蓬峠を經て越後中里へ（五、四〇）
豫定の谷川岳縱走は惡天とラッセルで中止する。

八方尾根

原鐵三郎、岩崎利一
一二、四　雪　四谷（一一、四〇）――細野――丸山順榮氏宅（四、三〇）
猿倉へ入るつもりで二股迄行つたが餘りひどいラッセルなので斷念して引返す。
一二、五　雪　細野（九、一五）――馬止め――細野（四、〇〇）
八方尾根に目的地を變更して、行けるだけラッセルをして置

いた。

一二、六　雪　細野（六、〇〇）――馬止め――黒菱小舎（一〇、三〇）

一二、七　晴　小舎（八、三五）――八方池の稍、上方迄登つて引返す――小舎（二、五〇――三、〇〇）――四谷（六、二五）

スキーは快適に滑れたが唐松岳へは登れなくて殘念であつた。

富士山　森川眞三郎、佐々木誠、里見治男、山田亮三

一二、五　晴　吉田（一〇、〇〇）――五合（三、〇〇）

一二、六　晴烈風　五合（四、四〇）――八合（九、〇〇）――引返し小御岳に遊ぶ

晴天續きで雪面は相當堅く物凄い烈風で再三危險を感ず。八合で恢復を待つたが駄目なので登頂は斷念した。冬山のトレイニングにはもつてこいであつた。

八方尾根スキー行　吉澤一郎、村尾金二、近藤恒雄（以上先輩）

望月達夫

一二、二五　曇小雪　大町（九、二〇）――細野スキー場――黒菱スキー小舎（三、〇〇）

黒菱は相當混雜してゐた。雪質よし。

一二、二六　雪　午前中八方山に登り歸京

（附記）　家庭の事情で合宿に參加出來ず殘念であつたが、二日の暇を得て先輩と行を共にする。奥又白の事情を知つて居れば早速でも行つたものを。

德澤小舍生活　小谷部全助、森川眞三郎、佐々木誠、榎本直司、船本文治、岩崎利一、原鐵三郎、大塚武日江井正己、里見治男、木島利夫、山田亮三小泉三郎、久保孝一郎

一二、一七　晴　先發隊（森川、榎本、船本、大塚、日江井）入山

一二、一八　晴　中の湯着（四、〇〇）――德澤（七、〇〇）

一二、一九　小雪曇　中の湯（八、四〇）――八合（九、〇〇）――引產屋澤は輪カンで崩潰の上を廻つた爲ラッセル甚しく仲々辛かつた。德澤の手前の濕地で日が暮れ一寸迷ふ。

一二、二〇　雪　德澤（七、五〇）――ルンゼ下（九、四五）――一〇、二〇）――ルンゼ登攀中雪崩に合ふ（一一、二〇）――ルンゼ下（〇、三〇）――德澤小舍（三、〇〇）

之等の經過一切について本文を參照せられたし。夜は負傷せし日江井を勞はりつゝ今後の事につき相談する、結局榎本一人を殘し、他の者は一旦日江井と共に中の湯に下る事とする。

一二、二一　曇　德澤（九、〇〇）――中の湯（四、四〇）

一昨日は重荷に耐へて希望に充ちた上高地入りをしたのに、今日は三角帶で腕を釣つて輪カンでポクポク〳〵山を下る。五千尺

では孫人等に會ふ。心配さうに尋ねる彼に「スキーで轉んで、荷物が重かつたんで」と答へてをく。

産屋澤は取入の邊りから河原へ下りて下を廻つたが、スキーでは滑つてしまふ所を落ち込んで河原の石に輪カンが狹まつて腕が使へず立往生してしまふ日江井の姿を見ると、何とも云へず暗い氣持になる。中の湯では丁度今着いたばかりの後發隊に遭ふ。下級生には以後の志氣を考へ、こゝでもスキーで轉んだ事にしてをく。夜は一部の者で今後の計畫につき話し合ふ。先づ日江井は小谷部が附き添つて松本に下し、醫者に見せた上で歸京せしめ、小谷部は一日遲れて入山する事とする。計畫自體については既に池に天幕を建設してゐる筈の先發隊はこの有樣であるし、各人の受けた精神的打撃も少くないので、豫定した規模での池の合宿をそのまゝ行ふのは無理だらうと云ふ事になつて、スキー練習と奥穗高登頂を目的として一週間全員德澤に合宿をなし、奥又白の計畫は日江井の代りに船本を補ひ、他に純然たるサポート數名を加へてその後に行ふ事とする。

同日後發隊（小谷部、佐々木、原、岩崎、里見、木島、山田小泉、久保）及び常盤敏太教授も特別に參加されて合計十名島々より入山。

雪山も始めての者多く、仲々難行。中の湯で荷物を下して靴をぬいでゐると先發隊四名來る。

一二、二二　曇

昨晩の決定に從ひ、小谷部、日江井は松本へ、他は德澤へ。産屋澤は今度は眞中を通る。

一二、二三　晴　全員奥又白ルンゼ下の附近にてスキー練習。

今日は良い天氣で北尾根の雪烟が凄じい。斜面の傾斜も適度で雪質は上乘、乘鞍よりよい等と云ふ者がある。

ルンゼは時折スノーボールが落ちる位で今日登れば調子は良かつた事だらう。七時頃小谷部上つて來る。忘れ物等して澤渡を出たのが十二時だと云ふから隨分ピッチをあげたものだ。

一二、二四　雪　奥穗高へ。

奥穗高へ登頂す可く張切つて出掛けたが天候次第に惡く池ノ平では全く吹雪となつたので、スキーを享しみ乍ら早速下る。森川、久保は身體の調子惡く小舍で休養。

一二、二五　晴後小雪

常盤教授下山、小谷部、森川、佐々木、榎本、上高地迄見送る。夕方から全員で下又白谷へスキー練習に出かけて基本練習を行ひ、暗くなつて歸舍、多少過勞の感あり。

一二、二六　曇後吹雪　全員奥又白より前穗高へ

深夜に起きて、出掛ける。空は眞の闇で星一つ瞬かず雪が降つてゐない丈がせめてもの慰み。とにかく行からと云ふ事で一列になつた懷中電燈の光が梓川を登つて行く。前の者のスキーが左右交互に機械的に動くのに調子を合せて進む。が皆氣分的にも肉體的にも張り切らぬ事おびたゞしい。漸て奥又白入口迄來る頃雪片が何處からともなく顏に當る。「止めよう」確に氣分的には異口同音であつた言葉が誰かの口からもれて、又廻れ右

をして葬列の様な行進が續いて小舍に歸るや忽ち寢込んでしまつた。明くる朝？　目を醒して惡夢の樣だつたとは蓋し云ひ得て妙なり。

一二、二七　吹雪

終日吹雪の咆吼を聞いて食つたり駄辯つたりの生活を送る。明日下山するものがあるので夜は大コンパを行ふ。「螢の光」が深い感傷を以て最後の幕を閉ざす。

一二、二八　吹雪　榎本、原、岩崎、久保、小泉、德本峠越えで下山。小谷部峠迄見送る。小舍（八、〇〇）——（一二、三〇）——德本峠（一二、三〇）——島々（五、三〇）

殘留者八人。今後の好天を待つて、登攀隊（小谷部、森川、船本、大塚）サポート隊（佐々木、里見、木島、山田）として池へ上る事とする。

一二、二九　吹雪　全員動かず。

一二、三〇　吹雪　あまりの惡天に再び計畫を變更、里見、木島、山田はこの日下山（五千尺泊り）翌日歸京

殘る五名、夕方よりトランプを始め、天候に對する八ツ當りか、翌日午前四時迄續ける。多少狂氣の嫌あり。

一二、三一　烈風　次第に晴れる。

遲くまで寢込んで起きて見ると稍好轉した模樣、時の經つと共に晴れ上つてくる。二階に上つてプリズムで眺める。一體に雪量の增した事驚くばかり。隨所に表層の落ちた線が見えて不氣味。然し愈々明日は登れさうだと云ふので久振りに張り切つて準備する。（以下奥又白幕營の項參照）

奥又白幕營（德澤合宿に引續き）

小谷部全助、森川眞三郎、佐々木誠、船本文治、大塚武

一、一　快晴　小舍（前二、三〇）——ルンゼ下（四、二〇——六、二〇）——池（一〇、二〇）

池へ到着後直ちに天幕設置す。午後三時より小谷部、船本は四峰下へ、佐々木、大塚は一峰下へラッセル。

一、二　雪　午前二時起床するも天候全く惡化。

船本、大塚下山に決し八時天幕發、ルンゼ脇の尾根を愼重に下降し德澤へ、更に殘荷運搬のため德澤、ルンゼ入口間往復す。

一、三　雪　滯在

一、四　雪　滯在

一、五　霧時々晴　小谷部、森川明日前穗高東壁登攀に決し、午後二時間程ラッセル

一、六　晴後雪　前五時半小谷部、森川出發　佐々木前穗登頂の豫定にて夜明をまつもやがて再び雪となり登頂を斷念。先發の二人も途中より引返す。食料其他不足のため直ちに下山準備、天幕發（二、〇〇）——ルンゼ下（三、〇〇）——德澤（四、五〇）

一、七　雪　小舍（一〇、〇〇）——白澤渡（一一、〇〇）——本峠（一、〇〇——一、五〇）——島々（六、〇〇）——歸京

詳細は本文參照のこと。

野澤溫泉　森脇芳之、鷲崎雄四郎、木島利夫、外部員外

一、一——一、六　　岩崎利一　外二名

山田溫泉

一、二——一、六　晴れた朝後立の山々が眞近く見えた。こゝは便利で山も相當面白い。唯雪が惡いと時はいけない。

志賀高原、澁峠越え　　原鐵三郎他一名

一、九　雪時々晴　澁(七、三〇)——上林(九、〇〇——一一、〇〇)——丸池(一四、〇〇)

スノー・コンディションが實に良い。乘鞍より以上の乾燥粉雪だから登るのに後滑りして苦しむ。

一、一〇　雪後晴　丸池(七、三〇)——熊の湯(三、〇〇)

新しく出來た鐵道省山の家に泊る。安くて良いサーヴイス。附近にて練習。

一、一一　晴後曇　熊の湯(八、〇〇)——橫手山頂小舍(四、〇〇)

スにて澁川經由歸京

下りは早い、すぐ草津へ出る。橫手から草津へは迷ひ易いから氣を附ける事。スキーの良い練習になつた。

霧ケ峰スキー行　　小谷部全助、森川眞三郎、佐々木誠

一、八　晴

赤城山懇親スキー行　吉澤一郎、村尾金二、增山淸太郎、小柳二郎、新羅二郎(以上先輩)、森川眞三郎、佐々木誠、岩崎利一、山田亮三、小泉三郎、久保孝一郎

一、二三　曇

午前中は雪が固くて始末が惡かつたが、午後から地藏岳に登つて全員でスキーの競演をやつた。

野澤スキー行　　小林重吉、小谷部全助、外一名

二、九——一一

雪は非常に多かつたが、雪質が良い爲相當快適だつた。

蓬峠スキー行　　久保孝一郎、山田亮三

二、一三　快晴

人がぞろ〳〵行くので、跡をつけて行つたら、變な所へ引張つて行かれ、面倒くさくなつて峠にも行かず下りてしまふ。馬

鹿な目を見た。

八ケ岳合宿　望月達夫、大塚武、里見治男、木島利夫、宮城恭一、高橋廣三郎、山田亮三

三、七　小雨　茅野――柳澤――赤岳鑛泉

雪少く腐る、いつのかと一驚する。

三、八　快晴　全員阿彌陀へ登頂す。中、阿彌陀コルより阿彌陀への斜面クラスト強く下りはアンザイレンす。

三、九　快晴後霧　大塚、里見、木島は赤岳直下へ。

取附より赤岳頂上まで四時間を要した、頂上直下の稜より一つ左の稜を登つたが岩場としては興味少し。望月、宮城、高橋山田は鑛泉裏より峰ノ松目を經て硫黄岳、横岳へ。輪カン及アイゼンの兩用。

三、一〇　朝雪後曇　北澤奥にてスキー練習　狭いゲレンデの事とて操作意の如くならず不愉快であつた。

三、一一　曇時々晴　望月、里見、木島は横岳西壁大童心直下偵察、可能性少し。大塚、山田は小童心右側を偵察大體行ける見込なるを確む。後全員昨日より奥の澤にてスキー練習稍快適。

三、一二　快晴後霧　大塚、里見、木島横岳西壁登攀す、S字形のゴルジュの蒼氷に一寸苦勞す。二ピッチ約一時間半を要した。之より上は大體ルンゼをつめる。瀧は捲いて稜へ出て灌木交りの斜面を登る。別に稜線まで四時間位で、出た所は小童心の右、二十三夜と横岳頂上の稍頂上寄りである。

横岳の一ピークに着いて霧に捲かれ乍らも喜び合つた事が忘れられない。

同日、望月、宮城、高橋、山田は中岳及阿彌陀のコルより赤岳頂上へ。

三、一三　曇　鑛泉(〇、一〇)――柳澤(四、一〇)

本日をもつて合宿を終了し一週間の樂しい生活を送つた鑛泉に別れを告げて春淺き里へ下る。

(後記)　學部と豫科と試驗終了期日のかなり異る我々は以前から三月の山には色々摩擦が多かつた。その爲に學部としてもこの春を豫科は豫科として相當充實し、豫科も又纏まつてゐたやつて見ようと云ふ氣分からこの合宿が行はれた。大體北澤南澤でのスキー練習と赤岳直下と横岳西壁の登攀を目標としてプランは樹てられたわけであるが、登攀は些か期待外れでありスキー練習も又意外の寡雪と堅雪で不滿足なものであつたが、先づ計畫の限りに於ては成功したものと云へやう。

然し他方前穗高東壁のアクシデントがサポートさへあれば起らなかつたであらう事を考へると部としてこの種の行方に對しても又反省せざるを得ない。大學山岳部の今後の進路に關しては、色々考へねばならぬ問題が多いが我々の部だけについて見ても、ノルマルな狀態から云つてあまり大きな部になれないと

云ふ宿命的な色彩の濃いのを見る時、この春の行動は今後の部の動きに對する注意せねばならぬ試金石であつた様に思へる。然し大きな部と强力な部とは自ら異別な事であつて我々の目標も亦如何にして調和ある强力な部を作るかにあると云へやう。

以下技術的な點を簡單に記すならば、姐原の泥濘はとてもひどく、出入共馬を使つたが調子は良かつた。スキーは製板所から使へたが、林道は馬橇で固められ、宛らボツブスレー的で滑降は快適でなかつた。雪崩は注意する程のものは殆んどない様であるが、唯赤岳横岳間の數多の小ルンゼから落ちるものは小さいが通路がせまいから之等が登路の一部に當る時は多少の注意を要する、及び赤岳阿彌陀の稜線の兩側共コンデイションの如何によつては落ちる危險がある。横岳の西面は我々の登路とは異るものを選ぶ場合にも、取付の選擇とルンゼ中の瀧の蒼氷が面倒な位のもので快適な岩登りは得られないと思ふ。（大塚）

原鐵三郎、他一名

野澤溫泉スキー行

三、七——三、九

雪質惡かつたが八日毛無山へ登つた日は良かつた。

頂上の樹氷は美しかつた。

佐々木誠、船本文治

淵澤、槍澤行

三、一一　晴　島々——中の湯

種々の都合で計畫も變り二人は兎角穗高へ入る。

三、一二　薄晴　中ノ湯——德澤

今年は雪が少ない。三月に入つて三度も降つた雨と射る様な陽光に暖な土が處々顏を出してゐた。

三、一三　晴　淵澤へ行つてみる。

明日から穗高小舍に入る積りで荷物の一部をあげ乍ら偵察行とする。

三、一四　曇後晴　德澤（三、三〇）——淵澤を經て穗高小舍直下より引返す——德澤（二、〇〇）

燦然たる星空、昨日のシュプールに從ふ。屏風岩にまつはる雲が時折小雪を降らしたが池の平へ出る頃には紺碧の快晴となる。池の平でデポし、靴のまゝクラストした雪面を登る。佐々木病の氣配あり、小舍直下の尾根近くより引返す。

三、一五　快晴一時小雪　德澤（八、三〇）——槍小舍（一一、〇〇）——槍澤を途中まで登り引返す——德澤（二、〇〇）

不調の佐々木を小舍に殘し獨り槍澤へ入る。遂に今日も頂を踏まず、夕方森川來り、明日より又白池へ上り前穗高の東壁を登る事とする。

三、一六　快晴　佐々木下山

一緒に又白の池に上りサポートしてくれる豫定だつた佐々木身體の調子惡く淋しく下山。

小谷部全助、森川眞三郎、船本文治

前穗高東壁

三、一六　快晴　森川、船本池へ上る。德澤（九、三〇）——又

白池(二、〇〇)

松高ルンゼ下の巨大なデブリに十二月の雪崩の思出を新にしつゝ小憩、雨と日射と雪崩に固く凍結したルンゼをステップを刻んで登る。池畔に雪洞を掘る。ラジウス壊れ炊事に苦心する。

三、一七　快晴　前穂高東壁登攀　雪洞(六、〇〇)——東壁下(八、一五)——第二テラス(後九、三〇)——主稜線(一一、〇〇)——雪洞(前二、〇〇)

三、一八　快晴　滞在

小谷部畫過ぎ來る。

三、一九　快晴　雪洞(二、三〇)——徳澤(五、〇〇)

三、二〇　快晴　徳澤(八、〇〇)——五千尺(一一、〇〇)——一一、三〇)——澤渡(八、二〇)——松本(九、四五)

この行については一切本文參照のこと。

小谷部全助

奥穂高岳

三、一七　晴　澤渡——徳澤

三、一八　晴　徳澤——又白池の雪洞

三、一九　晴　雪洞——徳澤

前穂高東壁登攀を樂しみに張切つて登つて來た所、森川、船本の故障の爲空しく腕を撫して戻る。

三、二〇　快晴　奥穂高登頂　徳澤(六、〇〇)——池の平より奥穂高直下のルンゼを經て——奥穂高岳(一、四〇)——一、一〇)——徳澤(六、〇〇)

學生々活、最後の登頂、涸澤合宿や北岳、荒澤奥壁行の際に於ける團體的な賑やかな氣持に反して今は唯一人廣い涸澤の雪にシュプールを印す寂莫さ。山を知り初めた頃のものさびた歡喜を仄かに想出しつゝ行く、それは泡にしつとりとした最後の山であつた。涸澤の雪は連日の好天で固くクラストしてスキーには向かないが本谷以降はよく滑る事が出來た。

鳥海山

原鐵三郎、岩崎利一

三、一二　上野午後一〇、三五　夜行

三、一三　薄曇　吹浦(一一、三五——一二、二〇)——大平小舍(七、一〇)——(三、三〇)——駒止(五、二〇)——徳澤(五、〇〇)

平地には殘雪を認めざるも次第に積雪は增し、大平小舍では約三米。小舍は酒田營林署所有、同スキークラブ管理のものであるが、必ず前以てスキークラブに諒解を得て置く必要がある。寢具、天幕等の荷が遲れたので、小舍の藁蒲團にもぐる。明日への期待は寒さを忘れさせて、深き眠りに入らしめた。

三、一四　快晴　小舍(七、四〇)——御濱神社手前の尾根(九、四〇)——千蛇谷下り口スキーデポ(一一、一〇)——新山頂上(一二、四〇——一二、四五)——スキーデポ(一、五〇——二、四五)——大平小舍(四、〇〇)——畠中小舍(五四五)

春陽に映える新山を目がけて、只管登行。去年二回來て空し

く追返されたことなど想ひ起しつゝ、地圖の大平登山口の夏道が谷へ降る少し上の所をスキーデポとする。大きな雪庇が出るといふ此處も、何の事なく降り、あとは巨大な雪塊に化した新山に歩一歩近づく許りである。頂上からの眺めは一寸内地とは思へぬ位の異様さで、殊に七高山などは、全山悉く大雪塊でありその壁は氷をなして、銀色に輝いてゐる。千蛇谷は非常に廣く何處か劒澤の春を思はせる。スキーデポよりの滑降はまた素晴しく大平から更に降つて、殘りの荷物を取りに行く。

三、一五　晴後雪　小舍（九、三〇）——大平小舍（一一、三〇）

畠中小舍は、駒止の小舍に近い澤の畔にある。人夫不足の爲我々の寢具其の他を運んでくれた畠中善哉氏に深く感謝しつゝ再び小舍に歸る。

三、一六　快晴　天幕地へ荷上げ

天幕地をこの山で擇ぶには、何よりも卓越西風に注意せねばならぬ。次は南風が顧慮さるべきであるが、一般に雪崩の危險は少いと云つて差支あるまい。但し、千蛇谷はこれに考慮を拂ふべきこと勿論である。我々の定めた天幕地は、御濱神社の手前から鳥の海を廻つて行く夏道のある小尾根上の斜面である。斯の様な巻き道が出來ることからも、如何に西風が激烈なるかゞ察せられるのであるが、それがこゝでは殆ど完全に防禦され、南風も、鍋森のピークや笙ケ岳によつて、弱められるのである。

三、一七　曇　南風强し　滯在

岩崎が風邪を引いたので、滯在。

三、一八　曇　南風强し　滯在

三、一九　曇後晴　原一人にて、天幕地より食糧を下ろす、岩崎の風邪甚しく天幕を立てられぬことを察し食糧を持ち返り、小舍で生活することにする。この山では北風では晴れ南風は雨、西風は雪と大體判然してゐる様に考へられる。

三、二〇　快晴　小舍（八、一五）——御濱神社（一〇、二〇）——行者岳（一、三〇——一、四五）——小舍（四、〇〇）

鳥の海の所でスキーをデポし、行者岳アイゼンで往復して居た。外輪山は威容を整へて壁を春陽にさらして居る。外輪山はスキーを使用し得る時も多いが、行者岳迄は少しく無理と思はれる。歸途天幕其の他を撤收した。

三、二一　快晴　南風吹き天候惡化の徴があつたので滯在したが、片雲慌しく翔つたのみで意外にも晴天を見た。しかし次第に南風は激しくなり、夜は猛烈をはめた。尙ほ此の邊では、南風を「ダシ」、東風を「ナガシ」と云つてゐる。

三、二二　曇　滯在

三、二三　曇　大平小舍（九、五〇）——浦驛（一、五〇）

荷物多き爲時間は普通の倍以上を要した。

今度の山行には地元のスキークラブの方々に甚だ御厄介に爲つた。特に畠中善哉氏には、我々の荷物や小舍の手續等に關し、渡部喜助氏には小舍の設備等につき、並々ならぬ御配慮に預つた。こゝに厚く感謝の意を表する。

唐松岳、五龍岳

高橋廣三郎、木島利夫、山田亮三

三、一四　曇　四谷(一一、〇〇)——黒菱小舎(三、〇〇)
八ケ岳合宿の殘りの食糧を詰込んだルツクザツクが馬鹿に重く小舎迄の登りに大汗をかく。
三、一五　晴ガス多し　滯在。
八方山まで往復する。小舎の前の斜面で散々滑つて轉び、もう轉ぶのは厭だと云ふので明日は上に登る事にする。
三、一六　快晴　小舎(八、四〇)——八方山——スキー・デポ(八、〇〇——八、二〇)——肩(二、〇〇)——唐松岳——唐松小舎(一、三〇)——一二、三〇)
素晴らしい好晴に寫眞を撮りつゝのんびり登る。國境線に出ても風は殆ど無い。劔・立山方面の眺望が素晴らしかつた。小舎は皆で五人、靜かな一夜を送る。
尙、日數に餘裕のない高橋は唐松登頂後直に下山す。
三、一七　快晴　強風し　小舎(七、〇〇)——五龍岳(九、四〇——一〇、三〇)——小舎(一、〇〇——一、三〇)——黒菱小舎(四、〇〇)
快晴に張切つて小舎を出ると、強風に雪煙が上り、景觀は俄然素敵である。大しして惡場もなくあつさり登れてしまふ。歸途唐松小舎迄の登りにはうんざりした。
三、一八　快晴　小舎——四谷
山を下るのが惜しい様な快晴だが、先立つものが無くなつては仕方がない。涙を呑んで下山と云ふ事にする。

野澤スキー行

鷲崎雄四郎

三、一六——二二
廿日と廿一日　中川、增山兩先輩と一緒に滑る。

冷澤入り爺岳

大塚　武、山田亮三

四、六　快晴　大町(七、三〇)——西股スキー小舎(三、二〇)
四、七　曇　偵察並スキー練習
四、八　雨　滯在。
四、九　快晴烈風　小舎(五、四〇)——一九七一米尾根に出る(八、〇〇——八、二〇)——肩(二、〇〇)——爺岳　北峰(三、〇〇)——長ザク——小舎(五、四〇)
陸測五萬分一西澤の澤の字邊りから尾根にとりつく。唯ラツセルのみ。長ザク正面の壁に續く邊りは傾斜が強くなり、ザイルを結んで二時間程かなり苦しい切開作業を營む。廿一日中晴れてはゐたが雲霧がからみ、風もつよくこの日はかなり疲れた。
四、一〇　快晴無風　昨日の疲勞で殘念乍ら今日は休養。
長ザク、笹喰邊りのスキー練習、鎌尾根、東尾根等の偵察に來る可き日の一石を置く。
四、一一　雪　深々と降る雪の中を下山、山田足の輕い捻挫に苦しむ。

——昭和十二年度記錄了——

昭和十三年度（一九三八・四――一九三九・三）

金峰山、信州峠

四、二八　晴　甲府――金山――松平峠――牧場小屋　高橋廣三郎、木島利夫、宮城恭一、山田亮三、久保孝一郎、樫淵明

四、二九　晴　牧場小屋――富士見平――大日小屋――金峰山　大日小屋――牧場小屋

四、三〇　晴　牧場小屋――黒森――信州峠――横尾山――野邊山驛

金峰の頂上では眺望絶佳。最も印象に残る。

信州峠より野邊山まで雪が相當あつて、風が強く寒さに慄えた。

乾徳山

（新入部員歓迎登山）　望月達夫（先輩）、佐々木誠、原鐵三郎、岩崎利一、大塚武、里見治男、宮城恭一、高橋廣三郎、木島利夫、山田亮三、久保孝一郎、（以下新入部員）深谷光茂、樫淵明、二ツ谷富雄

五、一　快晴

乾徳山行は延引を重ねたので、新しい人が意外に少なく残念だつた。乾徳山はその山容豪宕にして（この凄じい文句は山麓の案内書にあつたが、讀み方については諸説紛々であつて）頂上附近には小さいが面白い岩場があり岩の質もよい。

鹿島槍東尾根及天狗尾根

大塚武、里見治男、木島利夫、山田亮三

五、一二　晴後雷雨、築場より黒澤越え、冷澤入り

五、一三　快晴　小舍（六、三〇）――二ノ澤下（七、〇〇）――東尾根稜上（八、五〇――九、〇〇）――第一岩峰直下にて晝飯（一一、三〇――一二、〇〇）――兩岩峰共三ノ澤上部を捲き第二岩峰冷澤側肩（一、一〇）――一、三〇）――北鎗（二、二〇――三、〇〇）――キレット小屋（五、四〇）

二ノ澤上部はステップを切る。一ノ澤ノ頭微西の稜上に出る。

"各自三貫内外の荷と岩峰の冷澤側の見かけの汚いのとで兩岩峰とも捲く。案外惡いのはキレットである。

北槍側は雪が落ち、ギヤップまでは容易なるも小舍側は雪庇的なブロックがカクネ向に乘出し針金はかくれ通過に苦しむ。結局ギヤップ正面稍右手の岩を直登、アンザイレン、荷物は釣上げ、約一時間を要す。

五、一四　快晴　小舍（七、二〇）――カクネ里最底部（七、五〇）――天狗ノ鼻（九、一五――九、四五）――小舍岩（一一

〇〇——一一、四〇)——北槍(一、二〇——一、四五)——小舎(三、三〇)

小舎の一つ北の鞍部よりカクネへ。この日、日射強烈一同雪盲に犯され、群盲天狗尾根を登る觀を呈す。

五、一五　晴　小舎(八、〇〇)——北俣——築場(三、一五)

北俣は寝乍ら下る。溫度高く雪くさり輕い表層雪崩をおこす。快晴に惠まれた四日間の幸な山行、鹿島川の渡渉、キレツトの通過注意す可し。キレツト小舎感じ良し。

大菩薩峠

深谷光茂、樫淵明

五、一五　晴　鹽山——番屋——長兵衛小屋——大菩薩峠——石丸峠——黒岳——初鹿野

絶好の天氣に惠まれ、大菩薩峠の頂上からの眺望は上々だつた。

白峰三山

佐々木誠、岩崎利一

五、二六　晴　有野(八、四〇)——夜叉神峠(三、二〇——四、〇〇)——鮎差(六、二五)

甲府の驛前からバスが出ないのが原因で有野着が大分おくれる。鮎差の途中の棧道は破損甚しく重荷の場合は注意を要する。

五、二七　晴　鮎差(五、四五)——蝮平(七、〇〇)——釣尾根池(一一、一五——〇、〇〇)——二九五〇米峰にてビバーク(六、〇〇)

亡魂澤の頭の下では膝までもぐる腐雪に苦しむ。縦走の關係上、又天候と附近の景觀と先年のバットレス登攀の由緒ある根據地である事等思ひ併せて、一夜を偃松の中に過す事とする。

五、二八　出發(五、四五)——北岳(七、〇五)——間の岳を經て農鳥岳(二、四〇——三、〇五)——大門澤小舎(六、五〇)

稜線の雪は殆んど消え、農鳥小舎も完全に出てゐる。大門澤は廣河内岳寄りから眞直ぐ下る。雪渓は農鳥岳から來る澤の出合まで續いてゐた。

五、二九　曇　小舎(一〇、一五)——西山溫泉(二、三五)

五、三〇　曇　溫泉より新倉を經て馬トロにて下山。

奥又白行

佐々木誠、原鐵三郎

六、一七　曇後雨　島々(九、三〇)——德本峠——德澤(六、一〇)

連日の豪雨で梓川沿ひは各處崩壊バスは不通。

六、一八　晴後曇　梓川は大增水で徒渉など思ひもよらぬので奥又白へは上高地迂回に決し岳川まで様子を見に行く。後器具の整理。

六、一九　晴　小舎(八、三〇)——上高地、養魚場經由奥又白ルンゼ下(四、〇〇)同所にてビバーク

舊冬雪崩の際の遺失品を探索し、明日前穂高登頂の豫定にて

出發、梓川は非常な増水で、河童橋から上の橋は全て流失してゐた。早速探索の結果ピツケル、輪カン其他の無氣味に雪上に散在せるを發見す。

六、二〇　雨　ビバーク地（五、〇〇）――往路通り德澤へ（四、〇〇）

目を覺ますとやがて雨が降り出し、少し經つと篠つく雨となつたので前穗高は斷念す。

六、二一　小雨　原、峠越え下山

六、二二　晴　舊冬、中の湯に殘して置いた荷物等整理して漸く開通したバスで歸る。

（後記）　此行は冬以來上高地各所に散在してゐた器具等の整理、及び奥又白遺失物探索の目的ではあつたが、惡天にたゝられて遂に一つも頂を踏まず晴れ渡つた初夏の山々を見乍ら下山せねばならなかつた。（佐々木）

燕槍縱走

（一般班）　佐々木誠、鷲崎雄四郎、里見治男（以上部員）、石川、赤熊、林、芝崎、筑紫、倉垣、湯原、松原、上山、村田（以上一般參加）

七、一三　晴後夕立　有明――中房――燕山莊泊

七、一四　霧時々小雨　燕山莊――燕往復――大天井岳――西岳小舍――殺生小舍泊

七、一五　雨後止む　殺生小舍――槍ケ岳往復――德澤小舍着

後解散

涸澤合宿

佐々木誠、鷲崎雄四郎、原鐵三郎、岩崎利一
大塚武、里見治男、宮城恭一、山田亮三、久保孝一郎、小泉三郎、樫淵明
（岩崎、山田、久保）

A、先發隊　十日入山、十二日涸澤に入り、中央の島に天幕建設、十三、十四、十五の三日間天候惡く滯在

種々の故障で先發隊は人數減じ、荷上げに苦しむ。幕營地は一昨年の所に定めたが今年は雪崩の關係で具合惡く、岩のゴロ〳〵した所を均して張つたが、この三日間の居心地は極めて良くなかつた。雨の止み間に北尾根Ⅴ-Ⅵのコルに遊んだ位で本隊の來るのを待つ。

B、本隊（原、大塚、宮城、小泉、樫淵）　十三日入山、十四日橫尾岩小舍泊り、十五日入幕

先發隊の取つてをいた最良地へ殘雪をどけて天幕建設

C、一般班より（佐々木、鷲崎、里見）　十五日槍より德澤へ來り同日一般班を解散し、十六日入幕

尙十六日は大塚、宮城は忘れ物をとりに德澤往復他の者は久振の快晴に奥穗高へ。同日先發隊の天幕を本隊の隣のより良き場所に移す。

天幕は七人用ウインパー二張、食糧置場として小天幕一張とする。長い間愚圖ついてゐた天候も漸く好轉し、全員揃つて、

愈々明日から合宿第一日を迎へる事となる。
之迄の先發隊の勞を多とする。

第一日(十七日)　晴
○北尾根（里見、山田）Ⅴ、Ⅵのコルより。
○北尾根（大塚、宮城）Ⅳ峰側稜より
○ジヤンダルム（鷲崎、岩崎、久保、小泉）
○本谷より北穗（佐々木、原、樫淵）北穗高に最も近いコルに出る。

第二日(十八日)　快晴
○北尾根（佐々木、久保、樫淵）奥穗の祠で休んでゐると霧の中から大塚のパーテイーが上つて來た。共に歡幕。
○北穗高側稜（岩崎、原、小泉）
○奥穗高直下、ジヤンダルム（大塚、宮城、山田）
一寸した岩塊があるので飛驒尾根は割愛する。直下で思つたより時間がかゝつた
○涸澤槍側稜（鷲崎、里見）

第三日(十九日)　快晴　全員休養とする。今度の合宿ではスケツチが流行つた。似てゐても似てゐなくてもそれが種となつて笑を捲起す。休養も矢張り快晴の日は一層よい。

第四日(廿日)　快晴
○瀧谷第二尾根、北山稜（佐々木、大塚、里見）
北穗南北峰コル（九、〇〇）——第二尾根を下りP3下（一一、一五）——トラバース——北山稜にとりつく（〇、二〇）——一、〇〇）——北穗頂上（三、一五）
第二尾根は割合に平凡なので早目に北山稜へ取付く。北山稜上部は傾斜急で一二箇所面白い所がある。岩が堅く如何にもスツキリした登攀を享しむ。
○北尾根（原、小泉）寫眞を撮りつゝ、のんびり登る。
○奥又白池より前穗高（岩崎、樫淵）Ⅴ Ⅵ峰のコルから池迄三時間を要す。池に殘置した支柱等を持つてくる。
○北穗高側稜（鷲崎、久保）（宮城、山田）、後のパーテイーは側稜のコルの手前にある北穗高澤向の壁を登る。

第五日(廿一日)　晴　今日を以て合宿解散とする。
相變らず夏日の烈しい涸澤の圏谷を、再び重荷を肩に次の登行を目指して或ひは上に或ひは下に分れて行く。
殘つて涸澤生活をする佐々木、大塚、山田は草履をつゝかけて溫い岩に腰を下し、離れて行く友の姿を追ふ。

（附記）かゝる形式の合宿をそのまゝ踏襲する事、及び合宿地を再び涸澤にする事については全く異論がなかつた。それは之以上の方法が考へられないからではなく、指導的地位にあつた三人の部員の負傷による不參加の穴を如何にして埋めるかゞ我々の頭を占めて、之以上積極的に乘出す餘裕を奪つてしまつたからであらう。指導と云ふ合宿の重要な要素から見れば、確に弱力であつたこの合宿も事實は稀有の好天に惠まれて、先づ〳〵豫定した丈の事は無難にやり了せたと云へる。然し之丈の

好條件に惠まれたこの合宿から、内的には兎角、外的には、も少し多くの收獲が得られてもよかつたのではなからうか。指導と云ふ事は、指導される者の側の、自らの處女地を開拓しようとする衝動の旺盛さのみがその目的を達するものであらう。

涸澤生活

佐々木誠、大塚武、山田亮三

七、二二　快晴　瀧谷D澤を下りB澤を上る。
天幕(六、〇〇)——B・D出合(一〇、三〇)——四〇)——B澤を經て北穗高(四、〇〇)——一五)——天幕(五、〇〇)
第三尾根を目指して出發したが、餘りにも張切過ぎてCルンゼと間違へてBルンゼを遮二無二登り、氣がついた時には既に瀧谷の核心から遠ざかつてゐた。Bルンゼは實に恐ろしい所で三時間許りの間落石に戰々競々たる登高を續ける。
七、二三　快晴　涸澤槍側稜
今日は休養にする積りであつたがあまりの快晴に午後から出かける。向つて右側を登る。
七、二四　快晴　瀧谷第三尾根
天幕(五、四五)——B・D出合(九、三〇——九、四五)——第三尾根取付(一二、〇〇)——T4(一、〇〇——一、三〇)——T3(二、四五——三、〇〇)——縱走路(四、〇〇——四、三〇)——天幕(六、〇〇)
Cルンゼも今日は間違はなかつた。それでも瀧迄は半信半疑であつた。取付も仲々迷ふ所だ。P2の前後はスツキリしてゐる。T3から上は問題はない。
七、二五　曇後晴　涸澤天幕撤收、穗澤へ。
毎日々々の登攀に肉體的にも亦氣分的にも漸く疲勞の色が濃くなつた、指先の指紋は岩にすれて消えてしまつた。「岩で手を磨く」とはこの事だらう。一週間前は夜等避暑地の様に火がなければ寢られなかつたのに、今日は暑くて暑くて堪らんで見えた雪田の向ふ側の天幕も最早數少くなつた。「我々も下りよう」そんな氣持が三人の胸に切實に起つて來た。が愈々撤收となると仲々面倒、荷物はとても三人では下し切れず、各自十貫以上背負つたが尙十八貫の荷を殘す。フラつく足で横尾の岩小舍迄來たが餘りの過重に一部を殘して德澤へ下る。この荷は翌日Oが取りに戻り涸澤の荷物は人夫の手で下した。

白出澤より槍見

原鐵三郎、久保孝一郎、樫淵明

七、二二　快晴　天幕(一、〇〇)——穗高小舍(四、〇〇——四、四五)——白出澤出合(八、一〇——八、三〇)——槍見溫泉(一二、一五)
出發がごた〳〵して遲れた。天氣が良かつたので夜半に槍見に着いた。水害の爲路はかなり荒れてゐたので愼重を期してザイルを使つた處もある。陰慘な感じを受ける處が飛騨側の特色だが印象深い。溫泉は仲々よい。
七、二三　快晴　槍見(一二、四五)——中尾部落(一、三〇——二、〇〇)——中尾根(五、二〇——五、四〇)——上高地(七、〇〇)

前夜の疲れで出發が午後になつた。燒けつく様に暑い日射しを受けてプンとにほふ硫黄の臭氣を嗅ぎながら峠を越した。

大瀧山、常念岳

里見治男、宮城恭一

七、二二　快晴　上高地——徳澤——大瀧小屋

七、二三　晴後曇　大瀧小屋(六、〇〇)——蝶ケ岳——常念岳(一一、〇〇)——常念小屋——一ノ澤小屋(二、〇〇)——烏川橋——松本

合宿で登つた穂高を眺め其の偉容に接する積りで行つたが、次の日は曇つて來て槍は終に見ることが出來なかつた。蝶ケ岳で雷鳥が五六羽の雛を連れて縱走路をおほらかに遊んでゐたのを思ひ出す。

疊岩よりジヤンダルム

大塚武、山田亮三

七、二七　晴時々曇　佐々木、大塚、山田、徳澤より上高地へ

小梨平に幕營

七、二八　晴後曇　大塚、山田疊岩へ

天幕(六、一〇)——疊岩取付(九、〇〇——九、三〇)——疊岩尾根上の蟹鋏狀の岩(〇、〇〇——〇、二〇)——ジヤンへ往復して歸幕(五、三〇)

疊岩は下部の尖塔の右手の溝から取付右上りに下から見て蟹鋏狀の岩を目指して登る。途中一箇所確保を要する部分約二ピツチ程あるも、地下足袋を用ひたので全體として手を使はずに立つて歩いてしまつた。疊岩尾根からコブ尾根、奥穂高南稜へかけての數本のルンゼは何れもかなり深くえぐれてゐる。

七、二九　晴　佐々木は槍へ、大塚、山田はバスにて下山。

槍ケ岳、常念岳

佐々木誠　外二名

七、二九　晴　夜に入りて夕立　上高地——槍肩小舍

七、三〇　晴後雨　肩——槍往復——大天井岳——常念小舍

二名は大天井から燕へ向ふ。その頃より烈しき雷雨到る。

七、三一　雨　常念小舍——一ノ澤——柏矢町

霧の常念を往復、小舍を出ると雨となり柏矢町まで地下足袋で飛ばす。

丹澤行

山田亮三　他四名

八、一二　晴　澁澤——ヤドリギ澤——雨山峠——ユウシン休泊所

八、一三　曇　休泊所——熊木澤——蛭ケ岳——原小舍澤小舍

八、一四　晴後雨　滯在

八、一五　雨後晴　小舍——姫次——焼山——鳥屋——歸京

シレイ澤岩小舍生活　大塚武、宮城恭一、木島利夫、山田亮三

八、三一　終日雨　大曾利(八、〇〇)——五葉尾根小舍(四、二五)

五葉尾根道へ分れてからズツと強雨、腹の中まで濡れる。雨のもる小舎で燻ぶる焚火を圍んで不愉快な一日。

九、一　小雨濃霧　十丁程先の伐採小舎へ泊る。

今日はシレイ澤まででと思つて出掛けたが濃霧で小舎の先の伐採道を迷ひ引返す。小舎の先の伐採小舎へ泊る。

九、二　豪雨　小舎（六、四五）――野呂川に出る（九、三〇）――シレイ澤岩小舎（〇、二〇）

――一一、三〇――

今日も亦臍まで濡れる。岩小舎はよい具合に見付かつたが仲々わかり悪い所だ。然し中には乾いた木が豐富にあつて助かる。

九、三　曇　滯在

連日の雨で野呂川の徒渉は種々試みたがとても不可能、午後赤抜澤を暫らく遡つて見る。後雨の止み間に岩小舎を造つてゐる大岩にかじりついて遊ぶ。

九、四　曇後雨　赤抜澤試登

微かな望みをいだいて川へ出て見たが水は全く減つてゐない。北岳バットレスは遂に斷念して今日は赤抜澤から鳳凰へ登る。赤抜澤は美事な岩を持つた瀧の連續、その數は一寸數へ切れない。かなり登つた所から右側のガレをつめたのであるが最後に落葉松の若木の密林に入り登頂を斷念する（〇、三〇）、歸りは又雨に降られる。夜は月が出て明日は好轉かと一脈の望を懷く。

九、五　暴風雨

天候は全然恢復の望みないので計畫は全く放棄、大塚、山田はこの雨ではともう一日樣子を見る事にして、十時頃木島、宮城暴風雨の中を五葉尾根へ。二人が去つた後、時計を持つてゐない殘留組は晝寢をして何時間か過したが不圖見ると岩小舎横の小流はどう〳〵たる濁流となつて我々のシュラーフの下一尺位に迄迫つてゐる。顏を見合せて暫らく茫然、漸て五葉尾根に避難する外はないと決して、食料等重いものを一切置いて篠つく雨の中を出發、かなり悲壯な氣持、對岸の斜面を背景に雨の足が白々と物凄いばかり。左岸のおひは全く濁流に呑まれて上部を途中一箇所アンザイレンして通過、この邊の本流の增水は、どう〳〵と波を打つて驚くばかり、遂にノンストツプで伐採小屋に着き先着のK、Mと合する（五、三〇）。この夜は猿又までぬいで乾かし、翌日になつて他人のと變つてゐるのを見て苦笑。

九、六　曇霧　大曾利を經て下山。

最後の一日迄駄目だつた。

（附記）　昨年一昨年共にあてゝゐるので「今度も」と二百十日と廿日の間を北岳バットレス登攀に向つた。然し今度は徹底的にやられた。山から下りた時は衣類は一切いぶされて山乞食の典型然、東京も暴風雨だつた爲に周圍の人々にも心配をかけた。尙芦安の人の話によれば岩小屋は浸水する事があるさうである。

奥又白生活

大塚　武

九、二〇　小雨　上高地より徳澤入り
是から紅葉が始らうとする頃の徳澤の邊りはとても美しい。
九、二一　晴　小舍(八、〇〇)——奥又白池(一、〇〇)
池の畔に小天幕を張る。池の上手のゆるやかな黄色い山肌に點々となゝかまどが紅に映えて、その向ふの又白尾根の岩峰から北尾根へかけての紫黒の岩壁との對照が非常に美しい。秋も十月になると池のほとりは落莫の觀が深い。美しいと云ふ點から云へば初秋の今頃が一等ではなからうか。
九、二二　快晴　三峰奥又白側リッジ登攀　天幕(七、〇〇)——インゼルを經て取付(一〇、四〇)——Ⅲ峰(一、三〇)——前穂頂上を經て歸幕(三、三〇)
單獨岩登りは始めて味はつたが調子は良くない。岩を登つてザイルを引ずり乍ら頂に立つて喜び合ふ氣持、岩登り丈は矢張複數がよい樣だ。とまれ、三峰リッジは「急な、岩を積み重ねた樣な」所で快適な登攀は望めない。
九、二三——二四　雨濕霧　滯在
この二日間池には水蒸氣が立ち込め、黄色い山肌には霧が煙つて北尾根が時折霧の中にボーと黒く見える。夜は何か四足獸が池の水を飲みにくる樣な氣配がして無氣味、しきりに「馬鹿野郎」を連呼する。
九、二五　曇後晴、天幕撤收、徳本越え下山。
Ⅲ峰の外にⅠ峰の向つて左側の部分、又はⅤ峰を登る積りであつたが悪天に崇られて乏丈で引退る。然し、この三日間の穗高は見える限りでは全く自分一人の穗高であつた。

谷川岳マチガ澤

山田亮三、小泉三郎、樫淵明

九、二二　雨後晴　土合——一ノ倉澤天幕地
出合から一寸奥に天幕建設、午後から晴れたので上方の偵察に行く。正面岩壁は俄然壓倒的である。
九、二三　雨　天幕地——土合山ノ家
第四ルンゼを登るつもりだつたが、朝起きて見ると雨がジャージャー降つてゐる。すつかりくさり、おまけに天幕がもり出したので、あつさり山の家に引上げてしまふ。尙小泉腹を悪くし本日歸京。
九、二四　小雨　土合(七、〇〇)——マチガ澤を登る——谷川岳(一二、〇〇)——西黒澤——土合(三、二〇)——歸京
相變らず天氣が悪い。だがマチガ澤は案外面白い。頂上は白一色。不味いパンを食つて早々に引上げる。

明神東稜より奥又白へ

佐々木誠、大塚武

一〇、一四　雨　森川、佐々木、大塚上高地着、小梨平に幕營
一〇、一五　雨　滯在　佐々木、大塚徳澤へ荷上げ。
一〇、一六　曇　上高地からの計畫を斷念、徳澤へ移る。
一〇、一七　晴　小舍(六、〇〇)——養魚場(七、〇〇)——下宮川を登り白ザクを經て瓢箪池(九、三〇——一〇、〇〇)——東稜コル(〇、一〇——〇、三五)——明神岳(二、二

五——四五)——前穂高への稜線を辿り奥又白への分岐點
(三、三〇)——(四五)——徳澤小舍(七、三〇)
瓢箪池はせまいが感じは良い。明神のⅡ峰から最南峰へかけての東面には面白さうな所が散見する。但し規模は小さい。東稜はつまらない所、歸りは暗くなつて梓川の徒歩で一苦勞する。今日は全然新雪を踏まなかつた。

佐々木誠、大塚武、山田亮三
山田入山、明神東稜を終れるS、Oと徳澤にて合流

奥又白生活

一〇、一七　快晴　小舍(一〇、三〇)——又白池(四、一〇)
一〇、一八　快晴　北尾根Ⅴ峰奥又白側登攀、オーダー、O、S、Y、所要七時間
一〇、一九　快晴
Ⅴ峰下の顯著な岩窟の右手より取付く。上部のスッキリした岩稜に至る迄の草付にかなり時間を喰ふ。この間終始Ⅳ峰の景觀絶佳なるも、思はぬ所で時間許り取るので不愉快であつた。上部の岩場については本文を參照されたし。歸りは暗くなつてⅤⅥのコルより飛ぶ樣にして歸幕。
一〇、二〇　曇夜に入りて雪、休養
一〇、二一　暴風雪後雨　天幕撤收徳澤へ。
夜明けからの暴風雪に丈の高い純冬期用天幕は散々にあふられ、人間を入れたまゝ動き出し相な荒れ方で、張り綱は切れラジウスは點火せず、止むなく下山と決す。
(附記)　この行は春殘した前穂高東壁最後の壁をも含めて再び來春大塚、山田を以て完登す可く、その下準備として試みられたものであつた。然し十九日には東稜以來動き續けの佐々木大塚の疲勞と時日にも餘裕があつたのとで輕いトレーニングの積りでⅤ峰に出掛けた。然し結果から見ると之はあまり輕いトレーニングでもなく、豫定してゐた休養を超過してしまつた。廿日は登れば登れない程ではなかつたが昨秋の好天が頭に殘つてつひ天候に甘え過ぎた。廿一日の荒れは凋澤では天幕がつぶれた程で擊退も亦殘念乍ら止むを得なかつた。

一〇、二二　雨　森川と共に全部下山。

徳澤小舍生活

森川眞三郎

一〇、一七　快晴　徳澤(六、五〇)——大瀧小舍(一一、一〇)
——(二、〇〇)——徳澤(五、〇〇)
この日、S、Oは明神東稜へ、Y上高地より來る。
薄い霧を通して輝く秋晴の光線がきら〳〵と身近に感じられる樣な朝、登る程に空は晴れて高い唐松の梢一面に霧氷がかゝつてゐる。秋と云ふに既に冬枯の山道を獨り歩く。頂上の午睡は樂しかつた。淺間の噴煙がゆつたりと雲の樣に浮んで、八ツや南や中央の山々が蒼々と澄んで見える。久し振りの登行で疲れたが傷めた右足は案外丈夫で、登りには殆んど不自由は無かつた。
一〇、一八　徳澤滯在

奥又白へ登る三人を見送つて出合迄行く、梓川は水量が多く徒歩が辛らさうだつた。何回か繰返した此の徒歩も、今は出來なくなつて了つた。向ふ岸へ渡つた三人は、何か大聲で云つて居たが判らなかつた。それもやがて落葉松の間に見えなくなつて了つた。黒々とした奥又白の奥壁が、見上げる様な所に聳えて居る。あの一番眞中の、一番險しい所を目指して過して來た此の永い年月の事が何かよその事の様に思へる。幾人かの人が命を落し、又更に多くの人々が致命的傷手を與へられた。併し此の清澄な尊嚴な山の姿は大自然のまゝに何事もなかつた様に靜まり返つて居る。

一〇、一九　快晴　小舍滯在

秋晴れの德澤でのんびり一日過す。何時か考へて居た様な夢。明神池へ散歩に行つたが、穗高神社の神主はなか〳〵話せる奴である。

一〇、二〇　曇　小舍(七、三〇)——横尾出合(九、〇〇)——池ノ平(〇、三〇)

時々日がさしたが、暗い天氣、守、末雄等が、仕事に來て居たので、その天幕に泊る事にする。愉快な晩だつた。併し、天罰は立どころに來て其の夜中から雪となり、天幕が潰れると云ふ騒ぎ。

一〇、二一　曇　小雨

池ノ平(九、〇〇)——德澤小舍(〇、三〇)

雪が降つたので奥穗行はあつさり斷念、がら〳〵の岩の間をびつこひき〳〵降る。霧で何も見えなかつた。新雪が見る〳〵ぐす〳〵に融けて、味氣ない景色だつた。小舍では風呂を立てゝくれた。

一〇、二二佐々木、大塚、山田と共に下山。

御座山　增山清太郎、望月達夫(以上先輩)、岩崎利一

一〇、一六　小雨　信濃川上(九、三〇)——小川口——大門峠三川——栗生峠——上栗生(四、三〇)

一〇、一七　晴　上栗生(八、〇〇)——唐澤を登る——御岳山(二、〇四〇米峰)——御座山——金山澤を降る——山口(四、〇〇)——小海

前夜から氣溫は急激に降り、御座山一帶は美しい霧氷に飾られて、その壯觀は身の秋山に在るを忘れさせた。遠く燻し銀色に輝いてゐる北の山々を眺めつゝ御座山頂に憩うてゐた吾々は秋の日の暮れ易いのに今更乍ら驚いた。

將監峠より雲取山　高橋廣三郎、里見治男

一〇、二七　晴　鹽山——バス——番屋(四、三〇)——休眠(七、〇〇)——一〇、〇〇)——柳澤峠——落合(一二、〇五)——高橋——犬切峠(一、四〇)——三ノ瀨(二、三〇)

試驗後秋色濃き秩父に入る。素晴らしい快晴に惠まれたが、夜行の疲れで途中で寢たりして、のんびりゆく。此の邊は流石東京市の水源だけあつて、水の豐な所だ。未だ早かつたが三ノ

瀬の民家に泊る。

一〇、二八　晴　三ノ瀬（七、四〇）――将監峠（九、三〇）――大弛――秃岩――飛龍權現（一二、二〇――一、〇〇）――雲取小屋（三、〇〇）――武州雲取小屋（四、二〇）

將監峠は氣持のいゝ峠だ。又來たいと思ふ。夕方より雨。

一〇、二九　雨後曇　武州雲取小屋（七、三〇）――鷹巢山（一〇、〇〇）――六ツ石山（一二、一〇）――絹笠――氷川（三一〇）

雨のため雲取山は遂に頂をふまず。終日霧の中の單調な旅をする。

釜無川、鋸岳、大武川

山田亮三

一一、二　快晴　富士見（六、三〇）――休戸對岸（七、三〇）――小舍石（一〇、三〇）――横岳峠下岩小舍（三、〇〇）

釜無川の伐採軌道は中ノ川出合邊迄伸びてゐる。快晴にのんびり歩くが道の長いのには厭き〳〵する。岩小舍は二三人用、感じは惡くない。

一一、三　曇　濃霧　小舍（七、四五）――横岳峠（八、四五）――角兵衞ノ頭（一一、〇〇――一一、三〇）――第一高點（一二、三〇）――第二高點（三、〇〇）――甲斐駒六合小舍（五、〇〇）

白蛇の如き戸臺川を前景に横岳峠からの北岳は實に良い。角兵衞の頭に登りつく頃霧が湧き出し、あたり一面を白一色に塗りつぶす。鹿の窓直下のルンゼで一寸した不注意からルツクザックを大ギャップ澤遙か下に落してしまひ、取りに行くのにえらい苦勞をした。こんな處でのザックの取扱ひは十分氣をつけねばならぬ。

一一、四　快晴　小舍（七、四五）――六方石（一〇、四五――一二、〇〇）――仙水峠（一、〇〇――二、〇〇）――赤石澤出合下岩小舍（四、〇〇）

小舍から六方石への巻道は積雪意外に多く、去年の三倍もの時間がかゝつた。豫定では早川尾根へ行くつもりだつたが、氣まゝな一人旅のこと、大武川下りに變更し悠々と山稜の懶惰を貪る。大武川では道を間違へ、サデの岩小舍も見つからず、赤石澤出合迄惡戰苦闘す。出會から一寸下に恰好の岩室を見つけ泊り込む。

一一、五　快晴　岩小舍（八、〇〇）――日野春（一一、三〇）――赤薙橋（一〇、〇〇）――藪ノ湯前（一一、四五）

日野春までテクつてバス代をかせぐ。快晴に山麓からの山々は實に良い。手頃な草原に腰を下し、煙草の煙をあげながら樂しかつた山の事を思ひ返してみた。

三峰縱走

日江井正巳、他一名

一一、五　晴　三峰――武州雲取小舍

長い禁足生活を解かれて始めての山行。谷々は紅葉で見事であつた。夜山頂で月見をやる。

一一、六　晴　小舍――雲取山――七ツ石――歸京

萱戸の尾根を一目散。六ツ石でのびて煙霧にかすむ關東平野を見下した時、病院で、或ひは家で考へてゐた事がまるで嘘の様な感じがしてならなかつた。

山行をほとんどあきらめてゐた自分が二度かうして行かれるのも一に兩親のお蔭だと身の緊るのを覺えた。この一年ほとんど無爲に過してしまつた。つく〳〵學生生活の短かさを嘆くと同時に殘る二年を一部のために大いにやつて行きたいと思つた。それについても六ヶ月の病床生活は良き試練であつた。この貴重な體驗を今後も大いに生かして行きたい。しかし傷つけたものの悲哀は覆ふべくもない。冬となり夏となり山友が合宿に精出す頃を考へると憂鬱になるが再び山に行ける様になつた喜びで抹殺したい。

乾　徳　山　常盤教授、同御令息、榎本直司、岩崎利一、船本文治、日江井正己、宮城恭一、小泉三郎他一名

一一、一三　晴

山岳部の懇親を行ふために、この山を選んだ。素晴らしい快晴、頂上の氣持良き眺望あり餘る食物でこの目的は充分果された。

乾　徳　山　森川眞三郎

一一、二〇　晴

先週止むを得ぬ都合で行けなかつたので出かける。ハイキングの御連中がゐなかつたら、後は申分のない山だ。終日富士を見る。

富　士　山　佐々木誠、原鐵三郎、大塚武、山田亮三、小泉三郎、佐藤政雄、森下洋

一一、二六　晴　吉田（九、一〇）――五合桂屋（二、四〇）

夜一一時近く、東京を午後出發した原、山田來る。

一一、二七　快晴強風　五合（五、三〇）――頂上（一一、二五――〇、四五）――五合（二、四〇）――四、二〇）――吉田（七、〇〇）――歸京

全員登頂。クラスト適度。登りは風強く難澁す。新人佐藤、森下の頑張りは洵に賴母しきものがあつた。

原　鐵　三　郎

關溫泉スキー行

一二、一一――一二

初滑り、思ひのまゝに滑つた。

横尾岩小舍生活　佐々木誠、大塚武、山田亮三、（上條末雄）

この行は北穗高の頂近くに幕營して瀧谷を目指したのである が以下記す如く惡天候に禍され、岩小谷生活の止むなきに至つた。

一二、一八　小雪　島々――澤渡――中ノ湯（二、三〇）

一二、一九　晴　中ノ湯――徳澤（五、〇〇）

釜上もデブリは少く産屋澤も崩潰の胴腹を通る。去年とは比較にならぬ位輕い氣分。あまり樂をすると後がこわいぞ等と云ふ。然し惠れた上高地入りだ。この冬はうまく行きさうだ、頻りとそんな氣がする。

一二、二〇　薄曇　徳澤――横尾岩小舎

今日は池の平迄荷上げする積りで出發、河原の雪も極めて少くスキーを持つて歩く。岩小舎は慶應の山岳部で手入をしたさうで入口は圍はれ、中には笹が敷いてあつて極めて居心地が良さゝうなので、こゝを根據として北穗に上る事とし、豫定を變更して徳澤へ戻り再び荷を上げ岩小舎に落着く。尙慶應の人達が來たら直ちに他へ移れる樣に天幕も持參してをいた。

一二、二一　薄晴　北穗高南峰より涸澤側へ派生する尾根の南峰直下へ天幕建設。

二度に分けて上る事とし、今日はザイル、石油等重い物を持つて出發（五、三〇）。氣溫は多少高過ぎるが雪はしまつて荷上げには充分な天候、池の平から暫らく北穗高澤を上り左へ捲いて元の岩小舎の少し上をデポとする。之から輪カンに換へて幕營地に直接食ひ込むルンゼを登り同所着（一、〇〇）。雪は少いので殊に風に對してはあまり安定な感じを與へない。こゝから北穗高の頂は手の届く程近いものだ。幕營地發（二、四〇）。三〇分の後デポに下りボーゲンをかき乍ら圈谷を下る。岩小舎着（五、〇〇）。今日は殆んど動きづめであつたのであまりにも食糧が少かつたので岩小舎に歸つた時は皆フラ〳〵。然し全てが豫定通り進んでゐるので、すつかり氣をよくする。夜に入つて雪となる。

一二、二二　曇小雪　滯在　佐々木、山田は食糧補給に徳澤往復

明日につき種々相談したがまだ日數の方も充分であるし、澤は堅雪の上に新雪が五寸以上あるとの豫測で滯在と定める。

一二、二三　薄晴　池の平往復

今日は動き得る日だつた。涸澤の雪量も案外少く途中二ヶ所程雪の崩落を見たが全體として雪の狀態も惡くはなかつた。池の平でスキー練習を享しむ。北穗高の七峯邊りに足下から素適な雪烟をあげ乍ら動いてゐる人影が逆光に映えて美しい。過勞を怖れて早目に歸る。然し太陽が暈を被つて明日の天氣は期待が持てない。

一二、二四　雪　滯在

朝三時起きてみると外は一變して最惡の狀態、好調な天氣に甘え過ぎてもう一日續くだらうと云ふ私達の蟲の良い望は見事に打のめされた。雪は少しも勢を弱めさうにない。若し昨日天幕に入つてゐたらこの雪を遣つて快心の登攀をやつて見度いものだ。幕營地發（二、四〇）。三〇分の後デポふと一寸殘念。

一二、二五　雪　滯在

一二、二六　雪　滯在

一二、二七　雪　滞在
空しい三日間の滞在は全く長いものに感ぜられた。單調の重壓、然しどうする事も出來ない。德澤へ食糧の補給に行き針金を貫つて來て岩小舍の周圍に罠をかける。その晩は赤々と燃える火を圍んでまだとれない兎をめぐつて各自勝手な熱をあげて單調を凌ぐ。

一二、二八　雪　滞在
一二、二九　雪　滞在
德澤の小舍に毎日の樣に吹雪のうなりを聞いて只管登る日を待つてゐた去年の冬山の事が思ひ出される。然し今年はそれ以上だつた。仕方なしに對岸の林間に渡つて深々と積つた雪をならしてゲレンデを作つて遊ぶ、Oは少しでも緣をつないで置くのだと云つて雪の中まではラツセルに行く。ラツセルは無駄になるかも知れない。然しかうして一日一日が經つにつれて目的が一歩一歩遠ざかつて行く樣な氣がして、私達は何かじつとしてゐられない樣な氣持に驅られてゐた。午後から大阪の人が二人來て同宿。

一二、三〇　曇後晴　池の平往復
今日朝から久振に晴れ間を見せた。池の平へ向ふ所々で重さうに雪を戴いた針葉樹の枝がはね返つては濛々たる雪烟をあげる樣なデブリで一杯になつて前穗奥穗の間から來たと思はれるのは例の島の高みをも乘越してゐる。北穗高澤はまだ出てをらず決して安全な狀態ではなかつたので早々に引上げる。
夜は何時の間にか生長した月が岩小舍を圍む針葉樹林に青い影を投げて、明日は行けるぞと云ふ喜も手傳つて、忍從の數日を岩小舍に送つた我々はこの夢幻的な美しさに歡喜した。

一二、三一　雪　滞在
午前二時に起きて見ると、案に相違した烈しい雪降りで私達は唯呆然とする許りであつた。北尾根に行く爲に夜半に德澤を發つた帝大の人達がこの降りに斷念して岩小舍に寄つて夜明まで火を圍んで話して行つた。
最も順調に行けば今日は計畫の最終日に當つてゐた。食糧も缺乏したし、日數にも制限のある私達は今日上れないとすると もう登攀はおろか、問題は殘念にも天幕の撤收に變つて來た。末雄が五千尺にある自分達の食糧を分けてくれると云ふので兎角下る。大晦日だと云ふのでこの晩の御馳走は蓋し豪華なものであつた。

一、一　晴後曇
再び新しい氣持になつて梓川を登る。雪模樣ではあつたが明日の準備にS、Oラツセル

一、二　雪　滞在
今迄にもない樣な烈しい雪降り、午後になつて風が出る。

一、三　快晴　滞在
あまりにも突然に訪れた黒いばかりの空、こんな日に動けないとは殘念な事だ。愈々明日こそ最後の登行、S、Yは上方ラ

ツセル。

一、四　曇後吹雪　岩小舎(二、五〇)——涸澤槍末端の大岩にデポ(六、〇〇——六、二〇)——天幕地(八、三〇——一〇、〇〇)——岩小舎(二、三〇——三、二〇)——德澤(五、〇〇)

實に何日振りかの出發、眞暗い圈谷の中をグン〳〵登る。六時シーデポに着く。漸く明け始めた空には亂雜な薄曇色の雲海が無氣味に擴がつて崩れの早い事を示してゐる。何としても今日は下らねばならないのでピッチはかなり早い。末雄も張切つて最後のルンゼの深雪に猛ラッセルを續けて遂に天幕を張つた平の上に出る。「或ひは風に……」と懸念された天幕も支柱の尖端を僅に雪面に出して埋れてゐた。この排雪は仲々面倒であつた。殊にすつかり凍つた布地は一寸ピッケルが觸れても破れるのですつかり堀出して四人中に入つた時は全くホッとした。パンを食ひ「取つて置き」の煙草を吸つて再び外に出た時は全くの吹雪、すつかりリュックにつめて北穗の頂も斷念してラッセルの全く消えたルンゼを下る。烈しい吹雪にシーデポを見つけるのに一苦勞、歸りの滑降も目に雪が入つて實に苦しい。時間が早いので更に德澤へ。各自の負荷過大で河原の烈風には全く腦まされた。

一、五　雪　德澤——帝國ホテル

頑張つて今日中に下りやうと暗い中から起きて荷物の整理、ごう〳〵と鳴る吹雪の中を下る。取入口でハイヤーを賴んだが奈川渡迄しか上らないとの事、澤渡迄來る積りであつた私達は一寸落膽、折から降りしきる雪に釜上の危險も慮つてホテルへ引返す。ホテルも正月で豪華版。

一、六　曇　下山

乘鞍岳スキー合宿日記　（於乘鞍スキー小舍）

期日　十二月廿三日——廿九日

一二、二三　曇時々晴　乘鞍スキー小舍到着(四、三〇)

前夜新宿から賑やかに出發、立川から部員鷲崎、高橋を加へて全員合計廿二名となる。島々で乘鞍スキー小舍の齋藤安一に迎へらる。鈴蘭小舍附近から乘鞍の全山が見える。隊伍をとゝのへて前進、合宿參加者氏名次の如し、

鷲崎雄四郎、原鐵三郎、里見治男、高橋廣三郎、宮城恭一、小泉三郎、久保孝一郎、樫淵明、佐藤政雄(以上部員)、大谷恭一、川島稔、菊池泰一郎、今井一郎、臼井秀吉、栖原毅、鈴木正博、井上一造、小林悦生、根本大、杉原俊造、谷口直行、森本彬(以上部員外)

到着コンパを盛大に開く

一二、二四　雪

合宿豫定表に依れば二、三日降り續いても差支へない事になつてゐる。その譯は乘鞍頂上を踏むにはどうしてもその位の餘裕を見て練習して置く必要があるからである。位ケ原附近までラッセルしながら登る。晝食もゲレンデで濟ませて三時頃小舍

へ歸る。

一二、二五　雪

昨日と同じゲレンデで全制動をやる。練習は結局部員と部員外との區別無く一緒に行ふ。非常に張切つて練習。ゲレンデにて晝食、テルモスの茶が美味い。

一二、二六　雪

附近練習、本日下山者五名(部員外)、栖原、今井、菊池、川島、大谷、殘留者合計十七名となる。

一二、二七　雪

早朝三、〇〇に起床して天氣を見る。駄目だ、今日も降り。非常にくさる。位ケ原の相當上へ强行して練習、シュテムボーゲンをやる。

一二、二八　雪

いよ〳〵合宿も終りが近づいたといふのに天氣は依然として悪い。青山學院の連中から食料品等分けて頂く。四時頃鈴木が小舍の前にて膝頭を捻る、相當痛むらしい。いよ〳〵今晩が最後の解散コンパだ、盛大にやる。

一二、二九　雪

今日晴れたら頂上へ行つて一日伸ばす豫定の處が、雪なので早速仕度して歸る。出發(一〇、〇〇)、鈴木、橇にて下す。其他一行無事歸京。合宿は本日を以て終了とする。

今冬は餘り雪が多くて滑るには充分だつたが乘鞍頂上を極められず、殘念であつたが其又一人捻挫して氣の毒であつたが其他は近來稀に見る和氣あい〳〵たる合宿であつた。人數が多い割にまとまつたのは小舍を殆んど獨占してゐたからでもある。スキー技術は相當に向上された事と思ふ。

（合宿責任者　原鐵三郎）

武能小舍

一、二　小雪　土合より避難小舍までのし武能小舍にかへる　岩崎利一

一、三　吹雪　歸京

武能小舍は年始に不拘人影少し。雪質悪し。

岩崎利一

湯澤スキー行

一、八　雪

猛烈なる雪のため列車が動かぬ位であつた。快適。

岩崎利一

鬼怒高原スキー行

岩崎利一、大塚武、宮城恭一、山田亮三、樫淵明、根本大、森下洋

一、二二　晴　岩崎スキーを折つて腐る。

高橋廣三郎　他三名

赤城山スキー行

二、五　晴

天候に恵まれ快適、殊に新坂峠よりの下りは雪のコンデイションよくブン〳〵飛ばす。

岳川谷生活　船本文治、大塚武、宮城恭一、山田亮三、久保孝一郎

（前書）　例年の事ではあるが、「春は何處へ入らうか」と云ふ問題は新しい春を迎へない前から絶えず問題になつてゐた。もう一度奥又白へ入つて見度いと云ふ意慾はかなり強かつたが、種々事情もあつて第一次的にはつきり、「こゝでなければならぬ」と云ふ程の強い牽引力を持つてゐなかつた。その事情とは冬は全く顧られなかつた新しい部員の訓練がその一であり、昨秋の二回の準備行が悪天候の爲とは云へ共に目的を達して居らず、私にしても一峯四峯共にトップで登つたわけではなく、又山田に至つては全く手をつけてゐないと云ふ事情がその二であつた。更に部員の間にも單なるスキー合宿でなく皆一緒に雪上に幕營して見度いと云ふ希望も強かつたので安直にして又次の計畫にも最も支障の少ない岳川がその對象として選ばれたわけである。

こゝで最初樹てられた計畫の規模を簡單に記して見よう。

先づ參加者十三人、三月八日入山、同十日天幕建設。十一日より十六日迄を合宿期間とし、その間を十三人を三班に分つて（ジヤンダルム、奥穂高）（善六澤より西穂高）、（天狗澤より西穂高）を目指し、解散は十七日、奥又白はそれにつゞいて行ふ事とした。試驗の關係で一部を後發隊として二、三日遲れて入山する事も定められた。幕營地は人數も多く、全く未經驗なる人も居るので可及的に低い所を選び、天幕は三張として、一切の行動については再び「自分達だけの手で」と云ふ方針がとられた。

以上が大體計畫の概要であるが、時日の經過と共に止むを得ざる事情から不參加となる者が續出して、それが機緣となつて氣分的にも弛緩を生じ、實際の參加者は僅か五名となつてしまつた。（大塚）

（行動）

三、一二　小雪　島々――坂卷溫泉

清水トンネルの手前で日沒、トンネルの入口はデブリで塞がり難行する。荷物を置いて坂卷へ泊る。

三、一三　小雪　坂卷――五千尺

午前中荷物をとつてくる。釜上は雪惡く苦勞する。この日も大難行、五千尺着一〇時半。

三、一四　晴後曇　德澤往復

幕營用具その他を取りに。疲れたので天幕建設は明日とする。

三、一五　快晴　天幕建設

西穂高露營地標の上を幕營地とする。二度に分けて荷上げを完了。この分では明日は上れさうだと云ふので夕方O、Y上方偵察。

三、一六　雪後晴　滯在

案に相違して今日は雪降り、スキー練習快適、午後から又良くなつたので準備に忙しい。

三、一七　薄晴後雪　善六澤より西穂高

天幕（四、三〇）――善六澤を登り西穗稜線二四三二米峯手前のコル（九、三〇―四五）――降雪烈しく戻る。

早く歸らねばならぬ者がゐるので豫定を變更して全員善澤より西穗へ向ふ。滿天の星を頂いて出發したが次第に薄雲が張つて來る。デポを早目にして輪カンで狹い澤を眞直ぐ登る。人數が多いので簡單に稜線に出たが天候は全く惡化、飛驒側を覗いた丈でラッセル通り下る。デポに着いた時は大きなボタン雪が深々と降る。その中を快適な滑降を享しんで天幕に歸る。

三、一八　小雪

一日雪が降るとうまく行つても二日後でなくては登れない。この日船本、宮城下山。

三、一九　小雪

午後幕營地の附近で練習中Yスキーを折る。常さんの所に昨春から置いてある部のスキーとかへる。夜俄に輝くばかりの星空となり一應準備する。

三、二〇　雪　滯在

目ざましで起されて天幕を開くと今までにも增した深い雪降り。夜は岳川を引上げて又白に行くか、このまゝ留つて第一次計畫だけは貫撤するか、について話し合ふ。結局後者を選ぶ。

三、二一　快晴

德澤へ石、油、ラヂイウス等を取りに行く。この所全く天候に愚弄されてゐる。然し「明日こそは」と三度張り切つた氣持で準備する。

三、二二　曇後吹雪　天狗澤より西穗高登頂　天幕（三、三〇）――天狗のコル（九、四五――一〇、一五）――天狗岩南のコル（一一、五〇）――第二峯（〇、三〇）――西穗高三角點（三、四〇）――西穗高澤左俣を下る――デポ（四、三〇―五〇）――歸幕（五、二〇）

あれ程の期待を以て迎へた今朝も洵に不愉快な天氣、久保は調子惡く天狗澤入口より引返す。天狗澤のラッセルは次第に苦しくなる。腰までもぐる雪には全く閉口、然し雪崩を起す樣な雪とは考へられない。あまり能率が上らないのでトップが片足上げると次の者が上げた足の輪カンの下からピッケルを橫に通して片足だけ支へる事にする。之がかなり效を奏する。天狗のコルに着く頃は全天鉛色の雲が蔽つて黑部五郎の邊りまで雪の峯が白々と見える。こんな具合で終日保つだらうと早速登り始める。二峯を過ぎる頃岳川側からの風と共に雪が舞ひ始める。三峯の先の痞せたリッジから次第に惡くなる。四峯の登りの取付は思ふ樣に僞松が掘出されず、ハーケン二本を打つ。稜線の雪は昨日終日の快晴にもかゝはらず我々が豫想してゐた樣な堅雪でなく、全くラッセルに終始する。この間天候は急激に惡化してくる。然し今迄の事からしても、「とに角西穗の頂を踏まなくては」との氣分が强く支配して只管先へ進む。急な雪稜の雪をピッケルの屆く限りたゝき落した時その上の雪がドカッと落ちて危く振り落されさうになつた事もある。そして落ちた雪は痞せた稜線を左右に別れて雪崩れて行くが、風雪に妨げられて

直ぐ見えなくなる。最後の登り――時々ひどく落ち込む不愉快なラッセルの後遂に標木の立つてゐる頂に着く。感激の握手、時間も早い。然し頂の幸福に酔つてゐる時ではない。直ちに凍つたザイルを外して頂上直下に下る。先づブロックを切つてその落ち具合を試して見たが忽ち濛々たる灰色の中に消えてその先は判らない。間隔を狭めて一直線に下る。足の踏み出し具合は割合に良いのでホツとした氣持になる。かなり降つた時先に歩いてゐたYが突然止つた。何の氣なしにOも前を見るとYの足下から左に五米位裂線が走つてゐる。二人共顔を見合せて水を浴びせられた様な感じ、然し今更どうする事も出來ないので更に一歩を靜に踏み出す。こんな事が五、六度續いてある時は左右に十米位二條も裂線が走つた事もある、左俣は思つたより長く仲々河原が見えない。次第に危險區域から遠ざかつてデポに着いた時は全く解放された氣持、天幕で久保に迎へられる。苦しかつたが充實した登攀。

三、二三　雪　滯在　濡れ物を乾しに五千尺へ

三、二四　曇後雪

朝一寸晴れたが後曇となる。本日久保下山、天幕は二人となる。

三、二五　曇

昨夜の雪は一尺餘り雪面を高めて景觀は一變する位、終日天幕を出でず。

三、二六　雪

今日も雪。明日駄目なら卽日下る事にする。

この二、三日全くの animal life、冗談に屢々「俄に精進の氣起りてツアラツストラは山を下りき」等と云ふ。然しこの冗談は冗談にしては餘りに心の奥深く突刺してくるものがある。炊事と炊事の間に又寢つかれぬまゝにシユラフザツクの中でこの様な氣分に絶えず沈潛し乍ら滯在の日のみ徒に過ぎた。

三、廿七　快晴　休養五千尺へ

三、廿八　晴後曇　岳川より明神岳、上手宮川へ、天幕（三、〇〇〇）――堀割のルンゼを登り明神稜線（七、四〇――八、一〇〇）――第二峯（九、三〇〇）――コル（一一、〇〇――〇、三〇〇）この間明神岳第一峰往復――上手宮川を下り明神橋（二、〇〇〇）――五千尺（三、〇〇）

今日は岳川より明神、前穗へ登り奥又白を下つて德澤へ下るつもりで行く。堀割のルンゼを登る頃大正池の上にたゞよつてゐた雲が廣がつて來る。西穗も一寸朝映けを見たゞけで再び陰鬱な白一色となる。稜線へ出たが待望の日の光にもあたり得ず烈しい西風に曝されて絶えず右側に顏を向けて歩く。明神第二峰のアップザイレンは上半が卅米ダブルでは不足すると思はれたので東向きの岩盤の緣に沿つて下る。それ程惡くもないが手間をとる。この頃から天候は次第に惡化して疊岩から前穗までの稜線は雲霧にかくれてしまう。之から先は曾遊の所でもあるし急に興味を失つて上手宮川を眞直ぐ降りてしまつた。この行は天幕から輪カンで出てスキーは一切用ひなかつた。

三、廿九　快晴　天幕撤收、中の湯へ

昨日の崩れで又何日か續くだらうと思はれたのに今日は日の上るに從つて次第に晴れ上り眞蒼な空となる。物質的にも精神的にも行き盡した我々は今日下山と決する。

午前中天幕を撤收し、中の湯へ（四、〇〇）

三、卅　快晴　中の湯（一〇、〇〇）——奈川渡（三、二五）

岩崎利一

湯澤スキー行

三、一四　晴

ゲレンデ上の大峯山に登行。

森川眞三郎

八方尾根　唐松岳

三、二三　晴後猛吹雪　四谷（一〇、〇〇——一〇、三〇）——細野（一一、四〇）——黒菱明大ヒュッテ（五、四〇——六、一〇）——黒菱小舍（六、二〇）

久し振りに唯一人山に入る。足を傷めてスキーでは無理の樣に思はれたので輪カンだけ持參した。山は連日の雪で膝から時に腰迄沒するラッセルに苦勞した。凍傷の痕が相當痛む。一年山に入らぬと冬山の寒さが身にこたへる。小舍から四五丁の處へ來て吹雪が餘りひどく、歩行も困難になつた。よほど引返さうと思つたが、何ともあきらめ切れず、蟻が這ふ樣にして、明大の小舍に辿りつく。晴れて居れば、もうすぐ向ふが黒菱小舍だと云へるのだが、どうしても頑張れない。そのまゝでは先づ三十分はかゝる。下手をすれば小舍には行着けず、どうなつて居るか判らない。細野から實に五時間も費して居る。こんなに駄目になるものかと、自分ながら情けない。明大の人々に親切なもてなしを受け元氣をつけ、吹雪、猛風の中を黒菱小舍に向ふ。

三、二四　晴後曇　小舍滯在

昨日に變る小春日和、身體の節々が痛んだが跛ひき〳〵雪線漫歩、拙いスケツチが何枚も出來た。妙高、戸隱、燧、雨飾と越後の山々が變らぬ姿の儘に並んで居る。

三、二五　曇　小雪　小舍滯在

午後雪の晴間を見て、信忠のスキーを持出し、小舍の前で滑つて見る。初めは恐る〳〵だつたが、案外調子よく動ける。段々高い所へ登つて見る。廻轉も右廻りだけは先づ、スムースに行く。兎に角これで又スキーが穿けるんだ、冬山に登れるんだ。二度、三度と、滑降を繰返す中に、昨年以來、胸につかへて居た暗い影が何時か薄れて行つて了つた。嬉しかつた。早く山の頂へ上つて大きな聲で呼んでやらう。

三、二六　晴後雪　小舍發（七、四〇）——三角點（九、〇〇）——二、〇〇五米ピーク（九、三〇）——一一、二〇）——黒菱小舍（一二、〇五）

早朝は快晴、始めて山へ來た時の樣に、そわ〳〵落つかない。上へ登るに連れ天候は惡化し、風が出て來た、小雪がその中に舞ひ出した。二十八日の卒業式には母が必ず出る樣にとの嚴命

今日登らねばもう、黒部の谷から、立山や剣を見るのは何時の事か。

引返し點で實に二時間近くも立盡して居たが、風は叩きつける様に吹きつけ、先日の様な事になつてはと遂に引返す事に極めた。何度も〳〵踏止つて見たが、如何とも此の身體では自信が無かつた。小舍への滑降は杖制動で緩る〳〵下つた。

三、二七　快晴　小舍發（七、三〇）——三角點（八、三〇——九、一〇）——中繼小舍シーデポ（一〇、四〇——一一、二〇）——唐松小舍（一、一〇——一、五〇）——唐松頂上（二、一〇——小舍（二、二〇）——シー、デポ（三、一〇——三、二五）——黒菱小舍（四、〇〇——五、一〇）——細野中村實方（六、四〇——九、〇〇）——四谷（九、二九）——松本——立川（前一〇、四〇）

山はよく晴れた。このまゝ歸れる筈が無かつた。遲い小舍の食事をせきたてゝ飛び出す。登れるだけ登つて今日中に下山しようと云ふ考へである。新雪に刻み込んだラツセルの跡が廣い尾根の上を一筋何處迄も續いて行く。是が學生々活最後の山行になるんだ。併し新しい世界は登れば登る程廣がつて行く。一つの頂に立てば又次の頂へ向つて精進が續けられる。それが自分達の過去の生活であり又將來の生活でなければならない。死線を彷徨する事は二回、死に勝る苦境に遭遇する事幾度か、失敗と苦痛の連續とも云へる。この山登りの生活も自分には常に新な歡びと勇氣を甦らせてくれる。斐々として遂に、ぼろ〳〵の山姿で卒業式に參ずる始末となつた次第である。

唐松からの眺めは、素晴しかつた。

昭和十四年度（一九三九・四——一九三九・六）

大倉高丸（新入部員歡迎登山）　船本文治、大塚武、日江井正己、宮城恭一、深谷光茂、山田亮三、久保孝一郎、樫淵明、佐藤政雄、根本大（以下新入部員）　林正敏、高野秀男、關岡賢治、後藤隆之、鈴木肇、清水一郎

四、二三　曇後雨

この日も天氣惡く霧の山頂を早目に下りて田野鑛泉でコンパ

富士山　船本文治、日江井正己、久保孝一郎

但し前夜の睡眠不足で皆よく睡る。

四、二四　晴　吉田（一一、〇〇）――五合（四、三〇）
　昨日の雷雨は雪で馬返し邊から見る山姿は素晴しい。雪は一合からあり五合附近は三、四尺暖氣にぬかつて難澁する。
四、二五　晴　小舍（五、〇〇）――頂上（一〇、三〇）――歸京
　烈風のため八合邊は愼重に登る。頂上の小舍は雪が一ぱいで入れぬ、寒氣きびしく早々に引上げる。

白峰北岳　大

　この行は五人で荒川谷より白峰の稜線に出で、後二班に分れO、Kは大井川東俣に下り雪投澤を經て鹽見蝙蝠に登り西俣に下り、Y、S、Nは北岳より野呂川に下り仙丈、駒を經て韮崎に下る豫定で行はれたのである。
四、二四　晴　夜叉神越え蝮平小舍
　この日雲多く白峰の稜線は見えなかつた。
四、二五　薄晴　荒川谷遡行中K負傷、小舍に引返す。
　豫定通り荒川谷に入る。吊橋を過ぎ右岸の細道を進む事一時間足らず、踏跡は消え河身は瀧となつて且水量多く渡渉不可能止むなく右岸を百米程上り高廻りせんとす。種々試みたが捲いて下るを得ず、一旦元の踏跡の消えた地點に戻らんとす。かなり急な立木の疎に岩も所々露出した草付を登路通り下降、オーダーO、S、K、N、Y、一〇時二〇分頃突然Kスリップ、烈しく轉落約五〇米にして大きな倒木の側に止る。幸にもリュックをつけたまゝ仰向けに止つた爲大事を免れたが頭部に相當な裂傷を負ふ。出血はかなりあつたが比較的早く止る。意識も明確にして、骨折等もなく、先づ〳〵不幸中の幸だと慰め勵ます。約二時間同所にて休息後、先づO、N一足先に歸舍。Nは火を起しお茶をわかして待つ。O再び戻り三人でKを助けつゝ下る。食慾も常に變らず大體經過良好なる爲同夜は蝮平に過し翌日甲府へ向ふ事とする。
四、二六　曇後雨　K、O、Sは甲府へ、Y、Nは滯在
　Kは全身に受けた打撲と擦過傷が今朝になつて痛を發し、始めは極めて調子惡く峠が越せるか否かに心配する。峠の登りとなる頃から回復し約三時間で峠の頂に立ち、芦安よりハイヤーにて夕刻甲府へ。醫者の言、樂觀、手當をして直ちに歸京せしむ。O、Sは甲府へ泊る。
　このH Y、Nは昨日行詰つた所の下にある橋（之を見落したる事が今度の事故の直接原因であり、リーダーとして慚愧に堪えない――大塚）を渡つて尙進むも幾莫もなく渡渉以外に方法なき箇所に至り水量のあまりに大なるを見て引返す。ベデの岩小舍の手前の邊りと思はれる。
四、二七　曇後雨　O、Sは夜叉神越え蝮平へ。Y、Nは滯在
　この日四人合し、計畫を變更釣尾根より北岳へ、Oのみ東俣へ向ふ事とす。
四、二八　快晴　小舍（八、〇〇）――釣尾根池（〇、三〇）――

一、二〇）——砂拂下にてビバーク（四、三〇）

雪は釣尾根道が急坂を終へる邊から續く。池で一尺餘り。天氣は良くなつたが風が強く寒氣が烈しいので今夜のビバークは辛い。白檜を倒して小舍掛をする。風が烈しいのでラジウスは焔が散つて氣管が溫まらず點火せず。雪上に焚火をする。調子良くうまい飯を食ふ。

四、二九　快晴　ビバーク地點（七、三〇）——北岳（一〇、二〇）——一一、三〇）

朝は餅を食つて出發、落込も難なく通過、頂に立つ。肉體的にも精神的にもかなりの困難を排して得た登頂なので四人手を握り合つて喜ぶ。こゝで時間に餘裕のない豫科生三人は登路通り下山、Oは間ノ岳より東俣へ向ふ事とし、なんとなく寂しい別れ、再び握手を交して東と南へ。

——ビバーク地點（一、〇〇——一、三〇）——蝮平小舍（五、〇〇）翌日、峠越え歸京。

尙大塚の爾後の行動は次の記錄參照。

大井川東俣より鹽見越え西俣へ

大塚　武

四、二九　北岳（一一、三〇）——間の岳（一、五〇——二、〇〇）——東俣廣河原（六、五〇）

北岳の烈しい降りも終る頃落込を越してゐる三人と聲を交す。一帶に稜線の北向斜面はクラスト堅く、アイゼンを持たない爲キックステップを要する所があつた。間の岳へ着くと鹽見は未だ山の色が違つて見える程遠い。然し自分の長年前からの計畫ではあるし、天候も下り坂ではあるがどうやら持ちさうだ。今を逸して何時決行出來ようか。直ちに頂から眞直ぐ下る。シッテイング・グリッセードで三〇分の後には東俣に入る。雪の上に小鳥の屍がいくつも散つてゐる。左から農鳥小舍下に發する澤が入る所でもう澤は割れてゐる。何年か憧れた東俣の水を先づ手にすくつて飮む。この邊で輪カンをつけてどん〳〵下る。スノーブリッジがまだしつかりしてゐるので割合にはかどる。五萬分ノ一安倍荒倉嶽とある嶽の字の東の邊りは東俣も兩岸が迫つて暗い感じ、瀧等あつて少し時間を食ふ。之を下ると廣河原までずつと歩きよい。瀧ノ澤の出合で最初の架橋を見出し心安さを感ずる。右から新蛇抜の大ガレ、左からも大きなガレが落ちてゐる邊りは河原も廣く最早廣河原の近い事を思はせる。然し終日日當りの良い爲か雪はすつかり腐つて一步々々確實に膝を沒するのでかなり疲勞を覺える。鹽見の肩、蝙蝠の稜線が最後の殘照を受けて美しい。振りかへれば今越えて來た白峰の山々も夕の薄紅に輝いてゐる。七時前遂に池の澤と雪投澤が左右から合流する廣河原に着く。小舍があるのではないかと幽かな期待をかけてゐたが一寸見た所ではそれらしいものは見當らない。疲れてもゐたので雪をどけて白檜の葉を敷きゴロ寢とする。焚付の紙が少いので火がつかない。面倒になつて炊事を止め、有合せの物を食つて寢る。月がおぼろにかゝつてゐるが雲が一面に擴がつて今晩一晩保てば良いと希ふ。

四、三〇　曇後雨　廣河原（七、三〇）――雪投澤を登り鹽見の肩（一一、二〇）――〇、〇〇）――蝙蝠岳（一、三〇）――一、四五）――西俣柾小屋澤出合（四、二〇）――二軒小舍（五、五〇）

朝は餅、雪投澤は始めは割れてかなり歩きにくいが次第に良くなる。上部は絶好のシーゲレンデ、鹽見の肩に出る。こゝから頂までは三〇分とかゝらないが疲勞と次第に崩れて行く天候に登頂を斷念する。鹽見へ登り北俣を降りる事も考へられたが既知の道を辿る事とする。蝙蝠の頂に立つた時には周圍の三千米級は全部頭を雲にかくしてしまつた。この尾根の先から櫻島へ下る道は夏でも鉈目に導かれて降りた所なので充分注意したが木立の中へ入つてしまうと皆目分らない。幾つもそれらしい地點を通過してこの邊だらうと見當をつけて降りたが忽ち急な斜面となる。戻るのも面倒なので雲の降り始めた中を斜面をからみ〳〵捲いて夏道のある尾根に出る。漸て雲は雨となり、伐採道に迷つて櫻島へ下る積りであつたが下りた所は柾小屋澤の出合に近かつた。西俣には雪は殆んど殘つてゐない。雨の中を今はすつかり解放されて廣い道を二軒小舍へ。

五、一　曇後晴　轉付峠より下山

谷川岳　船本文治、日江井正己、山田亮三、久保孝一郎、佐藤政雄、根本大、小柳英二郎、佐藤眞一、林正敏、高野秀男、關岡賢治、鈴木肇

五、二六　小雨後晴　土合――一の倉澤天幕地

午前中天幕建設　午後から晴れたので少し登りグリツセードアプザイレンの練習等する。夜は素晴らしい星空となつた。大きな焚火をたいて歌を唱ひ、氣持の良い一夜を送る。

五、二七　晴後曇　マチガ澤より谷川岳往復

前夜發の日江井、鈴木來る。マチガ澤はビギナーの練習に良い處だ。スノーブロツクが凄じい音をたてゝ、崩潰するのに一寸吃驚する。クレバスは相當大きいのが隨所にあつた。船本、根本、林歸京。

五、二八　晴れたり、曇つたり、芝倉澤往復――天幕撤收、歸京

時間がないので最も簡單な芝倉澤に行く。ゾムメルシーの面白い谷だ。

この行は新人の雪上技術練習の爲行つたものであるが、比較的天氣に惠まれ短期間ではあつたが相當の效果を擧げ得たものと思ふ。

三ツ峠岩登り練習　　大塚武、深谷光茂、清水一郎

五、二八　晴　今日の人出は驚く程、然し岩場には三組位、充分練習して後笹子へ。

甲斐駒、仙丈より鳳凰へ　　清水一郎、佐野茂雄

六、一四　晴夕立　日野春（五、五〇）――屏風小舍（一、五〇）

久しく憧れてゐた甲斐駒を目指して、出掛けたのは何しろ梅雨時なので、萬時天氣任せで準備は充分して行つたが雨には無理をしない積りなので氣は至つて樂だつた。初日の事とて荷は重かつたが、夕立の來る前に小舍に着く事が出來た。

六、一五　晴　小舍(五、〇〇)——駒ケ岳(八、四五)——北澤小舍(七、五五)——仙丈岳(五、四〇)——六、〇五)——北澤小舍(七、五五)

昨夜は五時頃から眠り出したので火が消える頃の十時頃にふと目が醒めた。また太い奴を二三本くべてうと〳〵する。こんな事を二三回繰返してゐる中にそろ〳〵夜が明けて來た。昨夕といで置いた飯盒を火にかける。

小舍を出て途中二三ケ所殘雪があつたが大した事もなく頂を踏む。順調に北澤小舍に着く。時間があるので仙丈へ向ふ。偃松地帶から頂上へかけて同じ樣な所許りで嫌になる。歸途カメラを頂近くに忘れたのに氣がついて腐る。

六、一六　曇時々小雨後晴　朝早くカメラを取りに仙丈往復、北澤(七、〇〇)——淺夜峰(一二、〇〇——〇、四〇)——早川尾根小舍(三、〇〇)

仙水峠から栗澤山の登りにへばる。淺夜の下りで雨となつたが小舍が新築したばかりで優秀なので助かる。

六、一七　快晴　小舍(前一、〇〇)——高嶺(三、五〇——四、三〇)——觀音岳(六、五五——七、〇五)——北御室——青木湯(〇、一〇)——祖母石(三、二五)

三ツ峠岩登り練習

久保孝一郎、佐藤政雄　他八名

六、一八　晴　物凄い人出で驚嘆する。級懇心旅行を兼ねて岩登りを樂しむ。狹い岩場に人間が多過ぎるのでこゝも愉快ではない。

前穗高東壁

大塚　武、山田亮三

六、二一　晴後曇　上高地——德澤——松高ルンゼ下へ幕營(四、〇〇)

ルンゼのデブリの端のたうとうと流れる雪解けの水のわきに石をならして天幕を張る。

六、二二　雨　德澤へ戻る

朝早くルンゼを登つて荷物をそのまゝに、壁に出掛ける積りだつたがこの雨では仕方がない。左岸の尾根をかなり上つてみたが諦めて下る。

六、二三　晴　再びルンゼ下へ幕營

すつかり諦めてゐたが俄に好轉、アイゼンを忘れた爲に池に上る事を止める。午後、奥又白本谷に入りそのルンゼの複雜なのに驚く。夕方太陽が暈を被つて雲がひろがる。

六、二四　晴一時曇　天幕(五、一五)——池(七、一五——八、〇〇)——奪掠點(九、〇〇)——松高尾根上に出る(一一、〇〇)——第一テラス(一、〇〇)——第二テラス(二、〇〇)——前穂高(四、三〇——五、〇〇)——歸幕(六、四〇)

大塚がアイゼンを持つてゐなかつたのでルンゼの登行に多少手間どる。池から第一テラス迄寫眞やスケツチの爲意外に時間をとつた。壁にかゝる頃はすつかり曇つて雨がパラつく。時間もおそくなつたので北尾根を下りⅢⅣのコルから下る豫定を變更して例の如く下る。グリツセードは蓋し快適。

六、二五　雨　幕營地(七、〇〇)——德澤(八、〇〇——一〇、〇〇)——德本峠(一二、〇〇)——島々(四、〇〇)

もう二週間もすれば又來ると云ふので個人用品まで德澤に預けて空身で雨の德本を越える。

——記錄了——

寫眞說明

☆雪煙映ゆ

昭和十三年一月一日。又白池天幕にて。幾日かの吹雪の後、漸くこの池に上り得た時、眼前に展開された莊嚴な景色は忘れる事は出來ない。

☆千蛇谷にて

昭和十三年三月十四日。鳥海山には二回擊退された後とて、この三月の行で登高し得た事は何より嬉しい。頂上を踏んで下るこの千蛇谷は廣々してのんびりした氣分を與へてくれる。

☆雪稜を辿る

昭和十三年五月十三日。鹿島槍東尾根と天狗尾根のジヤンクション手前にて。東尾根には重荷でへばつたがこゝまで來れば平氣だ。雪の畫く曲線の美しさに思はずシヤツターを切つた一作。

部誌

自昭和十二年四月
至昭和十四年六月



部誌について

私達は今迄部誌についてそれ程深い關心を持つてゐなかつた。事實この十號を編輯するに當初にも、部誌について從來の形式を踏襲する事をとりあげて問題とした譯ではなかつた。然し編輯も愈々終りに近づいた時、私達の部誌が非常に形式的で、自分等の仲間さへ必要に迫られなければあまり見る事が少いのに氣がついて何かもつと內容を持たせたいと思ひ出した。

そして部室を中心として部が動いて行く樣を表現する一つの試みとして部室に備へつけてある「日誌」(この日誌に就いては「針葉樹九號」記錄七十一頁參照)との結合を計つた。その爲他方では毎週開かれる部員集會の記事を節減する事にはなつたが、結局、この部誌に迄貫かれたわけであつて、兎も角も現在の私達が、報の編輯方針たる「部の主觀」より良いと考へてかく爲したのである。然しこの際にも注意す可き事は日誌に澤山書く者もあり、又書かない者もある。然し登山者としての、又部員としての存在は必ずしも之等の記述と必然的な關聯を有してゐない點である。

(大塚)

昭和十二年度

部長　木村惠吉郎先生

部員

本三　望月達夫(代表)　小谷部全助

小林重吉　森脇芳之

和田榮達

本二　森川眞三郎(器具)　佐々木誠(會計)

鷲崎雄四郎(庶務)　榎本直司(圖書)

本一　岩崎利一(記錄)　原鐵三郎

船本文治

豫三　大塚武(庶務)　日江井正巳(記錄)

齋藤明智(會計)

豫二　里見治男　宮城恭一

高橋廣三郎　木島利夫

水田洋

豫一　山田亮三　小泉三郎

久保孝一郎

四月十二日

櫻が滿開だ。冬の山から開放されてやつと生きて歸つて來たと云ふ感じを泌々味ふ。これからは夏の山だ。俺達の舞臺がもう雪の山に限られると云ふ水準に達したと思はれる今、これからのシーズンこそ又來る可き冬に備へての練習期間だ。

理窟を言はず大いに山へ登らう。學年始に際し一言申す。

(森川)

春山報告會

四月十四日　於國立部室　出席者十二名

遠見の合宿に就き其準備、經過、記錄等各般に渉り森川より說明あり、更に浪高山岳部遭難に就き大塚說明す。

鳥海山に就き原報告。

望月より日本山岳會の山岳懇談會に就き說明。

新入部員歡迎會

四月十六日　於部室　出席者十八名

司會者挨拶の後、歡迎登山に關する注意並びに大學山岳部の抱負に就き委員より說明あり、各自自己紹介を行ふ。

定期部員集會

五月十四日　於部室　出席者　本科九名

針葉樹九號發刊を決し、その編輯方針、廣告その他について種々打合せ懇談す。

五月十七日

近頃の山岳部は昨年邊りに較べると實に穩やかそのものである。だが山岳部には限らず、全て現實を凝視する時、我身の據り所に惱む。若い時代、何物も眼中になく唯山を

戀ふた時代、それは人生の最も幸福な時代に違ひない。

SKE

五月十四日

我々の様な部員の少い所ではどうも縦の帶に頼り過ぎる様だ。一學年々々々がしつかり固まる事は全體の調和を破るものではないと思ふが。

T・O

六月三日

午前中廣告（針葉樹の）取りに歩いたが一軒として成功せず、大いに腐る。實際廣告取りなんて詰らねえなー。今日は又嬉に天氣が良い。こんな日に山でも歩いてゐたらなー。俺達の世界と實社會との距離がどんなにあるか今日は嬉になる程見て來た。諸君夢々廣告社等に入る可からず。

M生

定期部員集會

七月二日　於部室　出席者一八名

夏山最終準備會、豫科本科全員出席、合宿及第二次計畫は山小舍を無きものとして行動する事が強調される。

夏山報告會

九月廿日　後五時半より、於國立しみづ、出席者十九名

久し振りに顔を合せ夏の樂しい想出を語ると共に、今後の活動につき意見を交換し、更に代表より部報の將來性に就て意見の開陳があつた。

九月十七日

續々と試驗の發表がある。皆歩調を揃へて Ohne mark で行からじやないか、折角試驗が終つたのに風邪を引いたりコンデイションを惡くして何處へも行けないなんて悲慘の至りだ。

T・O

九月卅日

照る日曇る日必ず部室へ來るが少しも變つた事がない。何か素晴しい計畫はないかしら。

船本

十月十二日

新雪の山から歸つて來たら急に仕事が多くなつて忙しくなつた。奥又白計畫決定の由、僕としては部全體の水準が斯くも高揚された事に對して非常な嬉しさを覺えると共に一面不安の念を禁じ得ない。然し乍ら萬全の準備と用意があればそれを解消し去る事が出來ると思ふ。

兎に角充分愼重に行動せねばならない。（岩崎）

十一月六日

新らしい器具、新らしい技術によつて登山に於ける危險は日一日と減じて行く。然し乍ら、より困難を求めより新しい天地を求め、未知の領域を開拓する事を以て實踐アルピニズムの主流となす以上、そしてそれを山岳部の指導精神とする以上危險は永久につきまとふ。而もその危險を最小限度に少くする事は山岳部が團體として強固なものにな

る以外に方法がなからう。團體として強固なものとなるには各自が犧牲的精神に覺め、あらゆるプライヴェートな感情を可及的に抑制して行かねばならない。團體としての山岳部の存在價値も部員の美しい友情を連鎖とせる全體的な集りとしてのみ見出されよう。

KANP

豫科新部長推戴懇談會

十一月八日　於小平部室　出席者本科五名　豫科九名

新部長として西川正身教授を迎へる。

一橋山岳部創立十五周年記念會

十一月十三日　後六時より　於如水會館

出席者（先輩）中川孫一、渡邊九郎、吉澤一郎、村尾金二、近藤恒雄、久保田禮治、手塚晴雄、芋川稔一、小川竹夫、吉澤松次郎、勝田一郎、增山清太郎、丸茂平造、鈴木英雄、小柳二郎、林俊介、柿原謙一、新羅二郎

（學生）小谷部全助、小林重吉、森脇芝之、和田榮達、望月達夫、森川眞三郎、佐々木誠、榎本直司、鷲崎雄四郎、原鐵三郎、船本文治、大塚武、日江井正己、里見治男、木島利夫、高橋廣三郎、小泉三郎

如水會館の日本間を陣どりスキ燒をつゝき乍ら、部が生れ今日迄育つて來た經過を各時代の先輩が巧なユーモアを交へつゝ語る。笑ひ、樂しく聞いた話の中にも部が育ち續いて行く上の苦しみが感じられ、そしてこの苦しみが部と

十二月六日

初冬の山々は素晴らしいだらう。去年も一昨年も心行くばかりの登山をして來た。今冬は雜用で一寸東京を離れ兼ねるが來年こそ全く身動きもならぬサラリーマンになると思ふと癪だ。俺も次第に觀念的登山者の仲間入りをしなければならぬのかな、嗚呼面白くねえ、然し一橋山岳部の老朽メンバーは枯れても若い連中の張切振りを見れば全體的立場として先づ瞑し得る。（スケ）

俺達のやつてゐる事が俺達の生の第一義的な事とどれだけ關聯を持つてゐるのか、現存の好條件を默認した基礎の上に立つ氣晴しであつてはたまらない。（T・O）

針葉樹會例會

一月十日　後六時より於如水會館　出席者先輩十七氏　學生五名

九州三池、函館へ夫々轉任される近藤氏、林氏の送別會を兼ねて例會が開かれた。今回のアクシデントに就き殊に憂慮された近藤氏は我々へのはなむけとして、部員の地に着いた登山、部員の協同體的融和の二點を指摘された。

我々の敬慕する先輩の遠く去られる事を惜む。

一月十七日

此頃の部室は何となく寒々としてゐる。何時來ても誰もゐない。寒い部室で本を讀んだり壁にかゝつた寫眞を見たりしてゐるとこの冬の合宿の事が懷しく思ひ出される。色々の意味で今度の合宿は僕にとつて本當に爲になつたと思ふ。天氣が惡く何處へも登れなかつたけれど、僕は充分滿足して歸つて來た。スキーが上手くなけりや駄目な事も冬山の恐ろしい事も、あんな所へ行くと自分なんて何にも出來ないんだと云ふ事もよく解つた。

冬山の危險、萱戸の原や原生林の詩情、部に入る時も色々迷つた。然しOさんに見せて貰つた荒澤奥壁の寫眞が頭から離れない。あんな素晴しい所に行けない、一生冬山の味を知らずに過す、さう思ふと居ても立つても居られない。山への愛、この刈りとる事の出來ない氣持がこの時からはつきり根を持つて來た。（YAMADA）

一月十八日

一つの事に若い者が打ち込んで行く、一つの事に撤底するその意氣と熱の中に大きな魅力を見出さないでは居られない。我々の行動が愼重を云々される前に、それだけの奔放な熱があるかどうかを考へねばならない。（T・O）

卒業部員送別會

一月廿二日　後六時より　於新宿ぽたん

出席者（卒業組）小谷部、望月、小林、森脇、和田
（殘留組）十五名

臥床中の日江井を除き全部員出席、送る者も送られる者も最も親しいグルツペの一部が分れる事を寂しく思ふ。

定期部員集會

一月廿八日　於部室　出席者十四名

主として今冬の雪崩について報告、今迄もなされたがとかく足の着かないこの種の研究も之からは充分の實感をこめて行はれる事だらう。

二月二日

秩父の連山が冷たくこつちを見下してゐた。嘗ての日何事も忘れて馳け歩いてゐた頃が懷しい。あそこに見える山々に行かなくなつてからもう三年も經つたらうか。秩父で山を始めて知つた男はいつまでも秩父の山歩きの精神を忘れる事が出來ない。恐しい岩や氷と取組んでゐる時にさへも暖い山の肌を感ぜずには居られない。無神經な荒々しい闘爭精神だけが我々の奉づる登山精神ではない。我々は今迄内面的登山精神を强調する事によつて怯懦、怠慢な方向に陷る事を怖れた。又今後ともその危險は益々增大するのである。然し自ら鞭うつてたゝき上げて來た從來の方向の中に又新な疑念而も我々山男のグループに最も恐る可き憂慮が發生せんとしてゐる狀態を見ては又更めて反省せねば

ならない。

商大山岳部の傳統的精神とは？　そして今それがどんな形で殘つてゐるかと云ふ様な問題になると自分自身何と答へてよいか判らなくなる。

端的に云へば、自分の大ざつぱな氣持から云つて部員のお互ひが溫い山に對する様な氣持でつながれてゐない様な氣がしてならないのである。（M生）

二月四日

國立部室にも春が訪れた。非常に暖い日である。我々學部三年の生活もこの山小舍と別れると同時に消滅する。

何處の果に落ち行くか知れないが常に部室の思出は新に持つてゐたい。（黒白子）

昭和十三年度

部　長　木村惠吉郎先生
豫科部長　西川正身先生
部　員
本三　佐々木　誠（代表）　森川眞三郎
　　驚崎雄四郎　榎本直司
本二　岩崎利一（記錄）　原　鐵三郎（庶務）
　　船本文治（會計）
本一　大塚　武（圖書）　日江井正己（器具）
豫三　里見治男（庶務）　宮城恭一（會計）
　　木島利夫　高橋廣三郎（記錄）
　　深谷光茂
豫二　山田亮三　久保孝一郎
　　小泉三郎　樫淵明
　　佐藤政雄　根本大

定期部員集會

四月十二日　於部室　出席者七名

春のアクシデントにつき話した後歡迎會及歡迎登山の件を決める。

新人部員歡迎會

四月十五日　後三時より　於豫科　出席者十七名

多難な時、新しい部員に期待する所大なり。

四月十六日

新らしい日誌を書き始める。それにつけても前の日誌の果した役割の如何に大であつたかを思はずにはゐられない。

思へば去年は數々の忘れ難い出來事があつた。當事者でなかつた僕としても恐らく一生忘れる事の出來ぬ年であらうと考へられる。我々は一つの信念を持つてゐる。山岳部員たる以上それが輕々に動かされる可きでない事は明かだ

がかゝる出來事の爲に益々それが強く基礎づけられ、鞏固にせられるのを感ぜざるを得ない。今や僕等が如何に考へても考へ過ぎる事のない様な重大な問題が眼前に浮びつゝある。それは畢竟一見にして云へば、登山を如何に觀ずるかの問題だ。僕は之を皆と一緒に深く考へつゝこの一年を亦山登りの幸多き日で飾りたいと思ふ。（NEKO）

五月十二日

一時過部室に來る。俺達の豫科三の時に始めて、何日の間にか集積した日誌を飽く事なく讀み耽つた。そして最近の豫科の力強い足取りと溢れる様な山への熱情に感激した。今日は五月の十二日、二ケ月後の今頃は澗澤のカールの底で我々の夏山の生活が始るわけだ。これから皆一緒になつて努力して夏山の合宿を實のある有意義なものにしやうじやないか。

新しい一年の人達を一人でも多く合宿に參加させたいものだ。皆努力して晝休みでもよいから部室に誘つて親しさを增す様にしてくれ。（佐々木）

五月十四日

邊りは新綠に包まれ俺達の心は山へ〳〵と惹かれて行く。東尾根へ行つた連中も天氣に惠まれて樂しき生活を送つてゐる事だらう。それにひきかへ、部室は喧し連中がゐなくて火の消えた様な寂しさだ。俺達は澤山の土產を樂しみにしてゐる。（M・F）

五月十六日

鹿島鎗より歸りて。

物凄い快晴に惠まれた四日間の山生活は今迄あれやこれやの都合で山に御無沙汰してゐた僕にいろんな意味で大きな力を與へてくれました。（YEBISU）

鷹野先輩訪問さる（六月一日）

曹長になつて松本の五十聯隊に居られる鷹野先輩が、ヒョッコリ演習後の休暇で懷しい部室へ來られた。丁度部員の集りも良かつたが、もう顏も知らない部員の多い中で次の様に日誌に記して行かれた。

足かけ三年ぶりに懷しい部室を訪れて部員諸兄と話してゐる中すつかり三年前の自分になつた様な氣がした。何處にゐて、何年どんな生活をしてゐても結局安心した自分を見付けるのはこの部室の中だつた様に思はれる。之だけでも國立へ來た甲斐があつた。嬉しくつて仕方がない。部員諸兄よ、何時迄も素直な純な氣持で山へ行つてくれ給へ。それだけで、いや現在の元氣な諸君の姿を見た丈で私は滿足してしまつた様な氣さへする。

森川君、それからまだお會ひした事はないが船本君、兄等の姿が今日此處で見られなかつたのは何より殘念だ。

兄等の負傷について現在の私は何も云へない。唯一日も

全快の速からん事をお祈りしよう。（たかの）

六月七日　全快の辭

思へば長かりき、去年の十二月以來病院を棲處とする事略々半歳漸く俗界の人間となり得た。その間部員諸兄並びに先輩の御見舞を辱ふし厚く感謝致します。病院に入つた時は酷寒の候であつたのに、最早新緑を過ぎ初夏となつてしまひました。全く月日の經つのは早いもので十二月から一ぺんに六月に飛んで來た様な感が致します。病院生活で得た唯一の經驗は「忍從」と云ふ一語のみでした。後は何もありません。

病院生活に憧憬する事は不健康な人間のする事です。五月に入つてからその感が殊に深く、去年の五月大塚と二人で摩利支天南稜へ登攀した事又一昨年森川さん達と富士へ行つたあの快適な登山等思ひ出してベツドの上でうづ〳〵してゐました。早く腕が良くなつて山へ行きたいと思ひます。

然し森川氏、船本氏の怪我に比較すれば僕の怪我は日數こそ長いけれど微々たるものです。兩兄の一日も早く快癒される事を切に祈るものであります。（日江井正己）

山へ行けぬ憂さ晴しに此頃は山の本を机上に山と積んでindoor-climbingに熱中してゐる。山に登る男なんて者は氣分屋が多いから書棚に飾つて見榮えのする様な本が良いのらしい。僕又然り。F・S・スマイスの「山の魂」やO・E・マイエルの「行爲と夢想」など割に内容は優秀だが本自體は貧弱なものだ。エミール・ジヤヴエルの「一登山家の思ひ出」は立派だ。切實に欲しい。が三圓では一寸手が出ない。（Y）

豫科山岳部展覽會　六月十二日

記念祭に展覽會をやると云ふ事は勿論豫科に於ける山岳部の存在を強く意識させ、豫科生に山に對する認識を深めさせると云ふ對外的な意味もあるが、それよりももつと山だけでなく部員の生活そのものを一つの共同事業により近接せしめると云ふ過半の意義があるのだ。然るに現狀を見るに唯「あなた任せ」に指導者に引ばられて仕方なくやると云ふ退嬰的な氣分が見えるのは殘念だ。確に團體の中に自身を順應させて行くと云ふ事は犧牲はあるかも知れぬ、然し少くとも團體に足を入れてゐる以上、自分の問題はそのまゝ保留して置いて一つの團體の生活に打込んで見る事が必要だと思ふ。さうする事によつて反つて自分の問題を解決するヒントが得られるのではないか。俺達は問題を問題として傍觀して行く「アイマイ」な態度でなく、飽までも解決に食ひ下がつて行く必要があると思ふ。（T. Kijima）

夏山第二次準備會

六月廿四日　於本科　出席者　十一名

合宿につき具體的に全般にわたり準備が行はれる。器具の整理も行ふ。

永らく病床にあつた日江井久し振りに顔を見せる。尙森川、船本も今月上旬退院し、靜養中、久し振りに安堵の色部内に溢る。

七月一日

昨日より登校した。感慨無量だ。言葉も出ない。名譽を失墜せしめた事を深くお詫びし、入院中御見舞下され厚く御禮申上げます。森川氏も早く來るといゝな。再び皆で山を語らう。（船本文治）

柿原謙一氏歡送會（應召）

八月廿五日　於如水會館　出席者　先輩十四名　學生七名出席者一同のサインを連ねた日の丸を送る。

九月八日

本日上京す。今夏は水害やら、その他色々な事情で山へ行けず殘念だつた。今年の澗澤合宿はどんな調子だつたらう。更に北岳は？　夏山報告會が待遠しい。寫眞も早く見度い。みんなの顔がそれよりも尙見度い。そして山の話を聞き度い。山に行けない夏休みなんて全く空虚だ。あれ程憧れてゐた穗高を見ずに過したのは何と云つても殘念だ。せめてみんなの寫眞でも早く見度い。然し山と云ふものと家庭の事情とは僕自身には兩立しない。悲しい事だが致し方がない。が山を僕は絶對に忘れる事が出來ない。

（DON）

夏山報告會

九月十七日　於部室　出席者十三名　外先輩望月氏久し振りで部室へ來た。

全く半年振りである。皆が相變らず元氣なので嬉しい。學生時代にうんと山に登れ。之が今私の云ひ度い第一のことだ。（KANP）

九月二十一日

永い間學校や山から遠ざかつて居た爲か、氣分が何となく纏まらなかつたが、先日の報告會以來やつと昔の樣な心持が甦つて來た。どんな境遇にあつてもあの清淨な健やかな山々の姿や心をしつかりと捕へてゐると云ふ自信は何よりも心强いものだ。自分の生活と登山の關係などと改めて云ふ迄もなく、大學六ケ年の全ては登山生活であるとも云へる。その間に自分自身としては學業は勿論殆んど凡ゆる生活要素を抹殺し、肉體そのものの迄重大な負手を受けるに至つた。自分以外の周圍に對しては、山岳部の諸兄は勿論、兩親、友人、先輩始め、一般社會に對し如何程の迷惑を及ぼしてゐるか判らない程である。

而も自分は登山生活をこゝまで續けて來た事を何よりも喜とする。この事は正眞正銘斷言する。この意味は自分の

仕出かした大きな失敗は何とも思はれぬと云ふのではない。之を含めて尙餘りあると云ふのである。自分が今張切つて登山の出來ぬ身として諸兄が元氣に揃つて、激しく、鋭く、山々に精進してくれる事が何よりの樂しみである。愚圖々々云はず、片端から日本の山を登り盡す意氣で進んで貰ひ度い。（森川生）

九月二十七日

昨日朝歸つた。池に三日幕營、三峰を登つたのみだつたが、自分の力を試し自信をつける上にはかなり有意義な登攀だつた。

德澤の爺さん曰く。「皆山へ來ておくんなさい。山へ來ないと、外に好きなものが出來てだん〳〵山から緣遠くなる。」と。（佐重）

九月二十九日

八ケ岳へ行つて來た。大勢の人々がゐたので落着いて山を眺めるひまさへなかつた。Gipfel-glück はそこにゐるパーテイの數によつて分割される樣な氣がした。

此間謙チヤンに聯隊内で會つて來た。少し疲れてゐたらしかつたが、元氣だつた。「學生の中だよ。出來る丈の事はやつておくのだね」とは別れる時に洩した言葉。

今のやうな時にあつて何かやらかす事の出來る位の年配の者で絶對にその身體を保證されてゐるのは學生だけではあるまいか。全ての事に、凡ゆる價値のある事に、全力を盡すのは我々の特權であると同時に義務ではなからうか。兎に角全生活の各分野を通じて、精一杯の事をしたいものだ。（N）

梨一箱備へた。食つたら一箇四錢鑵の中に支拂つて下さい。

十月六日

我々は常に一つの目標を持たねばならぬ。目標もなく行き當りばつたりに唯山に登れば良いと云ふ考へ方、私は其にいくらか飽き足りない氣持を抱く樣になつて來た。

「僕はマンメリイやギド・レイの樣になり度いのだ。優れたアルピニストになり度いのだ。」我々だつてこの位の氣持を持つてゐたつて良いのじやないか。若い間の事だ。何もかも忘れて山に打込んで行く熱情があつたつて良いのじやないか。常に覺めた意識を心の底に置いて行動しなけりやゐられぬ人なんてある意味から云へば、哀れなもんだ。考へつゝ山へ登るのも良い。足下の定まつた登山をするのもよい。だがそれにもまして大切なのは山への強き愛であり未知なより困難なものに對する憧憬であり、その憧憬を滿さんとする激しい意慾であると信づる。（YAMADA）

定期部員集會

十月廿七日　於部室　出席者　十二名

近頃、私達の間には蟠まりが出來たやうだ。疑を疑として積極的に主張しないで、それが根本的なるが故に話す事を避ける、そして無關心と云ふいまはしい外觀となつて表れる。今日は一つ底を割つて話し合つて見ようじやないか、と云ふ事になつてこの會が開かれた。

所がこの會程、部の指導方針とか、自分々々の山とかがバラ〳〵に主張されて、部員の間に何の内的理解も結合もない事が露骨に示されたものはなからう。昂奮もした、激論も行はれた。とゞのつまり、「やつぱり、さうだつたのか」と云ふ悲哀をこめた感じを殘したのみだつた。

部員の一人々々が「俺が山岳部だ」と云ふ意識を以て自分の疑が主流から流れ出て行くものでなく、皆の問でとりあげて、共同の問題とするだけの意慾が足らず、又さうさせる雰圍氣がなかつた事に私達の最大の缺點があつたのだ。互ひに理解し會ふ事がどれだけ大切であり、どれだけ困難なものか、つく〴〵考へさせられた。こんな事が昂奮も何もなく、常日頃笑つて話し合へる様な雰圍氣を作り出したい、とはこの會から出發した希望であつた。（佐重）

とに角山へ登りませう。（Newd○氏）

十月二十八日

この頃燒芋がはやる。部室のまはりの葉落をかき集め山と積んで焚火をする。その中へ芋を投り込んで、その周圍をかこんで話し合ふ。漢口も陷落。（BEN）

森脇先輩訪問さる　十一月三日

久し振りに來た部室は矢張り良い。薄汚い所も前と同じだし、出入りする面付も氣分も變りが無い。（BAN）

十二月一日

十二月になつた。ストーブを圍んで冬山の事、スキーの事、口から泡をとばして、時を過す様な雰圍氣がこの部室にはなくなつた様だ。我々の登山が部としてゞなくとも、個人としても發展がなく單なる循環に過ぎない様な、——少くとも振りかへつて樂しむと云つた様な非建設的な氣分が醱酵し出したのではないか。

登山、山岳部、仲々分らないものだ。生命と迄は云ひ切れない。然し趣味だと云はれてはたまらない。（T・O）

十二月七日

寫眞展覽會に澗澤合宿の寫眞を引伸した所、はからずも一等入選。美しいだらう。おごつてやらうか？（ゴム）

木村部長を圍む會

十二月十五日　於部室　出席者　先生外本科部員七名

十二月十七日

午前中荷作りをして國立驛からチツキにして出す。愈々今晩出發だ。國立にゐた頃から、夏山とか、冬山とか、大

きな登山にはいつも出發を前に、何かこの日誌に記してをき度いと思つて來たものだ。そして此の氣持は今に至るも變りがない。この頃は時々今度が最後になるんじやないかしら等と別に沈んだ氣分でもなしに思ふ事がある。そして入山を前にしてその度毎に自分をまとめて見度い樣な氣がする。

卒業部員送別會

一月廿六日　於新宿キリン

出席者　(卒業組)　森川、佐々木、鷲崎、榎本

(殘留組)　十三名

どちらかと云へば寒々とした送別會だつた。

定期部員集會

三月四日　於部室　出席者七名

春の合宿の人員、期日の大半の變動につき最後的打合せをする。

三月三十一日

今日もやつて來た。この頃の朝は何と眠い事だらう。圖書館から本を借りて來て部室が靜で良いから讀みに來た。O、Y氏等は今日あたり上高地を下つたか？　俺の下つた日は靜な曇つた日で穗高がぼんやり、燒の煙がかすかに見えた日だつた。手袋も要らぬ程の生溫さで、南風（Föhn と云ふ可くあまりにも靜な風であつた）が頰をなでて、大正池の枯木には水面から三尺位上に氷がくつゝいてゐた。春が氷や雪を追ひ越した形だつた。無量の感慨を以て中の湯目指して下つた。（Kubo）

昭和十四年度

部　長　木村惠吉郎先生
豫科部長　西川正身先生
部　員

本三　岩崎利一（代表）
　　船本文治
本二　大塚武（庶務）
本一　宮城恭一（會計）
　　深谷光茂（圖書）
豫三　山田亮三（庶務）
　　小泉三郎（會計）
　　佐藤政雄
　　佐藤眞一
　　林正敏
豫一　高野秀男
　　松下順吉
專一　鈴木肇
　　原鐵三郎
　　日江井正己（記錄）
　　高橋廣三郎（器具）
　　久保孝一郎（記錄）
　　樫淵明
　　根本大
　　小柳英二郎
　　關岡賢治
　　清水一郎

新入部員歡迎會　四月十五日　於部室　出席者十九名

針葉樹編輯委員會　四月十八日　於新宿カピー　出席者　望月氏、森川氏、船本、大塚

針葉樹十號發刊につきかなり具體的な話をする。

新羅二郎氏歡送會　五月九日　於如水會館　出席者　（先輩）　十二名、（部員）　六名

五月十一日

今日は二週間振りで部室へ來た。家へ歸つて來たやうでホツとする。傷は大した事はない。繃帶もとつてしまつた。今日は學校へ行くと云ふ昨日床屋へ行つて來た。どうやら人らしく見えて來た。病氣中は隨分皆に世話になつた。感謝する。（樫淵明）

佐々木先輩訪問さる　五月十七日

久振りに國立へやつて來た。何日の間にか新綠につゝまれてしまつた部室に入つて五月の山が戀しくなる。奥又の計畫が出てゐる。行きてえなあ。扨小生本日徴兵檢査にて甲種合格と決定、愈々シヤバとも後半年だ。之より豫科へ行く。（NEW）

五月二十七日

どうも天氣がはつきりしない。山へ行つた連中の爲晴天を祈る。更に腹をこはしたが、極限に達した爲か、之以上消耗しない。（小泉）

六月五日

近頃部報發刊のプロセスが多少澁滯してゐるのではなからうか、何故部報を出さねばならないか、勞力に値する丈の價値があるか、等根本に觸れた問題は必ずしも解決されてゐるわけではないが、とに角やり出した事ではあるし、も少し熱意を以てやらうじやないか。（佐重）

六月二十二日

全く久振りに部室へ來た。まるで凄いブツシュの難行を終へて、ひらやかな尾根へ出た様な氣がする。昨日は早速陣場山へ登つて無限の青空の下で思ふ存分大氣を吸ひ込んだ。全く自然から遊離した生活は味氣ない。それは兎も角僕が試驗を受ける事が出來たのは、部員諸兄殊に小人數にもかゝはらず頑張つてくれた本科部員諸兄の御蔭だ。深く感謝する次第。

これからは正に我等の天下、大いに張り切らうじやないか。（岩崎）

——部誌了——

編輯後記

針葉樹九號以來二年餘の後、兎も角もこゝに十號を發行し得た事に深い喜を禁じ得ない。この部報の發行については、昨年春、かなり具體的な話が進められたのであるが、機未だ熟せず、と云ふ者もあつて更に一年を經過した。この一年の間ヴアリエーションの紹介と云ふ角度からは殆んど歩みを進めた様な行動も見られなかつたが、私達は何か催促される様な氣分にかられて十號を出すに至つた。からしてこの本が出來上つて行く。私はこの本の中に、私達の熱愛する山岳部を感ずる事が出來る。この若い感激の底に私は部報が懷く可き本質に突き當つた感を覺えた。そしてヴアリエーションの紹介を以て殆んど再現し難い困難さを以て行はれた地域に對する私達の研究の不充分、等を貫いて、尙別な角度から部報を出す事の意識に支へられて來た。然しこの意識が私達の前進に對して積極的な意味を持ち、又何よりも必要だとは思ひ乍らも、それがこの様な形式の部報と結びつく點については必ずしも疑なきを得なかつた。

然し兎も角も今十號を編み了へて改めて考へられる事は、登山、遠征、部報等の一切の私達の行動が單に經濟的とか、時間的とか、色々な意味の餘裕に基くものでなく「一般社會」からの批判に堪へ得るものを持つてゐなければならぬ點である。結局私達は私達の仲間の第一義的な問題を誤る事なく、それを見つめて前進して行く可きであらう。

終りに刊行に當つて種々御配慮を賜つた先輩諸氏、特に終始面倒な仕事を快く引受けられた望月達夫氏に深い感謝を捧げて擱筆する。（大塚）

編輯委員

岩崎利一　船本文治　大塚武

日江井正巳　山田亮三

昭和十四年九月十日
昭和十四年九月十五日

No.

編輯兼發行者　東京市杉並區荻窪四ノ一〇二（福田方）　大塚武

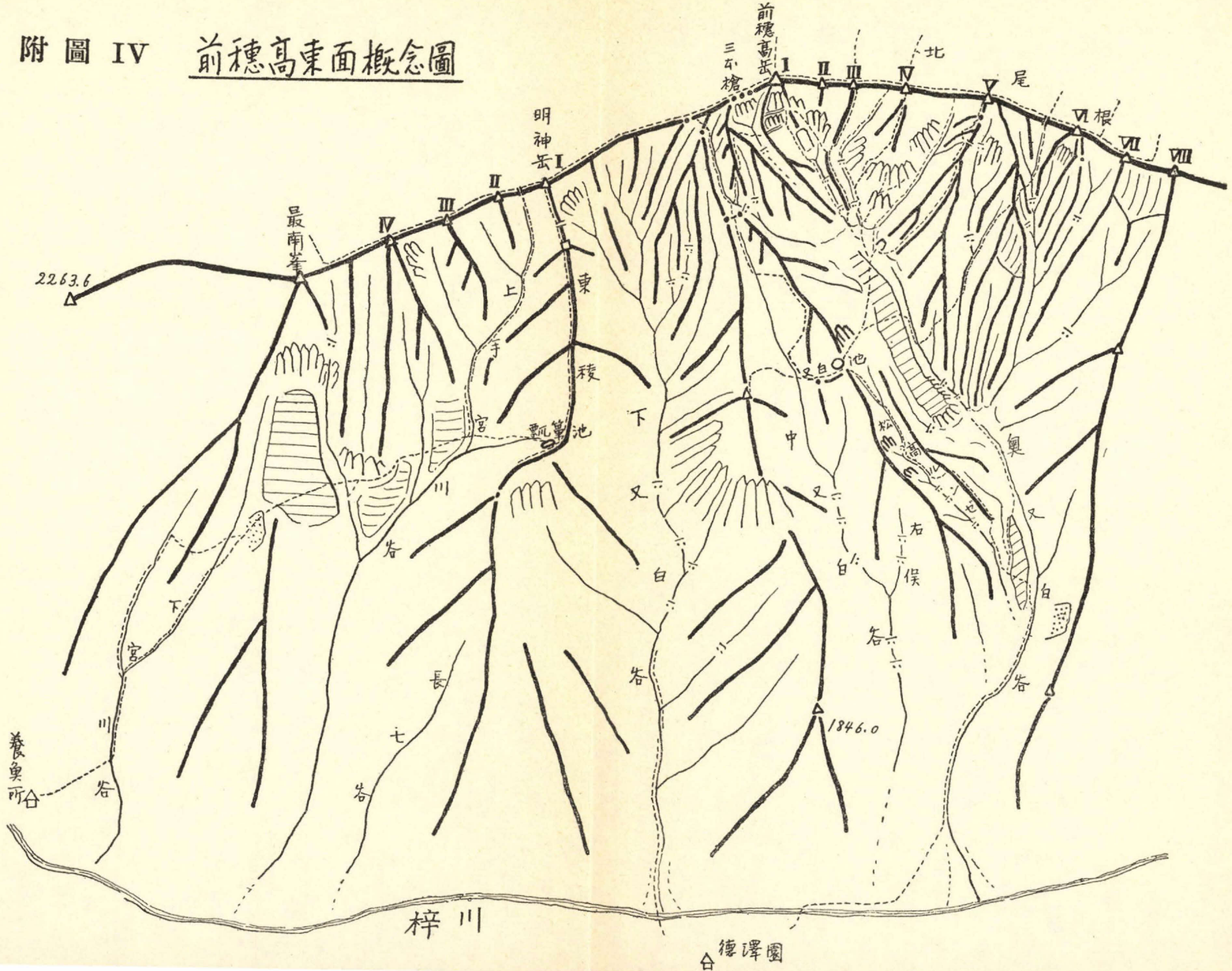
印刷者　東京市芝區濱松町一ノ一三　植田庄助

印刷所　東京市芝町濱松町一ノ一三　成文堂印刷所

頒價壹圓

發行所　東京府北多摩郡谷保村國立　東京商科大學内　一橋山岳部

附圖 IV　前穗高東面概念圖



三共 SANKYO

日常攝取する食物中他の榮養物が如何に豐富でもビタミンBを缺く時は種々の障碍を來します

脚氣がこのB缺乏によることは既に確實で疲勞倦怠、結核の進行、食慾不振便祕、妊娠産褥授乳時に於ける諸障碍（早産、惡阻、榮養障碍）等が起り、正常な健康を保持することが出來ません

ビタミンBの始祖たるオリザニンの補給は之の素因發生を防ぎ、諸症狀を防止するばかりではなく、進んで病氣に對する抵抗力を養ひ、體力を維持增進せしめる點で實驗諸家から賞用を享けて居ります

（粉末、錠劑、液、エキス、注射液）

詳細なる說明書進呈

体力

維持增進に

强力ビタミンB劑

オリザニン

（登錄商標）

東京●日本橋●室町

三共株式會社

昭和十四年版

山日記

日本山岳會編

新緑既に濃く、いよ〳〵登山シーズンを迎へて、待望の『山日記』昭和十四年版は愈々出來した。本日記の眞價と利便については改めて云ふまでもなく、初刊以來歷史を重ねること玆に十星霜、日本山岳會の會友會員の協力により內容については益〻整備を加へ、「登山の注意」以下收めらるる諸事項はすべて登山家の指針と案內をなすものに外ならず、本年版には特に「山小屋」と「登山團體」の修正增補を行ひたるほか諸點の改良もなし、本邦唯一の「山日記」たる聲價の發揚に一層の努力を拂つてゐる。山岳の魅力の逐年增大し、大自然の懷に心身の鍛鍊と慰安を求めること益〻必要とせられつゝある時、本日記は登山家必携の寶典として、また各年に於ける各人の活躍を長く殘す記錄として愈〻その效用を擴大するであらう。山々を想ひ、山岳を跋涉せんとする者は先づこの新版を備へられよ。

目次 登山の注意　服裝・用具・食料　登山用品表　登山及び登山衛生　應急手當　冬期登山　遭難信號　應急手當及び登山用食料目錄　高山植物採取規定　山岳寫眞要項　登山日程表　概念圖(日程表附圖一〇)　山小屋　山案內　全國登山團體一覽　雪崩方言分布圖表(二圖)　軍機保護法の施行と撮影等の注意　郵便規定・寒暖計比較表・度量衡

菊半截判三五二頁　レザークロース裝　地圖二〇　寫眞二　定價一・三〇　送料・六〇

東京一　神田ッ橋　岩波書店　振替東京二六二四〇



日本一の山岳雜誌
山と溪谷・第五七號

〔秩父・奥多摩・大菩薩第二輯の陣容〕

秩父の森林（原色版表紙）……茨木猪之吉
栃本まで……木暮理太郎
雁坂峠を越えた日本武尊……吉田浩堂
秩父産のスミレについて……清水大典
名登山家列傳マロリーの側面……石一郎
秋山村に殘る念佛踊……仁科義比古
奥秩父のスケツチブックから……中島道太郎
里近き秩父點描……植松威
山の魅力……甲賀三郎
奥秩父山名抄……原嶋歡作
九州の山・多良嶽と黒髪山群……竹内亮
兩神山と其の谷々……松本重男
（眞の澤）を拓く……志多清之介
倉澤谷溯行……清水長輝
金峯山登路について……小野幸
東北の山・峡底の仙境三面鄕……安齋徹
奥武藏の篤生帳から……兒玉貞平
和田の相馬……岩科小一郎
名案内人物語奥秩父山中小三郎……志多清之介
『秩父回想』……天利文彦
◇秩父・奥多摩・大菩薩山旅案内
1奥多摩の王者・三頭山　2三峯・太陽寺回遊ハイキング　3淺間尾根　4城峯山より三波石へ　5大菩薩嶺—大菩薩峠—日川下降　6大菩薩峠—大菩薩嶺—日川尾根—大瀧不動　7東澤溯行—甲武信岳　8十文字峠—甲武信岳—雁坂峠

春の大倉高丸から大ゴ澤へ……山路治雄
日原水源山脈を歩く……村田健藏
飯盛山より信州峠へ……小野幸
和田峠から木賊峠越え……橘田濟美
城峯山に登る……岩根常太郎
將監峠より白石山へ……福井幸男
三頭山より佐野峠へ……富井章介
棡峠と鹽の澤峠……道鏡山人

社山と溪谷
東京市芝區田村町六の四
電話（芝）五四三五番
定價一部六〇錢（送九錢）
年極參圓五〇錢（共送）

銃後の鍛へスポーツて



夏の用品売出中

崇高な山へ！

残雪に戯れ岩に親む山のシーズンが訪れました。

今夏は特に、専門的立場から國策調に造られた、滋味溢れる堅實な用品が豊富に陳列され御用命御待ち申して居ります。

ハイキングにキヤムプ用に履き心地良き

青年歩行靴　¥3.80

ピクニツク、小旅行に喜ばれる

ハイサツク　¥2.80より

野趣味とモダン味のカクテル

チロルハツト　¥3.50

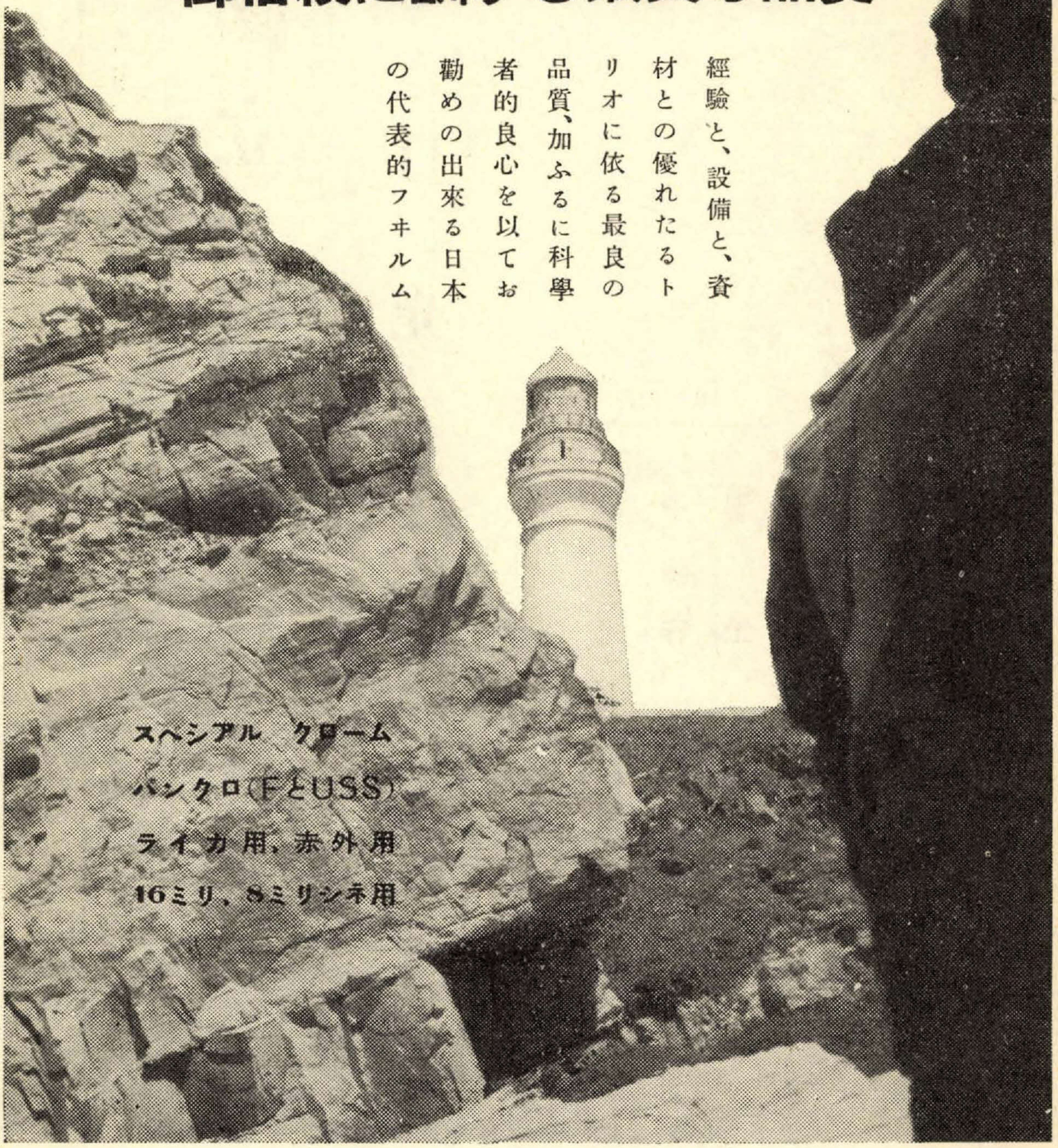
神田 小川町 **美津濃** 銀座 五丁目

東京・大阪・神戸・京都・名古屋

さくらフヰルム

御信頼に酬ゆる最良の品質

經驗と、設備と、資材との優れたるトリオに依る最良の品質、加ふるに科學者的良心を以てお勸めの出來る日本の代表的フヰルム



スペシアル　クローム

パンクロ(FとUSS)

ライカ用、赤外用

16ミリ、8ミリシネ用

東京室町三丁目 小西六 大阪・福岡・京城・大連

國立公園

日光へ

往復割引

浅草から東武電車

日光　三、八〇錢
中禪寺　五、八〇錢
湯元　七、一〇錢

山岳の用具
スキーの用具

銀座のお歸りにお立寄り下さい.
凡て完備した製品がそろつて居ります,
そして樂しい山を語らひに遊びにお出下さい.

白嶺社

京橋區京橋三ノ四　京橋々畔　電話 京橋 (56) 1456



寫眞の

御用は

キマタへ

杉並區西荻窪南側

キマタ寫眞館

電荻二二三三

泉溫澤野の雪

煙湯ぐ搖雪粉る昇ひ舞

スキーヤーの理想鄉



雪質良好・湯量豐富

飯山鐵道上境驛より三十町

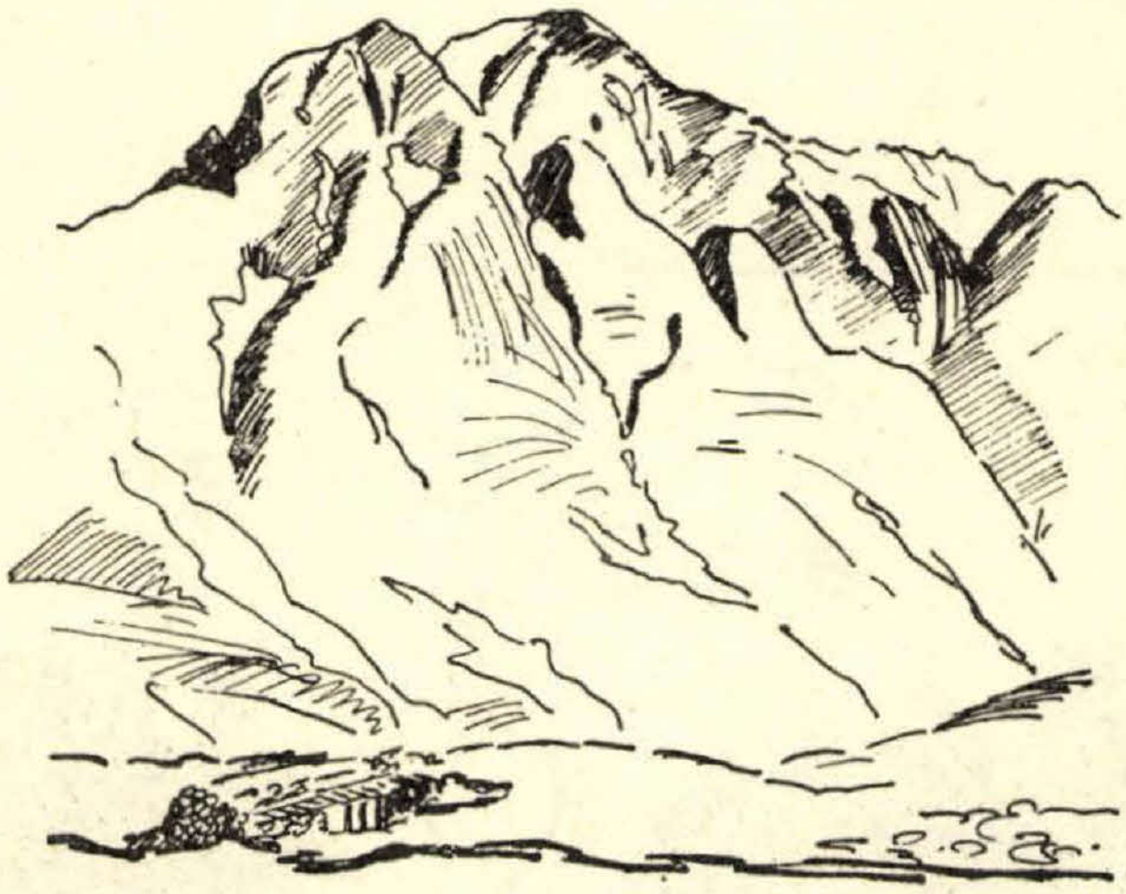
内湯

さかや旅館

電話十八番

北アルプス北端の雄

岳劍



八峰、源次郎尾根

三窓附近

のクレッテライ

劍澤のゾムメルシー

劍澤小屋

佐伯源次郎

富山縣中新川郡立山村芦峅寺

スバキ

登山とスキー具専問の店

鈴木テント登山具店

東京、神田、須田町角

電話神田(25)4125番

山とスキー専門具　仙臺・山内｛ピツケル　札幌・門田｛アイゼン

好日山荘　西岡一雄　大阪北區堂ビル前大阪貯蓄銀行3階　海野治良　東京神田小川町1の10



箱根土地株式會社

皆様の寫眞は

今井で

中野區氷川町24

省電　東中野西出口前

電話中野3992

堅・美・廉

登　山　靴　　ハイキング靴

スキー靴　　スケート靴

黒田の靴

下谷區仲御徒町4ノ53

上野驛前交番前

電話下谷660番

振替口座東京59956番

スキー靴と登山靴

地方御注文の節は足形及足袋文數を御申越次第實費代金引換小包にに御送附申上げます

各大學山岳部御用

津布久靴店

牛込區肴町60　電車通

電話牛込1460

憬の神秘上高地

自然に親み
自然に融合す

山のホテル

徳澤園

徳澤園は皆様の**山の家**であります
どうか**徳澤園**を御愛用下さいませ

國立公園上高地

中ノ湯温泉

ユルプス登山の關門登山準備所
温泉湧出多様にて多量効能絶大
入湯に・登山に・觀光に

松本・島々ヨリ自動車ノ便アリ

穂高連峯への
唯一の根據地

改築中の穂高小屋は
今冬のシーズン迄には完
成の豫定で御座居ます

北アルプス

穂高小屋

今田重太郎

日本アルプスへの
出發點

松本驛前

飯田屋旅館

アルプス食堂

電話二七番
六一四番

上高地

山宿 **西糸屋**

奥原英男

電話上高地六番

位置　上高地の心臓部

設備　賣店、山のデパート、山岳土産樂燒窯、喫茶、山の料理、ラヂオ

特色　案內組合聯絡所　山の梁山泊

主人山を語る　家庭の延長　心の宿

登山キヤンプ岩魚釣自動車等の斡旋サービス

宿泊料　2圓位　團體は特に御相談に應ず

燒岳小屋　位置　燒岳峠　燒岳唯一のオアシス

特色　夕陽沒光天下の絕觀一泊も可哉

島々宿　總本店　德本峠越山へのスタート準備所

上高地

大瀧小舍

大瀧より蝶へかけての尾根は一面のお花畠で且つ展望雄大アルプス第一の景觀です。

德澤から四時間

小舍收容人員　250人

宿料　¥2.50

槍岳

殺生小舍

槍といへば必ずこの小舍の名が浮ぶ位の歷史をもち、喜作の立てた小舍です。夏なほ附近でスキーが樂しめます。

穗高案內人常備

島々郵便局出張

中村喜代三郎

東京府下國分寺本多二六四

富士を繞る

剛健旅行！

富士登山と五湖廻り

富士の裾野歩き

三　ツ　峠（岩登り、芝スキー）

石　割　山　　杓　子　山

御坂山塊　　天子山塊

御正體山　　愛　鷹　山

（案内書贈呈）

富士山麓電氣鐵道

東京丸ビル五七三區

電丸の内三六七六番

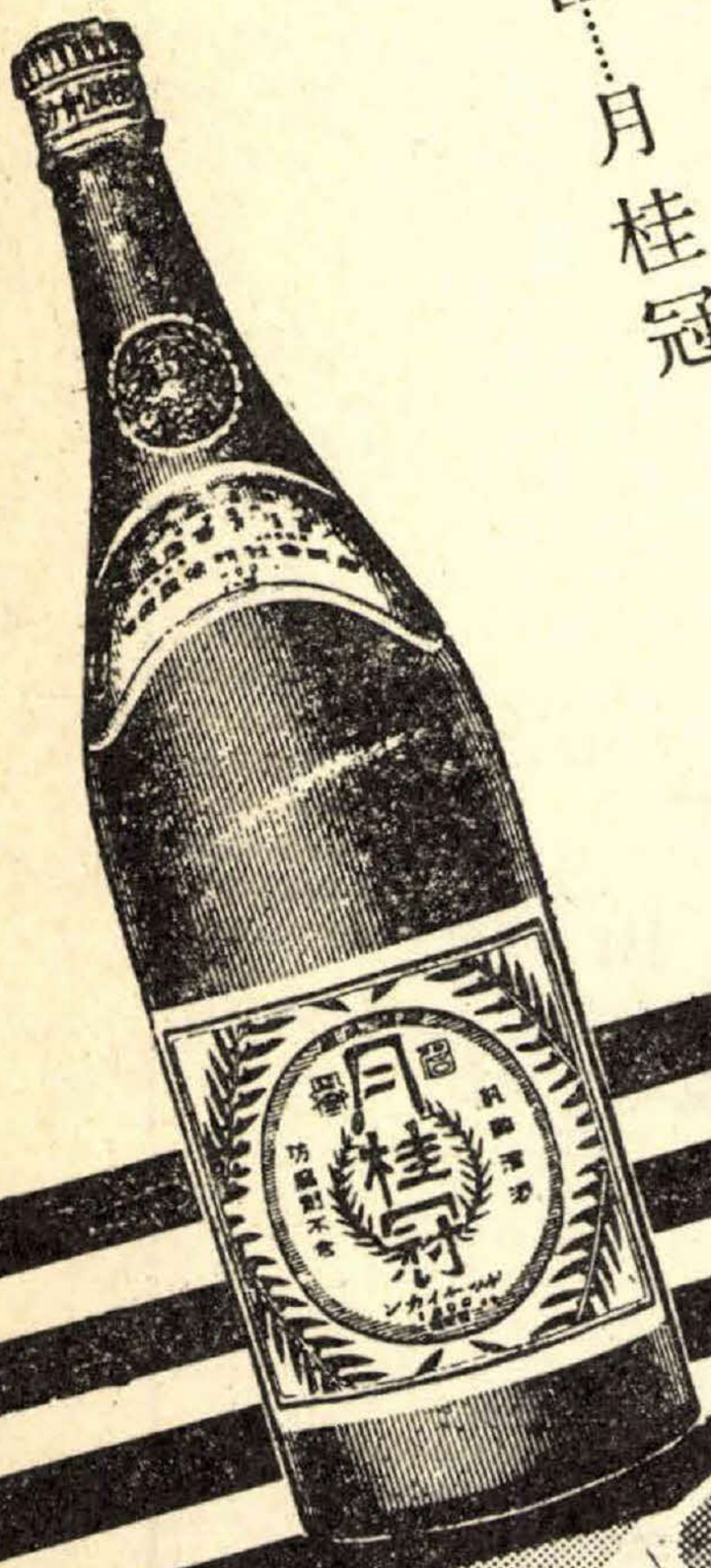
特製月桂冠

絶對に防腐劑を含まず

一本毎に衛生試驗所證明封緘付

日本人には……米の酒

榮養豊富……月桂冠



月桂冠壜詰

賣發屋治明式株會社

ニューライオン

歯石潔白洗薬

専賣特許

産額東洋一

ニューライオン

齒石潔白洗藥

1本 50セン

專賣特許

活性化粧酵素入

泡立ちよくてもちのより

ニューライオン

化粧石鹸

1個 10セン

東京・芝・日産館

日本油脂株式會社

雪の五色温泉

理想的なスキーゲレンデ
吾妻山塊スキーツーアの出發地

奥羽線板屋驛より卅丁
山形縣五色温泉

宗川旅館

乘鞍岳スキー小屋

山麓キャンプ場の氣持良さ或は白樺と杏の林。
野麥峠越え其他八方へのコースの面味さは乘鞍ならでは味はれません。
冬は廣大なゲレンデを滑降する樂しさ。
夏は愉快な乘鞍のお花畠に遊ぶのも一興であらう。
洋々たる雲海の眺め眼界の廣さ。高山の靈氣に觸れて銃後體位向上のため是非この山に遊ばれん事を。

所在地：乘鞍中腹小雪渓森林限界附近

交　通：小舍まで　松本より6時間
　　高山より9時間

山の様子は下記へ問合せ下さい

信州南安曇郡　安曇村番所　**齋藤安一**

さゝやかな店で御座居ますが自由で態とらしからぬ、そして床しい感に満ちた、御洋服の贈物を致したいと存じます。

御報參上（御來店奉仕）

サックスーツ
ユニフオーム
オーヴアコート

今野洋服店

神田區神保町二ノ四
（市電）專修大學前
電九段（33）三五九一

元主婦之友寫眞部勤務

西荻窪駅前女子大學通へ約半丁

イナガミ寫眞館

電話荻窪三五七六番

商大教科書の御用は

萬寶書房へ

本店　吉祥寺二〇四七
支店　國立驛前

1．本書は，東京商科大学・一橋大学一橋山岳部々報『針葉樹』第１号～第13号の復刻版（限定100部発行）である。

2．本書の第１号～第６号は近藤恒雄氏所蔵本に，第７号～第13号は一橋山岳部所蔵本にそれぞれ原本を求めた。

3．復刻版発行の経緯は第13号の巻末に附したのでこれを参照されたい。

『針　葉　樹』第10号　復刻

昭和60年７月25日発行

復刻版発行者　針　葉　樹　会

編纂担当責任者　佐　藤　久　尚
世田谷区船橋５-30-10

印刷所　(株)　平　文　社
豊島区南大塚２-35-７



自他共に許す

片桐のテントとリュックサック

更に一層の努力と研究とを以て皆様の御期待に副ひたいと願つて居ります。何卒御用命下さいませ。

営業品目

テント、リュックサック、スリーピングバック、スキー帽、アザラシ皮、ノールウエーバンド、アイゼンケース、ピッケル等

東京市神田區神保町三ノ一（專修大學電停前）

片桐テント登山具店

電話九段（33）三二一〇番

